

明治四十一年度

第七回創立記念式式辭（大要）

「明治三十四年四月廿日、現理科教室の前にテントを張つて、開校の式をあげたが、當日も慥か午後二時からであつて、今頃は雨が降り出して大いに困難であつた」として、先づ懷舊の情を述べられ「今日このうらゝかなる第七回の記念日に於て、併せて香雪化學館及び晚香寮の開館、開寮の式を擧ぐる事は、最も愉快に感ずる所なり」として、次いで「本校が過去七年間に於ける收獲は外形のみか、内容も比較的豊富であつて、これは實に本校の發起人、創立委員、賛助員諸君、及び教職員諸君の熱心なる助力と、懇切なる指導とによるものである。然しこれ等の諸君に對して果して感謝の辭を捧ぐべきが適當であらうか、これ等の諸君は平生相互に感謝し合はうて居らるゝのを見る。即ち人に頼まれたのではなく、生涯深く抱かれて居る目的の爲に捧げられたので目的の爲に一致協力して居らるゝのである。この精神こそ本校を今日あらしむる基礎をなしたものである」として、本校の過去七年間の收獲の二三を述べて、今日の感謝の念をあらはさんと、

「先づ創立當初から期して居る教育に於ける官民の一致を計つ

た事である。即ち教育は國民の自由主義、個人主義を土臺として起つたものであつて壓制的、機械的、迷信的、傳説的では到底眞の生命を養ふ事は出来ない。それで從來の私立學校の如く一人の營業の如くなる事や、或は從來の官立の如く全く専制君主國となつて、民間に毫も交渉なきが如き宿弊を矯めて、本校は社會各方面の人々の同情及び財力によりて成立せられ、私立といふよりも寧ろ民立といふ有様を以て社會的、公共的に經營せられてゐる。而して近來我が社會に於ても、官立も民間有志者の寄附金を容るゝが如く、次第に國民と相提携するに至り、私立も亦門戸を廣く社會に開放して、社會的公共的に教育事業を營まんとする傾向あるに至つたのは誠に喜ばしい現象である。

第二に本校は獨立自給の精神を貫いたのである。各方面の多くの同情者によつて、今日あるを致したが決して官にもよらず、金持にも、勢力家にもよつたのではない。多大の寄附をせらるゝ人も却つて感謝の言葉を以て出して居られる。今日開館の香雪化學館の如きも藤田傳三郎氏の寄附であるが、決して義理づくに出されたのではない。生涯の中に、何か國家の爲に捧げたいといふ念慮から寄附せらるゝに至つたのである。澁澤男爵の晚香寮寄附も男爵が兼ねて懷抱して居らるゝ主義の爲に捧

げられたのである。即ち維新前に於ては商人と女子とが社會から仲間外れにされて居つたが、世界的日本となつた今日では、商人も國民である、女子も亦國家の一半であるから共に大いに發展しなければ國家は進歩しないのであるとて、國家の前途を慮られて、本校創立當初から、心身を碎いて助力せられて居るのである。その他豊明館といひ、華山寮といひ、本校の建物は皆人々の美はしい精神が土臺をなして出来て居り、この精神を記念する爲に建物には何か意味のある名を附してある。これは歐米の社會に於て、偉人功勞者の銅像を作り、碑を刻んで其の時代の尊い精神の固りを後世に傳へ、其の感化を永遠不朽ならしむるものと同様に、かくの如く多くの記念すべき建物の名稱は、集つて美はしい校風をつくる上に効果あるべき事は、何人も否む能はざる所である。

第三には本校の主義とする理想的の人の和を得た事である。これは心と心の結合であつて、相互に交換せらるゝ深い同情心である。我々は屢々意見を異にして激論もするが、決して私情の爲ではないから、その衝突によつて、互ひの結合は一層鞏固となる事が出来たので、社會の各階級各方面の人々が、一つ目的の爲に一致協力して、今日の理想的關係をつくる事が出来たのは、余の三十年來の渴望した生命の萌芽を見出し得たのであ

る。

第四には本校が獨り人の和を得たのみならず、其の設立は天の心に適ひ、天の時に遭遇せる事である。これは迷信でも獨斷でもなく、確乎たる論據のある所で、過去一萬年の人文史、及び世界の歴史に徴して信仰し得る所以である。我々の導ける運動は慥かに世界の大勢に適し、我々が熱心に渴望し目的とせる點は、宇内の大傾向に合致せる事で、三十年來の我々の經驗と世界の進歩に徴して間違つては居らぬ。即ち一千年眠れる東洋は、今や日本の力によつて、醒めんとして居る。此の時我が日本に新たに必要なる力、特別入用なる財力は、實に長夜の夢を貪れる我が國婦人を醒まして、人類の半面を生かすより外に途がないのである。余はこの意で本校の事業が天の意に適ひ、その設立が天の時に合ふたといふ事を信するのである。而して此所に結べる人の和即ち宗教的關係といふ外、言葉を見出すに苦しむ程、神聖なる人の和は、今後一層擴大せられて社會人心の上に一大感化を及ぼす事が出来る事と信ずる。これ實に合理的、經驗的の宗教の發生といふべきである。斯くの如く永久不滅の生命の萌芽を見出しその高尚にして力ある精神が全體を支配するに至つた事は、感謝に堪へぬ所である」云々。

〔「家庭週報」第百四十一號〕明治四十一年四月

女子の高等教育は

下女頭を作る丈でない

近頃有力なる當局者の説によれば、高等教育とは職業教育であつて女子の高等教育も又職業教育に外ならぬ、女子が高等教育を受けるのは不幸なる少數の女子に限るものであつて、これ等高等教育の卒業生の價値は單に一家に於ける下女頭を作るに過ぎぬとの僻説を稱へるものがあるが、果して事實なりとすれば今日の高等教育は職業を得んが爲で、生活の方便として受けるに過ぎない、良妻賢母とは子供の世話を善くし最も高等なる下女を養成するものである、故に十分なる資産のある家に在つては善き下女さへ使用すれば主婦の高等教育は不必要であると云ふが如き點か見へるのである、是れ果して今日我國の時代の要求に叶へる學説であらうか、私の考へでは高等教育は無無論職業教育をも含んで居るが、只高等なる職人を作るの意味では無くして、十分なる人格を養ふて其土臺の上に十分なる専門教育を築くと云ふ意味になるべき筋合のものと思ふ、高等教育の目的は國民性を完全に發輝する事、人道主義の目的を充うする事、近くは個人の理想を實現し、國家の運命を開拓し、人類の改善

進歩を計る事が理想であり、目的であるに相違ないと思ふ、左様な目的を立てると宗教的で、甚だ大きくなるが教育の目的の内には如斯廣い目的があると思ふ、昔より何れの國の歴史を見ても教育の進歩擴大の原因は矢張り國家の運命を開拓し、國の危急を救ふと云ふにあるのである、假令ば獨乙が以前貴族の手より教育を擴大し普通教育を總ての人民に施して國を興したのはナポレオン戰爭に原因して、此の戰爭の結果獨乙の義務教育を生出したのである、又英國の大學擴張及び自由教育制度を採りたるは悉く國の政治に關係ないものは無い、然らば我國に於ても今日商工業の戰爭の上に國運發展の目的を達する上に於て如何なる原動力に依る可きかと云ふに、我國の青年の力による外はない、則ち國の運命は實に二十五歳以下の青年の輿論にかゝはつて居ると云ふてよい、其青年の元氣を養ふ原因となるものは則ち母である、婦人である、其婦人の教育は只下女頭を作るが如き賤き理想の許では作られぬ、一國の運命を支配して往く文明の母となるの理想を以て高等教育を爲す可が教育の目的で無くてはならぬ事と思ふ、大學教育が只大學校の中にのみある間は我國の文明は未だ／＼進んだものと云ふ事は出来ない、學校に在る間丈け精神が活動して居つて、社會に出た后ちは其活動が止まつて仕舞うやうな事では眞の教育は出来ない、

然るに社會の壓迫は非常に強くして折角く出かけた芽を毀けやうとして居るのである、自分は何處までも大學擴張につとめて一國の運命を開發せねばならぬと思ふて、其方針を以つて力を教育事業に盡して居るのである。

〔新婦人〕(第四百四十四號) 明治四十一年五月

結婚の用意

女子の結婚と云ふ事は第一人の妻となり、母となると云ふ許りでなく、家庭の中心となり、其調和を計り、其幸福を増進する事であつて、其調和は家庭の道德、社會の道德の源泉となり、社會的勢力の多くは茲に其源を發するものである、故に結婚の當事者たる男女の將來に於ける進歩發達に大なる影響を及ぼすのみならず、社會の進歩發達にも其影響は少なくないの、個人問題としても、結婚は最も慎重なる考慮を要するのである、茲に其要項を擧ぐれば、

第一 體格が完成して居らねばならぬ

女子が結婚するに就ては人の母となる覺悟がなくてはならぬ、其母となる適合すべき體格を具へて居らねばならぬ、先づ中等教育を卒つた七八才の女子には體格、知識、理想、品性

等も略ぼ備つてあると云はるゝも、何れも其萌芽に過ぎないので、夫等のものが、枝を生じ花を開き、實を結ぶには、適當なる教育と修養に由りて充分に其根を張り、其幹を育てなければならぬ、之は二十歳以上にならねば望まれぬことで、只だ體格が完成する許りでなく、身體に對する智識も充分に發達せなければならぬ、米國では女子が二十歳以上になれば、馬鹿か醫者となると云ふ諺がある、即ち普通智識を有する人は自分で自分の身體に注意し、従つて其智識も發達して居るが、若し此智識が缺けて居ると、自分の身體を守る事が出来ないのみならず、子供を充分に育てる事さえ出来ないのである。故に身體の健全に發達しない者が結婚するのは、自から悔いても及ばない禍害を醸すのみならず、其禍害は子孫にまで遺すと云ふ慘憺たる結果を來すのである。

第二 智識が發達し居らねばならぬ

頭腦の發達は更らに必要である、即ち自分で自分の爲すべき行爲を適當に判斷し得る能力を是非備へて居らねばならぬ、選擇を誤らぬ丈夫の智力を備へて居らねばならぬ、先づ夫の選擇に就ても、最後の決定は自己の判斷にあるので、又た一家を治むる上に於いても、夫に對し、子女に對し、家族に對し、親戚に對し、社會に對し、自己の本務を了解し之を標準として判斷

し、決定するは頭腦の力でなければならぬ、此能力が發達して居なければ只だ一身を誤るばかりでなく、一家を誤り、子孫を誤るに至るのである。

第三 人格が出来て居なければならぬ

結婚は女子が自分を没却して夫の家に嫁するのではない、妻として新たに家庭の要素となり、一家としては社會の要素となるのである。故に人の中に立ちて人と共に調和し、一家の調和を計り、親戚の關係を保ち、其境遇に順應して一身を處する許りでなく、社會の狀態に順應して一家を處する許りでなく家庭を進歩發達せしめ、之を社會に及ぼさねばならぬのである、即ち其主義理想を實行するの品性、人格を有せなければならぬ、自己を制する克己も境遇に應ずる忍耐も、調和も、同化も、皆其人格により自然に發現せられなければならぬ、其堅固なる主義信念も人格と一致した者でなければ圓滿なる家庭を營む事は出来ぬ。

第四 先方を知る方法

今日の日本では西洋の如く青年男女が交際して、自ら其配偶を選択する事は許されぬ事情がある、併しながら、先方の血統、品性、主義、教育、趣味等に就ては充分に之を知らねばならぬ、今日の場合人は人を通じて知るより外に途はない、即ち父

母、先輩、親友等を通じて其人の性質、趣味、品性等を知るのである、其最後の決定は自己の判断に由る外はない、然れ共兩性間の問題に就ては、感情理性共に誤り易いものである、故に尤も信すべき人々により其忠言に耳を傾け、慎重なる思慮と、明白なる良心を以て之を判断する事が最も必要である。

第五 婚姻の目的

最後に婚姻の目的とする所は、財産や、學位や、位置でない、其夫たるべき人の人格である事を忘れてはならぬ、結婚後不幸の境遇に陥る者の多くは其官職や學位、財産等に誤られて、其夫の人格を知らぬより生ずるのである、故に先方の交際する親友等によりて其書齋に於ける讀物、室内の裝飾、平素の行爲、金錢の使用法等を聞き、其趣味、品性主義等の大概を判知すると共に、又た自分を知る事が必要である、即ち體質の如何を考へねばならぬ、趣味品性も顧みねばならぬ、更らに道徳主義が一致して居らねばならぬ、全然一致しない迄も、相感化し、相恕し、融合し得べきものでなければならぬ、其教育の程度も相近き者でなければ之も又不幸である、其趣味、品性も教育の程度によりて非常に逕庭を生ずる者である、趣味品性の異なる所には同情の通づる者でない、同情もなく融合もなき家庭は、到底墮落するより外に途はないのである。

以上述べたる如く完成した體格、健全なる智識、強固なる人格を以て誤りなき判斷により相結ばれたる婚姻でなければ、其家庭は圓滿なる家庭と云ふ事は出来ないのみならず、延いて子孫に及ぼし、社會に及ぼし、國家に及ぼすべき影響の如何を考ふれば結婚は實に個人問題としても、社會問題としても、非常に重大なる關係を有するものである、故に是等の諸點に就て充分に考慮を要する事と思ふのである。

〔「新婦人」第百四十五號〕 明治四十一年六月

各部の使命

人類の歴史が始まつてから今日迄、凡そ五千年間の世界の進歩、國家の興亡、或は思潮の變遷を活眼を以て深く探究するならば、我々は其處に根柢から相反して居る二つの潮流があつて、夫れが絶えず衝突し矛盾し、其の結果多くの歴史上の波瀾曲折が生じた事を見出すのである。又人類の五千年の歴史に鑑る迄もなく、我が國の建國以來二千五百餘年の歴史を顧みても、猶小さい所で云へば、我々一個人の心の中の働きに徴しても、之を明らかに認める事が出来る。然らば其の根柢から相反して居る二つの潮流とは何であるか。即ち自由と束縛と云ふ言葉

以て之を云ひ現したならば宜しいかと思ふ。自由と束縛とは獨り政治上の問題ではない。宗教にも、道徳にも、藝術にも、教育にも之はある。而して今日私の申すのは、決して政治上の自由ではなく、又表面の形式的の自由でもない。一言で云へば、釋迦や、キリストが人類に與へんとした、根本の心の自由を得て、之を實現する事である。此の自由を得て居らない人は、未だ名譽とか、利益とか、欲望とか、迷信とかに支配されて居るのであつて、斯かる人は或時は權勢に屈し、利欲に迷つて己の信ずる所を實現する自由がない。斯くの如く未だ奴隸の境遇にある人に眞の進歩はある筈がなく、従つて斯かる人々に組織される國家社會には、獨立もなく、自由もなく、進歩もないのである。然らば眞の自由とは何であるか。或人は自由を曲解して、自由は我が儘、利己、放逸等の弊を伴ふものであるかの如くに思つて居るが、之は大なる誤りである。若しもあなた方は我が儘であり、利己であるならば、自分の惡癖を、一つ直す自由すら與へられない。一つの惡癖があるために、常に人との關係を破り、何事をするに當つても此の癖に支配されて少しも思ふやうにならないのである。之に反して己を能く顧み、己の我が儘を制して眞理に順つて行く事の出来る人は、努めるに従つて良習慣を養ひ、善き品性を養ふ事が出来て、遂には考へる事

と行ひとが少しも矛盾しない様になり、自由を得る事が出来るのである。あなた方が體操をするのでも、初めの内は手や足が横に曲つたり、眞直に伸びなかつたり、機敏に働かなかつたりして、少しもあなた方の思ふ様に美を現す事が出来ないが、自制して練習を重ねるに従ひ、段々身體が自分の意志に従つて働く様になり、遂には全く無意識で少しも努力しなくても能く音楽にも合つて、美を現す事が出来る様になる。之は練習によつて、自由を得たからである。つまり自由は修養により努力により、知識経験に依つて始めて得る事の出来るもので、我が儘利己等は自由の敵である。夫れから束縛と我が儘とは、一寸考へると無關係の様であるが、事實は決してさうではない。甚だしき束縛の半面は常に我が儘であり、破壊であつて、之は歴史に就いて見ても明らかに解る。十六世紀から十八世紀にかけて、度々種々の争闘があつたが、其の原因は皆束縛を逃れ、自由を得るにある。三十年戦争は、舊教徒が宗教上の我が儘を恣にし、人間の信仰の自由を束縛して、新教徒を壓迫した爲に起つた。ルイ十四世から、ルイ十六世に至る代々の佛國王が、國民に非常の束縛を加へ、自分は我が儘をして少しも省みなかつた爲に、これが近因となつて佛國の革命は起つた。酷い束縛の反動として、到る所に國民は破壊我が儘の暴力を振り、彼の史上

に有名な恐怖時代、暗黒時代を現出した。其の結果國王の王座は破壊され國民も亦非常な不安不幸に陥つたのである。夫れから英國は新大陸の殖民地に對して我が儘をし、利己を逞しふせんとした爲に、米國獨立戦争を惹き起し、遂に新大陸を悉く失ふ様になつた。而して米國は之に依つて自由を得、其の結果僅か百年餘の間に非常な進歩を遂げて今日の盛大を致したのである。實に眞の自由は凡ての事物を生み育て、行く母であつて、束縛、我が儘は、之を殺す刃である。釋迦、キリスト、ソクラテスと云ふ様な世界の偉人が、生涯を擧げて人を救ひ世を救はんとしたのは、つまり人類を束縛から救うて、自由を與へようとしたのである。

將來我が國運が一回轉して、非常な勢を以て發展する様になり、眞に東洋の救濟者として、又東西文明の調和者として茲に新しい生命を世界の文明に加へる事が出来るか、或は悲惨な運命に支配されて自滅する様になるかは、全く此の自由を得ると否とに依るのである。自由を得ると否とに依つて、國運の消長、人間の死活を豫言する事が出来ること云ふのは何故であるか。又我々は之を得る爲に、如何なる決心をし努力をしなければいけないか。猶之を細かに分けて、教育部として努むべきは何處であるか。文學部の使命、家政部の使命は何であるかに就

いて申したいと思ふ。然し斯様に區別しても、此の三部は互に離るべからざる密接の關係をもつて居るのであるから、教育部の人と雖も、文學部の使命に就いて深く御考へになり、文學部の人も、家政部の使命を注意してお聽になる様にしたらば、私の申す自由と云ふ事の眞意も、亦あなた方の使命も自ら能く御解りになるであらうと思ふ。

一、教育部の使命

歐洲大學の起源及び其の特色―如何なる處に價值ある教育は施されしか―我が國の教育界―教育部の使命

何れの時代に於ても、社會には官と民との區別がある。由來東洋の弊風として何事に拘らず官を貴び、民を一概に卑しめる。我が國も亦、此の官尊民卑の弊を受けて居る所が少くないのである。教育界にも此の官と民との二種類があり、従つて學問上にも亦種々の區別がある。故に大學と云ふ様な高等の教育機關で一方では社會の指導者たるべきものであるから、官と云ふ模型の中に這入らなければ、未だ價値を認めないと云ふ有様である。そこで我々は、今までの世界の文明に著しい影響を與へた程の大きい人格は、所謂官立と云ふ様な模型の中から生れ

たのであるか、或は束縛のない自由の教育によつて出來たのであるか、又學校就中大學の様な高等教育の機關は如何なる必要のために世に生れたかと云ふ事に就き、深く研究する必要があるであらう。之に就いて私は、昔から教育史と、殊に獨、佛、英、米等の今日の文明の根源を調べて茲に澤山あなた方の參考に供すべき材料を持つて居る。然し今は夫れを一々列擧する暇はないから、其の極く一部を申して置きたいと思ふ。

歐洲大學の起源及び其の特色 今日世界の大勢を支配して居る歐洲文明は、遠く希臘に其の源を發して居り、又其の文明の進歩に非常な力を與へた大學教育の起源も、矢張り此の希臘である事は既にあなた方のよく知つて居る所である。彼の大聖ソクラテスは、ジムナヂウムに於て、青年に自由を教へた。プラトンのアカデミー、アリストートルのライシヤム、ツエノンのストア(ストアとは希臘語にて彩色した堂と云ふ意此處にてツエノンは其の教を説きたればなりストア學派の名亦之より出づ)之等は皆、今日の大學教育の起源と見るべきものである。始めて大學が設けられたのは、今から八百餘年前、伊太利に設立されたのを嚆矢として、それから獨逸、佛蘭西、英國等にも、次々社會の必要に應じて出來たのである。當時の大學は、宗教、法律、數學、古典を研究する所であつて、其の時代には何れも皆私立であつた。然し一口に歐洲の大學と云つても國によつて種々の

特長がある。

英國大學の特色 牛津、劍橋等は英國大學の中でも古い大學で、其の學風には各々自家の特色があるが、矢張り其の中に一つ一つ一貫した所を見出す事が出来るのである。一般に英國の大學は、創立者の意志及び其の主義を確く守つて、組織等でも容易には變へない、一言で云へば中々保守的で、之が英國大學の長所でもあり又缺點でもある。

米國大學の特色 米國には國立の大學もあるが、之は實に微々たるもので、國民を動かし社會に勢力を及ぼして居る大學は悉く私立である。米國には文部省はないが、國民は自ら教育の機關を設けて官の命令とか獎勵とか云ふ事はなくとも、自分から進んで社會を教育し、國民自らが己の教育をすと云ふ風で甚だ進歩的である。此の進歩的の學風が米國大學の長所で同時に短所である。

獨逸大學の特色 英米に於て名高い大學が大抵私立であるのに反し、獨逸では善い大學は皆官立で、之は政略上から斯う云ふ様になつて居るのである。大學豫備校には種々の制限があり、随分壓制の様に感ぜられる程嚴重な教育を施して居るが、大學には自由を與へておいて、政府から無暗に干渉をし束縛を加えると云ふ様な事はない。それ故獨逸では、偉大な人物は多

く官立大學から出るので、之は米國、英國等とは丁度反對である。一二の例を擧ぐれば、英國ではダーウイン、スベンサーの様な人は大學へは這入つたが、學校ではその成績が悪く落第計りして居たのである。その外、ミル、カーライル、マコーレー、ベンサム、デカルト、ヒューム、ロック、ホツプス、ペーコン等、世界的大人物は大抵大學から出たのではない。米國もやはりさうでフランクリンとか、リンコロンと云ふ様な立派な人は、皆民間から出たのであつて、學位や形式の資格等は少しも重んぜられないのである。之に反し獨逸の大人物、例へばフイヒテ、ヘーゲル、カント、シュライエルマヘル、ウヲルフ、ルーテル、コペルニカス等は皆大抵官立大學の出身で、此の點に於て獨逸の大學は英米のと大いに趣きを異にして居るのである。

價值ある教育 以上の事實に依つてあなた方は、眞に價値を現した教育は如何にして施されたか、又教育界の官私の區別は如何なる所から起つて、如何なる關係を保つて居るかと云ふ事が略々御解りになつたであらうと思ふ。それからもう一つの事實は、世界中で女子大學には官立のものはないのである。唯官立の大學で女子の大學を許した所はある。然し獨立の女子大學は皆私立である。斯様に大學の歴史に遡つて見ても、官立でな

ければ本當の教育の出来ないと云ふ理由は少しもない。又官立の大學でも獨逸の様に、教育の自由を與へてある所からは澤山の人物が出て居る。官立だからと云つて少しも悪い事はないので、只其の學校には教育の自由があるか、又は研究の自由を得、興味を以て本當の學問をして居るか、否かに依つて其の教育の價値は定まるのである。

我が國の教育界 我が國では軍事を始め其の他の各方面に於て、獨逸の長所を採つた所が少くない。其の中教育の制度などは形式を多く獨逸に學んで居るが、しかし未だ其の精神をとるに至らないと云ふことが出来る。明治維新の大業が成つてからもう少しで半世紀に垂んとして居り、私が教育界の時弊を悟つて、是非教育の自由を得なければならぬと深く感じてから既に三十五年である。其の間統計の上から見れば澤山の學校が出来、就學者の數は非常なる勢を以て増加して來たが、教育の根本の精神には、未だ其の進歩を見出すに苦しむのである。然らば其の教育の根本の精神とは何であるか。

ディッケンスは英國の小兒に自由を與へる爲に、頭腦を絞つて有名な小説を書いた。シャフツベリーは生涯の名譽も榮華も棄て、英國の小兒と、奴隸に自由を與へんとした。佛のルソー、獨のフレイベルは、小兒に自由を與へよと説いたが、斯く

の如き教育の理想が容れられた爲に、英國は今日の發展をする事が出来たのである。けれども我が國はまだ教育の根本的精神なる其の自由と云ふ事を認めない。今迄兒童や青年は大人になる用意の時代と見做されて、人間としての自由を與へられなかつた。即ち機械的の服従、注人的、暗記的の學問を強いられ、所謂傳説的教育を施されて居たのである。然し世界の教育の大勢は如何であるか、之はデューイの言葉を引いたならば能く解るであらう。彼は「兒童の教育は生涯の用意の爲ではない、子供それ自身が生涯なのである」と云うて居る。兒童の生活も、大人の夫れと同じく深い意味のある人生であつて、子供の要求と大人の要求とは決して同じではない。兒童には丁度其の要求を満たす所の自由を與へなければならぬ。あなた方も知つて居る如く、兒童には抑へる事の出来ない研究心が自然に備はつて居る。之によつて兒童は自ら研究し創造して、始めて天性を發揮する事が出来るのである、即ち教育と云ふ事は形式の教授法に依つて、一定の科目を、小さな頭腦に注ぎ込む事ではなくして、兒童の溢るゝ計りの活力を自由に働かせ、之を有益に指導して其の求むる所を満足させる事である。一言で云へば、教育は兒童の本性を束縛するのではなく、兒童に眞の自由を與へる爲である。

然らば如何にして兒童に眞の自由を與へ得るか云ふに、是

は即ち社會的、團體的の教育に依つて與へる事が出来る。全體を自分と同じ様に思つて常に全體の進歩を計り、全體と合體して全體の幸福を目的として居る人は、如何なる非難に遇つても俯仰天地に恥ぢず、如何なる困難が出来ても愚痴や不平を起さず、常に非常な勇氣を以て自分の主義を貫徹する事が出来、又自分の意志を何物にも束縛されないのである。此の教育の自由を兒童に與へ、青年に與へると云ふ事は實に國力増進の根本的方法である。而して自由と個人主義とは相伴つてくるものであるが、個人の價値を認め個性の發達を計るのは、社會の進歩の爲に必要な事で、その間に少しの矛盾もないのである。然し之が極端に走ると利己我が儘になり、孤立主義になつて全體に非常な害を及ぼし、個人は又其の爲に自由を失ふに至るのである。伊太利の哲學者ブルーノは曰く「實力、知識は何に依つて完ふせらるるか、之は孤立して出来るものではない。他人に依つて完全になるものはない。然らば多數の中で完全になるのであるか、否、全體に依つて完成せらるゝものである」と。ゲートは何と云つて居るか、「眞の人間は如何にして出来るか、即ち凡ての社會の人道と共に、調和一致する事に於て出来るものである」と。教育の目的は即ち青年兒童を此の眞の人間たらし

め、自由を與ふる事に外ならぬのである。

今日經濟界が少し順調になつて、國民が此の上の負擔を喜んでする様になつた所が、夫れは一時の事で安んずるには足りない。今日は假令不振であつても、第二の國民の教育が宜しきを得て居るならば、我々は何も憂ふるには足りない。我が國の發展は期して待つ事が出来るのである。先進の諸國では夙に此處に着眼して、兒童と青年とに教育の自由を與へる事に大いに努めて居るのである。然るに我が國は如何であるか。國民を覺醒すべき教育者は、未だ自分の使命を自覺しない。教育の自由は未だ我が國民に與へられないのである。今日にあつては、教育は實に青年の苦痛である。如何となれば、彼等は好んで學問をするのではない、又非常な興味を以て研究をするのではない、其の目的とする所は品性でも亦實力でもない。只形式の資格である、一枚の卒業證書である。資格さへあれば學問社會の貴族になつた様なもので、實力はなくとも、勉強はしないで、資格と云ふ門閥で威張つて暮す事が出来るから、そこで青年は滔々として、之を得んが爲に必身を磨り減して居る。故に生涯の基礎を定めなければならぬ學生時代が、誠に無意味で不成功な結果を與へるのであるが、彼等は未だ其の原因を見出す事が出来ないで居る。彼等は未だ教育の自由、學問の自由を知ら

ないので實に氣の毒なものである。又一方には國家の爲に大いに悲しむべき事であると考へる。彼の資格を得んが爲に汲々として實力とならざる試験學問、形式的學問に頭を悩ませた支那や、朝鮮の今日は如何であるか。昔から名利の爲に學問をする國民の中から大人物の出た例は殆どない。斯様な學問の仕方では到底何の發見も、發明も出来ないのである。即ち自分の渴望する所を求め、眞に興味を以て學問をするのでなければ、生きた學問は出来ない。教育の目的は學問に自由を與へる事にあり。我が國民は教育の自由を得なければ將來國を保つて行く事すら難いのである。それならば眞に教育の自由を國民に與へるにはどうしたらよいであらうか。英國あたりで國民の保守の氣象を破らうとするのですから中々出来ない、資格や學位を以て人間の價値を定めようとする我が國民に、教育の自由を與ふる事は實に困難の極みである。之は到底政府の力を以てしても出来る事ではない。之は唯國民の母となる婦人の教育を改め、第二の國民の頭腦に夫れを宿させるより外に、根本から此の宿弊を改める途はない。故にあなた方の責任は實に重いのである。

そこでもう一つ考へなければならぬのは、即ちもしもあな方が此の教育主義を執つて行くならば、其處に非常なる困難を感ずるであらう。なぜならば社會には未だ從來の教育の弊を認

めず又教育の自由が如何に國民に大切なるかを悟つて居らない者が多い。其の社會に立つてあなの方が其の主義を貫かんとする時には、確に困難が起るのである。然し之は少しも憂ふるには足りない。學位や、形式は終極までの力ではない、學位や嚴重な束縛で人物を作る事が出来るならば、教育は實に容易い事で我々は晝夜こんなに苦心する事は要らないのである。然し人の心を動かし人に生命を與へて行くには到底そんな事では出来ない、又それで本當の教育が出来る筈はないのである。眞にあなの方に徳があり、實力があるならば、何にも恐るゝには足りないのである。此の後社會に立つて働かんとする時に多くの障害が起るであらうが、夫れは反つてあなの方を磨くのである。反對の聲は反つてあなの方に奮起を促すのである。我々の聞かんとするのは、其の稱號、資格ではなくして、其の實質である。即ち終極の力は決して上に貼付けられた金箔ではなく、又形式でもない、唯其の人格である。故にあなの方は今日我が國教育界の宿弊を看破し、之を根本的に改善する方針を立て、お進みになる事を、私は希望して已まないものである。

一、文學部の使命

本校文學部の方針―文學と科學との關係―文學と哲學―文

本校文學部の方針　女子に高等教育を施す必要ありや否やと云ふ事に就いては、今日は既に輿論が定まつたと見て宜しい。然し乍ら猶一部には反對の聲がないではない。反對者の云ふ所を聞くと、其の理由は高等教育は不必要であるからと云ふのではなく、大抵は婦人に文學、科學等の専門教育を施して、其の爲に婦人が傲慢になり、婦人の徳を破る様な事になつては困るからと云ふのである。高等女學校を卒業した計りで、考のまだ確に定つて居ない女子に専門の職業教育を施したならば、隨に其の弊は免れぬ事であらう。然し本校の教育の方針は何處迄も人格を作り、品性を磨くのを基礎とし、其の上に専門の知識を築くのであつて、學術を磨いて行くのと品性の修養をするのは、少しも矛盾せざるのみならず、此の二つは必ず相扶けて行かなければよい結果は得られない。品性の修養等はそつち除けにして、朝から晩迄料理なら料理、文章なら文章を書く事計りして居つたならば、一時は俄に技術が進む様に見えるかも知れない。然し假令技術が進んだ所が、品性が下劣で思想が低いものであるならば、到底永久に進歩して行く事は出来ない。成功した所で生きた料理機械か、戯作者か、書物製造人になつて仕

舞ふのである。それであるから本校の文科では、文學上の技術を養ふのと同時に、高尚な思想を養つて品性を高め人格を作ると云ふ事に大いに注意を拂ふのである。然し昔から極端な文學者は道德を輕蔑し、科學を敵視し、哲學の一端の弊を見て、直ちに之を全く排斥し、少しも其の間の調和統一を計らないで文學は何か特に尊いもので、人間社會を超越して居るかの如くに考へて居た。故に他のものは悉く輕んじて、其の爲に文學の領地を自分から狭くし、其の進歩を知らずして妨げて居つたのである。斯かる偏見を去り、公平無私の心を以て見るならば、文學程廣く大きいものはない。文學の領地は獨り世界のみではなくして、實に宇宙的である。文學的の要素は、獨り文學者が之を持つて居る計りではない。偉大な政治家、大なる教育者、科學者、哲學者は、皆之を持つて居るのである。ナポレオンは曰く「余は凡ての科學を愛する、科學は人間精神の一部に應用すべきものである。然し文學は夫れ自身が人間の精神である、文學は人間の心靈を教育するものである」とペーコンは、「文學の眞理を探究する人の爲には港であり、隠れ場である」と云つた。文學者が宇宙的の活眼を以て周圍を眺め、人間社會の凡ての活動の範圍を悉く文學の領地とする様にならなければ大なる文學は出来ないのである。文學の價値は何であるかと云ふ事を

知らず、只迷信的に文學を尊重して偏見に陥ると云ふ弊は獨り我が國計りではなく、歐米の天地にも少くはないのであつて、之が爲に文學を研究する人は、動もすると迷ひ易いのである。そこで私は今日之等の關係を明らかにし、且文學部の使命に就いて、一言して置きたいと思ふのである。

文學と科學との關係 最近の文學の傾向が甚だ科學と接近し、若しくは接近せんとして居ることは蓋ふべからざる事實である。一時是非の聲が甚だ盛んであつた自然主義等も、畢竟科學の影響を受けた爲に、從來の架空的の想像と、誇張した偽の形式とに反抗して起つた文學の新しい運動に外ならぬ。我々は我が國今日の自然派の作物の價置を認める事は出来ないが、これは自然主義の罪ではなくして斯かるものを歓迎する今日の社會と、又其の社會の闇黒面や、人間の獸性計りに興味を持つ創作家の人格の罪である。自然主義の起源、自然主義の本領、人間終極の要求即ち人生の眞は何であるか、と云ふ様な事は、此の前一寸申した事があるから多分大體お解りになつて居る事と思ふ。

ペーターは「我々には、科學の中に文學の領地がある、其の領分には常に想像が闖入するもの如くに考へられる」と云つたが、之はつまり科學の研究にも、文學の主な要素なる想像の

力を借りなければならぬと云ふ事である。又ある文學者は「科學は文學の總指揮官である」と云つて居るが、實に文學の研究が科學的にならない中は、文學は著しい進歩をする事は出来ない。自然や、人事を觀察し、又文學界の現象を考察するにも、分類し歸納する科學的方法に依らなければ正確の知識は得られない。文學を科學的に研究することに依つて始めて文學の主義が出來、又正確な文學の批評が出来るのである。デービ―は「若しシエークスピアや、彼と同時代に出た文學者がなかつたならばニュートンの頃頂上に達した科學の發見は出來なかつたであらう」と云つて居る。科學も亦文學的の要素、即ち興味、自由なる想像等を加へることに依つて、始めて進歩する事が出来るのであつて、文學は決して科學の敵ではない。否文學と科學とは互に相扶けて行かなければ決して進歩することは出來ないのである。

第二の關係は、文學と科學は其の形式に於ても一致する事が少くない。評論、論文等が科學的形式に依つて書かれてある事は云ふ迄もないが、其の他アーヴィング、パーク、コールリッジ等の歴史的、政治的、哲學的小説は何れも科學的形式をとつて居る。今日の寫實派、自然派等の觀察法、描寫法等は、矢張り科學的形式を文學に應用したものと云ふ事が出来る。それか

ら又歴史的演劇は、大抵科學的形式で作られてある。

第三に科學は文學の材料供給者としても亦密接な關係がある。文學者は材料を凡て自然から捉へて來る。而して科學の研究の對象は矢張り此の自然であつて、自然の現象を分解し組織的に研究して、其の眞を見顯はすのが科學の目的である。ダクター・クラークは「自然には科學的説明と、文學的説明とがある」と云つた。例へば科學者が、宇宙の法則を發見し、勢力の無限なることを明らかにし、萬有の力の調和統一の理を説明するならば、其の萬有の調和統一の裡にあつて文學者は其の崇高を感じ、直ちに之を詩とか、歌とかの形を以て現す事が出来るのである。フンボルトの詩に、コスモスと云ふのがあるが、これは科學の詩的想像に依つて作られたものである。夫れから又科學者であつても、自由、偉大な想像の力を借りて、先人未發の宇宙の法則の眞理を發見したケプラーの如きは、大いなる科學者であると共に、偉大な文學者であり、又豫言者であると言ふ事が出来るであらう。シャープの言葉に「科學的想像と、文學的想像とは同時に考へることの出來ぬものであると云ふことは、學説から云つても、歴史的の事實から云つても眞理でない」と云ふことがあるが、畢竟文學者が科學者と一致して行けないと云ふのは、互に頭腦の狭い小文學者であり、小科學者で

あるからで、文學と科學とが一致しない性質のものであるからではない。勿論科學の立脚地と文學の立脚地とは同じではないが、又其の形式、經驗する所、研究の態度も全然同じとは云へないが、其の實質に於ては同じものであり、且形式に於ても、今申した様に一致する事も出来るのである。眞に科學と文學との相通する所を見出し合體する事が出來たならば、兩者は互に少しも排斥する事はなく、且其の接近に依つて、科學は文學の趣味、想像等を要素とする事が出來、亦文學は之に依つて眞と云ふ要素を加へる事が出來て、互に大いに發見する所があり、新生命を加へる事が出來て、非常なる進歩を遂げる事が出来るのである。

文學と哲學の關係　マクス・ミュラーは「哲學は思想の科學にして、文學は思想發表の科學なり」と云ひ、又或人は「哲學は人の心靈の研究なり」と云つて居る。之を云ひ換ふれば、哲學は人間の心的活動を支配する法則を含む凡ての腦力、健全なる心的課程、及び思考法等を研究するものである。文學も同じく人間の心靈を研究するものであつて、其の實質は矢張り思想である。又哲學の研究に最も必要なものは、想像力と觀察力であるが、文學の研究に主要な能力も矢張り觀察力と想像力であつて、文學と哲學とは實質のみならず此の點に於ても一致し

て居る。之に就いて或人は、文學的想像と哲學的想像とは少しく趣きを異にして居る事を擧げて曰く、「詩的想像に依つて、吾人は自分の心に消す事の出來ぬ繪を畫き、哲學的想像に依つて、吾人は一般的心理の理想的概念を畫く」と。即ち我々は哲學的の想像を以て假説を作り、文學的想像を以て理想を作る。理想は人格を高める上に必要であり、假説は眞理の研究に缺くべからざるものである。而して哲學的想像と文學的想像とは、全然同じではないとしても、其の間に密接な關係のある事は明らかである。然し又或時には、哲學的想像と文學的想像とは全く一致する事もある。彼のミルトンの失樂園等は文學的想像であると同時に哲學的想像であり、又ジヨージ・エリオットの小説等も此の適例である。ペーコンは「哲學の目的は渾一の直覺である。此の渾一は何に依つて得るか」と云ふと即ち哲學的想像に依るのである。即ち之に依つて我々は凡てを統一して、非實在的の有様を實在に變ずる事が出来る」と言つた。即ち一を多數にし、多數を一にする事も想像力の働きに依つて出来るのである。故にある意味から云ふと哲學は理想である。此の理想はつまり哲學的の想像に依つて構成したのであつて、即ちプラトンの哲學等は理想の哲學である。而して高尚なる文學、偉大なる叙事詩は、想像力と理解力の協同の働きの結果である。それ

であるから文學は哲學に達する便利な道であつて、又哲學は文學に行く最も善い路である。即ち此の二つの界の間には、便利な道が通じて居るのである。而して今迄の哲學者と文學者との間に於ける、實際の傾向は如何であるからと云ふと、獨逸に於ては文學が哲學的に傾き、哲學は又餘りに哲學的に傾いて居る。夫れに反し佛國の哲學は文學的であり、文學はもう一層文學的で、哲學の要素を缺いて居る爲に、獨逸文學に見る様な重みと深さが佛國文學には乏しいのである。夫れから歐洲全體に就いて見ると、北歐は多く哲學的に傾き、南歐は多く文學的に傾いて居る、而して英米には、此の二要素を調和して備へて居る文學者が少くない。即ちエマーソン、ウオズウオス、ペーコン、テニソン等で、猶此の他にも澤山ある。夫れから東洋、殊に日本の文學には、支那哲學と印度哲學が含まれて居ると云ふ事は明らかな事實である。然し斯く云へばとて、文學と哲學は同じ基礎に立ち、同じ方法同じ目的をもつて居らなければならぬと云ふ事はない。否此の二者は各々其の境地を保ち、其の分を盡すべきであるが、若しも互に協力を忘れるならば其の分を盡す事が出来なくなるのである。それであるのに何故に文學者にして哲學を嫌ひ、嘲るものが多いかと云へば、これは哲學と云ふものは昔の形而上學の様なものだと思つて居るからで、

丁度今迄の道德が形式に束縛され、虚禮に流れた爲に、文學者に排斥されたのと同じである。然し今日我々が信じて居る最も進んだ哲學思想と文學とは、少しも矛盾せざるのみならず、文學から此の哲學的の要素を除き去つたならば、其の文學は實に淺薄な實質のないものになり、根據を失つて片々たるものになつて仕舞ふのである。スキッツランドの文豪デユナンは「哲學と文學には自然の接觸がある。大文學の起つた時代には必ず大思想家が輩出した」と云つて居る。文學の思想は、常に哲學的の形式をとつて居るものではないが、然し其の實質は必ず哲學的のものである。故に文學的時代は何時も非哲學的時代ではない。文學と哲學は必ず一致協力して進歩して居るのである。

第二には文學に、哲學的研究法を用ゐる事に於て、文學と哲學は密接な關係がある。文學の産物の原因結果の研究、説明、或は文學の實質の研究と云ふ事に就いて、其の他文學に現れて居る歴史的傾向、其の事實を支配する原理、及び著者の生涯、性格等を研究するには、どうしても哲學的研究法を用ゐなければならぬ。文學は人間の生活の皮相、事物の表面の描寫ではない、深い心の奥の發表である。肉眼を以て見る事の出来ない、手を以て觸れる事も出来ない所の精神とか、實在とか、眞理とか云ふ様な、最も人類社會の深い眞相を看取し、之を具體

的に説明するものである。換言すれば文學の取り扱ふ材料は、獨り科學的事實、及び表面に現れた事物の皮相に止まらずして、もう一層深いもつと嚴肅な心靈界に深く這入らなければならぬ。即ち哲學的でなければならぬものである。或文學者は「心眼が開けて、内界の光を見得る力が出来る迄は、到底眞の文學者にはなれぬ」と云つて居る。かの著名なるシュライエルマヘルは曰く「我々の頭腦が一般的、宇宙的になる迄は本統の批評家にはなれない。即ち頭腦が哲學的にならなければ眞の文學者にはなれない」と。以上の意味に於て、哲學は、文學の研究に缺くべからざるものである。

第三には文學者には銘々の文致スケイユと云ふものがなくてはならぬ。種々の文致の中で、哲學的文致は最も價值のあるものである。其の哲學的文致とは何であるかと云へば、思想の美である。之に就いてシヨウベンハウヘルの云つた言葉には甚だ深い眞理が含まれてある。曰く「文致とは其の人の心靈の面相である、その文致の美は思想から受けるものである。故に良き文致を得る第一の秘訣は、文學者が書くべく何物かを頭腦の中に藏して居る事である」と。つまり立派な思想があれば、自然に立派な文致が出来ると云ふのである。根本の思想を養ふ事を忘れて文飾に計り骨を折つても、善い文致が出来る筈はない。そ

れであるのに小文學者は、兎角文章の爲に文章を書く。支那の詩に、威儀三千と云ふ事がある。威儀を保つ方法は三千もあると云ふ事であるが、然し容姿は表面に現れる事であると思つて、威儀を保つ方法に計り注意するならば、徒らに虚飾になる計りで、到底眞に威儀を保つ事は出来ない。眞に自分の動機を顧み、思想を高尚にし品性を高める者は、自然皮相計りでなく眞に善い容姿を備へる事が出来、自ら威儀が整ふのである。そこで以上の事を一言で云へば、偉大な文學者は哲學的でなくてはならぬ。何故ならば彼は思想家でなければならぬからである。

第四は、文學と哲學とは、互に非常に影響を及ぼし合つて居ると云ふ點である。十八世紀に於て、文藝復興の新運動が起つたのは、ギリシヤ、ローマの文學の影響であるが、其のギリシヤ、ローマの文學の起つた次第から今日迄の文學を研究しようと思ふならば、如何にしても其の時代の哲學思想を研究しなければ解らない。文學は必ず其の時代の哲學、宗教の影響を非常に受けて居るから、文學史は哲學史、宗教史と、全く引離して研究する事は出来ないのである。例へば、自然神教的の哲學が稱道された時代の文學は、矢張り自然神教的であり、萬有教的の哲學は萬有教的の文學を産し、キリスト教全盛時代には、キリスト教的文學が出来たのである。國家の上から見れば、ギリシ

ヤの文學は其の時代の哲學者プラトン等の感化を受けて居り、ローマの文學はエビキュラスや、エビクテタス、或はシセロ等の哲學の影響を受けて居る。夫れから獨逸の文學はカント、ヘーゲルの思想を受けて居る所が多く、ことに十九世紀の始めの獨逸文學が、全くヘーゲルの思想に支配されて居つた事は明らかに看取される。又佛國の十八世紀頃に於ては哲學者は文筆を執つて其の思想を發表し、文學者は文學を哲學化して、殆ど文學と哲學との區別が出来ない位であつた。夫れから十九世紀になつてもやはり大哲學者は、同時に大文豪であると云ふ有様で、佛國は殆ど何時の時代を通じても大抵斯かる傾向であつた。ヴォルテア、ルソー、モンテスキュー等文學者として同時に又哲學者として最も適當な代表者である。英國にも有名な、ホツプス、夫れからヒューム、ギボン、ロバートソン等があり、伊太利には、ダンテを始め、澤山の哲學的文學者がある。斯く高尚なる文學は多くは哲學的に傾き、深奥なる哲學は必ず文學的の要素を含んで居つて、大いなる文學者の頭腦に其の哲學の眞意を解せしめ、其の哲學の思想の價値を判斷する事の出来る様に指導する力をもつて居るのである。故に哲學は想像的、情緒的要素に於て文學に負ふ所がある。如何となれば、哲學思想は、想像と高尚なる情緒とを以て、其の端緒を開くの

である。それから又文學は確實なる實質的眞理に於て、哲學に負ふ所がある、哲學の眞理は實に文學の出發點であり、哲學は又文學に依つて、彈力と活動の自由とを與へられ、且人の心に深く印象させる事が出来るのである。そこで文學と哲學とは、互に關係がある計りでなく、寧ろ有機的の渾一を保つて居るものである。之は私の獨斷ではない。有名な文學者、哲學者の經驗の自白に依つて證せられるのである。ローマの詩人ルクレチウスは哲學者エピキュラスに負ふ所が多いと自ら感謝して居り、伊太利のダンテは同國の大哲學者トマス・アケイナスに、スペンサー及びエマソンはプラトンに、ホツプスはライブニッツに、ゲーテはスピノザから與へられた所が多いと、自白して居る。尙例をあぐれば澤山の事實があるが、反つて煩はしいから之位にして置かう。

以上の文學史、哲學史上の事實、或は多くの文學者、哲學者の云つた言葉を綜合して考へるならば、文學と哲學とは非常に密接な關係がある計りでなく、寧ろ互に有機的の渾一を保ち、二にして一のものであると云ふ事が出来る。この二つが丁度よい關係を保つて一つになつて、始めて偉大な文學が出来、完全な哲學が生れるのである。

文學と人生 ビネーは「文學は其の問題、及び目的の爲に、

必ず人間を要するものである。詩の目的は人生を續けて見る事である。人生全體を見る事である。文學者は人間社會の活動を以て包圍せらるべきものである」と云つた。文學の目的、對象は、何時も必ず人間である。殊に近代の世界の文豪と云はれる様な人達は、多くは其の文學に自己の人生に對する解釋を現さんとし、或は人生に對する暗示を與へ人間を説明せんとし、唯個性の描寫等に苦心する計りでなく、其の國民性、及び國家の運命、或は其の社會の雰圍氣を描いて居る事は、著しく從來と異つた傾向である。それであるから彼等にとつては、文學は即ち人生であり、人生は即ち文學である。次に第二は、文學は人間の四圍の境遇に關係を有するものと云ふ點である。

今日の最も頭腦の進んだ文學者の常に苦心して居る事は、如何に書かうかと云ふ事よりも、寧ろ何を書かうか、今周圍の社會の潮流は何に向つて居るか、何を求めて居るかを正確に知ると云ふ事である。故に其の文學は作家の四圍の境遇から影響を受ける事が甚だしく、且之が社會に及ぼす感化も、著しいものである。第三に文學は其の時代の精神に關係を有するものである。ポスネットは「文學は必ず其の時代の精神と、作者の生涯に依る」と、云つて居る。夫れから第四は、文學は人格に關係を有するものである。或意味から云へば、文學は其の作家の人

格の發表である。殊に形式的の型に這入つた文章を排し、眞に其の作者の見た人生、作者の解釋した問題を書かうとして居る近代の文學に於ては、作者の人格個性が、作物に影響する事が一層甚だしくなつた。品性の低い者が價値ある文學を作ることには到底出来ないものである。斯う云ふ點から考へても、文學と人生との關係は大抵御解りになるであらう。

文學と藝術との關係 藝術には自由藝術と、應用藝術との二種がある。自由藝術と云ふのは昔ローマに於て自由の市民が修める事が出来た藝術で、當時にあつては文法、論理、修辭、天文、數學等であつた。然し今日云ふ自由藝術は科學、哲學、詩學を含んで居るのである。自由藝術と云ふ意味には廣いと云ふ事があり、第二には自由と云ふ事も意味する。即ち人間に意志の自由を與へるのである。第三の意味は力、即ち優美、自然、自由と云ふ様な事も、此の自由藝術と云ふ中に含まれて居る。故に自由藝術は一言で云へば人間に自由を與へるもので、文學は即ちこれに屬して居るのである。之に就いてはもう少し詳しく申し度いが、時がないから後日に譲る。

文學と、道徳、宗教との關係 從來の架空的形式的の文學に、反抗して起つた新運動の意味を誤解して用ゐて、其の爲に自然主義の作物は風教に害あるものと人々に思はせ、君子は手

にするのを恥ぢると云ふ様にした主な原因は、全く我が國の文學者が宗教、道徳の方面に於て、大いに品性に缺けた所がある爲である。それであるから彼等は、形式の束縛を破つても今度は又皮相の事實に囚はれて仕舞つて、其の文學には生命がなく美がない。如何に精密に書いても只寫眞の様なものになつて仕舞つて、人の心の奥の煩悶、渴望を知つて之を寫し、人に満足を與へる事が出来ないのである。斯く文學が宗教的、道徳的の要素を缺いたならば、唯機械的、野蠻的のものとなつて仕舞ひ、人の心に觸れて微妙な震動を起すことなどは少しも出来ず、實に無味乾燥なものになつて文學としての價値を保つことは出来ないのである。そこで文學に精神的、道徳的の要素を加へると云ふ事は、あなた方の最も努めなければならぬ事であつて、あなた方の文學は即ち精神的生命に満ちたものでなければならぬ。文學の立脚地、主義を定めると云ふことは、甚だ六ヶ敷い事であるが、以上申した要素を統一して御考へになつたならば、色々な弊害に陥ることがなく、文學を研究する爲に品性の修養が出来ないと云ふ様な憂ひもなく、又社會性と個人性と

の衝突を來す事もなからうと思ふ。

文學部の使命 今日にはもう時が無いから、極く根本の事で又最も閑却され易い事丈けを、大體申して置きたいと思ふ。あな

た方の第一の使命は、偉大な思想、主義、原理の構成、及び解釋と云ふ事であつて、之は科學の使命と一致するものである。

我々が讀書し觀察して學び、知識を統一する目的は何かと云へば、事物、人生の各方面に就いて、社會に就いて、偉大な思想を構成し之を解釋し、人に傳へんが爲である。之に就いて殊に我々の注意しなければならぬ事は創始力と云ふ事である。昔の人の云つた事を模倣し、人の思想を丸呑みにして居るのでは到底生命のある文學は生まれぬ。我々は既に成就された事、發見された事以上に更に何物かを貢獻すべき責任がある。若し我々に獨創の意見がなく、定見がないならば、生存の意義はないのである。創作とは徒らに文字を並べる事ではない、思想を構成するのであつて、偉大な文學とは即ち偉大な思想の發表である。然らば偉大な思想とは何であるかと云へば、即ち此の宇宙に就いて、宇宙の精神に就いて、人類に就いて、靈魂に就いて、或は善惡に就いて、科學、哲學、倫理、宗教、デヴィンティイ、ヒューマニティイに就き、自分の意見主義を構成する事で、實に文學の偉大な事は全く此の思想の偉大な事に存するのである。斯かる根本の問題が分つて、始めて我々は人の心に、ある暗示を與へ、感動を與へ、大なる感化を他に及ぼして社會を導き、文學の使命を全ふする事が出来るのである。

第二の使命は、時代精神を現すと云ふ事であつて、夫れには時代の精神を讀み、解釋して、説明して行かなければならぬ。

そこで文學には二つの目的がある。一つは統一された目的で、他は分離された目的である。統一された目的に依つて、我々は全體に亘り、或は遠大な結果を熟考する、詰り時の制限、土地の制限をも脱して、窮りなき大宇宙の精神と交り、永遠の生命を感ずる事が出来るのである。分離された目的は、地方的、時代的精神を説明し、ある特別のものに就いて之を現すのである。然し之は偉大な精神と、比較的小さい思想との區別をしたのであつて、二つ別々のものではない。同時に働くべきものである。そこで我々は、讀書に依つて、國家の歴史、人類の過去を知ると共に、今日の活社會に交り、夫々の自分に應じた責任を持つて、社會の生命に觸れ、時代の精神を讀んで、之を現して行かなければならない。それであるから利己的、部分的の頭腦で、孤立を好む者は到底文學を研究するに適しないのである。

第三にあなた方が努むべき事は、人間の本性を研究して夫れを現す事で、我々の意志、良心、品性等の心理學的的研究、即ち人類の心を研究する事が必要である。時代の精神を現すと云ふ事に較べると、之は個人的、部分的のもの様であるが、然し

此の二つは、二にして一のもので、其の間を分離して研究する事は出来ないのである。人間の本性の研究は、五官に訴へ、或は書物で讀んだ計りでは駄目である。先づあなた方は自分を顧み、自己をよく知らなければならぬ。さうして深い同情と、明らかな心眼を以て人間の喜び、人間の悲しみ、人間の力と弱點、想像と出來心、成功と失敗、榮譽と恥辱、人間終極の渴望、死と生等、人間の有らゆる方面を觀察して誤らざる判斷を下し、其の眞相を明らかにしなければならぬ。自然主義を口にして居る人々は、人間の眞を見ると稱して實は獸を見て居る。

我が國今日の自然主義の作家に寫されたものは、決して人間の眞相ではない、我が國の眞想ではない。彼等には未だ心の眼が開けて居らないのである。そこであなた方は先づ、此の文學者としての根本の資格を養ふことに大いに努めて、眞に人を見、人を寫す事の出來る者とならなければならぬ。次に第四は、高尚なる理想の發表、其の勵行である。今日の文學の通弊は、徒らに奇麗な文字を弄び、或は皮相の事實に拘泥して、其の爲に生命を失ひ、偉大な理想を缺いて居ると云ふことで、つまり文學者に偉大な理想を構成し、之を實行する大きい人格が乏しいのである。我々が人格を高め、社會を進めて行くには如何しても一つの偉大な理想と、之を實行する意志とがなければならぬ。

らぬ。之が出來ない様な人は、時代の精神を知る事も、人間の深い眞相を見る事も出來ない。此の偉大な理想を構成し、之を勵行すると云ふ事に依つて、國民は鼓舞され、社會は進み、人間の品性は之に依つて高められ、弱き者は救はれるのである。

偉大な國民は偉大な理想を描き、又偉大な理想は偉大な國民を作る。如何に其の外觀が盛んであつても、國民の理想が萎微した國家の將來には滅亡がある計りである。而して國家に、人類に此の精神的の生命を與へて、之を勵行せしむるのは實に文學の使命であつて、斯く考え來ればあなた方の使命は實に重いのと云はなければならぬ。

三、家政部の使命

頭腦より改めよ―世界文明の推移―現世界の趨勢―我が國の現狀は如何―婦人の使命―心の自由―經濟の自由―人類に自由を與へよ

頭腦より改めよ 家庭と云ふ所は、最も力の出し難い所で、又進歩發達して行く事が最も困難であると私に話した人があるが、之は髓に事實で、私は之は餘程考へなければならぬ問題であると思ふ。婦人の頭腦は、長い間の習慣、遺傳、境遇等の影

響を受けて、其の爲に非常に部分的、感情的であるから、一つの制限を破つて進む事は、婦人には容易に望む事が出来ないものである。それで家庭に這入ると丁度小さい城の中に立籠つた様になつて、只家の中の事、家族の事より外には頭腦が働かなくなつて段々社會の事情に疎くなり、世界の潮流等とは勿論縁が遠くなつて、遂には矢張りあなた方の頭腦も、教育を受けない時と同じ様に、狭く、無智になつて社會の大勢に後れる計りでなく、家庭に感化を及ぼし或は社會の進歩を計る事が出来なくなつて仕舞ふのである。婦人は家庭を治めて行くべきものであるから、社會の事情、世界の潮流等は知らないでも只關係の深い、親とか、配偶者とか、子とかの爲を考へ、夫れに頼つて居ればよいと云ふ人があるが之は大いなる誤りである。今迄の女子は此の考を實行して居たが其の結果は如何であるか。女子の頭腦は夫とか、子とかの極く狭い部分より外には働かなくなり、只夫の厄介物、社會の寄生虫になつて、遂には夫をも、子をも本統に愛する事が出来なくなつて仕舞つた。然し親子とか夫妻とかの愛情は本能的のもので之は鳥や獸にでもある。さう云ふ様な愛ならば勿論頭腦が狭い人にもあるが、眞に我が子の將來を考へて教育し、夫のする事をよく解して之を助け、最も進んだ知識を家庭に應用して日常生活を進めて行くと云ふ事

は、社會の事情に通じ世界の大勢に觸れて今日は如何なる時であるかをよく知つて居る人にでなければ、到底望む事は出来ない。つまりもつと婦人の頭腦が科學的に、哲學的に、廣く深くならなければ小さい臺所の仕事でも、子守でも満足にして行く事は出来ない、今日の時勢を知らなければ婦人自身の立場も解らないのである。我々が斯う云ふ事を深く考へて方針を立てる時に二つの方法がある。一つは近きより遠きに及ぶ即ち部分より全體に及ぶものと、一つは遠きより近きに及ぶ、即ち全體より部分に及ぶものとで、つまり演繹的と歸納的と云つても良いのであらう。そこであなた方婦人の缺點は、全體から推して部分を考へる事が中々難いと云ふ事である。部分から全體に及ぼすのは容易であるが、之は悪くすると獨斷に陥り易い。それで私は少し困難かも知れないが始めに先づ、今日の世界の文明の起源、今日の世界の趨勢から、我が國の現状等を極く大體申し、之等が明らかになつてから我が國の婦人の使命に及びたいと思ふ。

世界文明の推移 今日世界の大勢を支配して居る所の、人間の假説と云はうか、要求假定と云つてもよいが、兎に角相反した二つの思想があると思ふ。之は今日ばかりではない、昔からの問題で、其の一は實在論であり、他は之と反對の、理想主義

である。實在論から云ふと、國家の運命を定め、個人の幸福を増すものは物質、即ち經濟問題である。理想主義の説く所は夫れと反對で、即ち人間の運命を支配するものは理想である。此の極端な二つの説は今日も尙盛んに相戦つて居るが、其の何れが眞理かと云ふ事は、中々六力敷い問題である。然し斯う云ふ問題を解決する事が出来なければ、決して我が國の婦人問題も解決する事は出来ないのである。一方から云ふと、人間の運命を作るものは身體であり、物質である様であるが、人類の過去一萬年の歴史に遡つて深く考へると、人間の運命、即ち人間の作つた文明の勢力は人間の頭腦で考へた思想、又は理想に依つて出来たと云ふ事を、歴史の證明に依つて斷定する事が出来る。人類の歴史は、人類の思想の歴史であり、人間の運命は人間の頭腦から作り出したものである。一萬年の昔の文明、即ち最も古いエジプトの文明から考へると之は能く解るが、さうすると大變時を要するから、今日は先づ凡そ三千年間の歴史に就いて考へて見たいと思ふ。

今から三千年前の世界はギリシヤ、ローマの文明に支配されてをつた。此のギリシヤ、ローマの文明は如何にして生み出されたかと云ふ事を明らかにする爲に、今其の以前の世界の文明の推移を一口に申すと、始めエジプトの文明が一千年間榮え

て、次ぎの一千年間は凋落し、夫れが過ぎると、又新たな力を持つて一千年の榮えを見せた。次ぎには又一千年間眠つた様になつて居たが、それから世界は再び新たに文明の光を見出した。此の時が即ち希臘、羅馬の文明時代で之が衰へたのは、大凡今から二千五百年前であつた。此の時代にはギリシヤにはソクラテスを初め多くの哲學者が出て、今日の文明を生み出した其の種を蒔き、ヘブライ人は、エホバと云ふ唯一の神を信じて居た。詳しい事は舊約全書をお調べになれば分る。當時ギリシヤ、ローマを初めエジプト、ペルシア等の國々も皆、多神教、萬有神教、二神教等を信じて居つたのであるが、此のヘブライ人の頭に宿つた所の宇宙は唯一の神、力あり、威嚴あるエホバの神に支配されてみると云ふ一神教の思想が、世界を是迄の世界と大いに變らせた。此の思想はだん／＼と世界的に擴大され、精撰され改善されて、矢張り今日の文明の一要素をなしたのである。次ぎに今から一千九百十二年前即ち紀元前四年にクリストがユダヤに生まれて、クリスト教と云ふ新しい思想が世界に生れた。ヘブライ人の信じて居た唯一の神のエホバは狭いヘブライの神であつたが、クリストは之を擴大して、あらゆる人類の天父とし世界の神とした。其の信仰の結果として、嘗て世界にない新しい文明が生れ出たのである。夫れからずつと飛

んで今から凡そ五百年前、世界は又大なる革命に依つて生れ變つた。人間の頭腦で考へた偉大な思想は、政治にも、文學にも、美術にも、宗教にも、偉大な影響を及ぼして、一千年間眠つて居た世界を醒した。千五百年間地に埋れて居たギリシヤの種、即ちソクラテス等の頭腦に考へられた古い思想が復活した。この文藝復興の結果、今日の文明の光が世界を照らし始めたのである。十九世紀に至つては、ダーウインに依つて進化論が大成され、之が各方面に非常な進歩を促した。進化論はダーウインが始めて發見したのではない。遠いギリシヤにも此の思想はあつたのであるが、之に明確なる化學的説明を加へてダーウインが證明するに及び、始めて之が宇宙の法則であると云ふ事が分つたのである。之は非常な發見であつて之が宇宙の上に、物質の上には、又人間の運命の上に大なる影響を及ぼした。ダーウインの説は、「凡ての生物は極く低い單純な形から、高尚な複雑な形に進化するのである、その進化を支配するものは自然淘汰の法則即ち優勝劣敗の働きによつて生物は進化する」と云ふのである。其の後益々深く進化論は研究されて、ダーウインの發見しなかつた事が色々其の上に見出された。例へば、ダーウインは進化と云ふものは、低いものが段々高尚になるのだ、と考へてゐたが、近頃では、進化は異種と異種のものが相

化して、即ち甲と乙とが相化して丙と云ふ、甲でもなく、乙でもないものが出來ると云ふ事が發見された。又進化を支配する法則は、唯生存競争計りでなく、相互扶持の法則もあると云ふ事が解つた。夫れからスペンサーに至つては、人間の心靈上の法則も、進化に依つて支配されるものであると云ふ事を見出した。夫れから獨り之は人間の心靈のみならず、人間が組織して居る社會も亦進化の法則に支配されると云ふ事が解り、茲に於て社會學が生れたのである。此の社會も進化すると云ふ思想は、社會に著しい影響を及ぼし、人間の運命の上にも之迄にない大なる發見をするに至つた。社會學者キッドは曰く、「我々は社會進化と云へば社會進歩と云ふ事だけを考へた。然し今日では、進化と云ふ中には進歩の外に退化と云ふ事があるのである」と、丁度我々個人が退化して馬鹿になる事もあり墮落する事もある如く、社會國家も亦退化する事がある。而してある場合には退化と云ふ事が社會國家の進化を助ける事がある。獨りに依つて、社會國家が進化するのみならず、退化するものは段々退化して、遂には其のものは滅亡して仕舞ふと云ふ事もある。其の例は歴史にも見る事が出來る。ギリシヤ、ローマ、ペルシアの如き一時文明の花を咲かせ、實を結び、非常に知識も道德も進んで居つた國も、或程度に至つて枯死した。而して斯

く國家社會でも個人でも、進化したり退化したりするのは何の爲かと云へば、凡て宇宙の進化を助ける爲である。一萬年の人類の歴史に就いて、其の他物質界の何十萬年の歴史に就いて考へて見ると、髓に宇宙は完全即ち眞善美に向つて進んで居る。

之に従ひ之に貢献する間は其の人も其の國家も進化して榮えて居るが、夫れを仕ないと退化して衰へる。ギリシヤ、ローマ然り。個人と雖も、社會の進化を助ける間は、大いに榮えるが、之をしなければ直ちに退化し滅亡するのである。ギリシヤ、ローマの如き旺んな國ですら、一朝其の用をなさなくなれば、退化し滅亡した。此の考を以て今日の世界の趨勢を見るならば、如何なる結論を作る事が出来るであらうか。西洋の文明は今如何なる傾向を現して居るか、東洋の文明は如何。東洋の一端に於いて其の牛耳をとる我が國の運命は如何。安全であらうか、危機であるか、又世界の文明の將來は如何であるか。

現世界の趨勢 一萬年の歴史は、多くの國家社會が千年榮えて千年衰へ、或は五百年醒めて五百年眠つた事を示して居る。

此の進化なる理想が人間の頭腦に宿つて、個人主義と自由獨立の思想となつた。之に依つて、即ち夫れ迄人間を束縛して居つた專制君主から自由を得、其の他學問の束縛、職業、風俗、習慣の束縛を逃れる事が出来、非常に人間社會の進歩を來した。

此の結果、如何なる活動が起つたかと云ふと、十八世紀の半ば頃から、ロック、ヒューム、ヴォルテアの様な偉人が現れて、其の結果實體論が人の頭腦を支配する様になつた。此の派の主張はつまり夫れ迄盛んであつた空想を排斥し、經驗を重んずるのにあつたが、夫れが段々極端に走つて物質主義になり功利主義になつた。それで十八世紀の終りから、十九世紀へかけて反動が起り、再び理想派が旺んになつた。カントから、フィヒテ、シェリング等が出て、其の後又ヘーゲルが出て、其の思想で一世を支配し、理想に重きを置く者が此の時代には大いに勢力を得て居つた。夫れから五十年程経て、又實體論が盛んになり、之からコントの實驗哲學が生れ、スペンサーの綜合哲學が起つた。而して其の後即ち此の最近の十年間には、再び理想主義が少し宛芽を出し始めて來た。然し今日の傾向は、寧ろ理想派と實體論と相近づきつゝあると云ふべきで、其の結果兩方面を備へた主行主義の如き哲學が生れたのである。然し此の二つの説は、未だ完全に調和されたのではないから、今日と雖も

實體論と理想派とは相對し、相争つて居ると云ふ事が出来る。

極端な實體論は唯物的、功利的、快樂的、利己的になり、理想派は精神的、犠牲的、他愛的である。然し世界の大勢は如何かと云ふと、ダーウインの所謂、優勝劣敗、弱肉強食で、自由競

争が激烈である。今日の西洋文明の真相は如何であるかと云ふと、科學の原理の應用に依つて、資本あり、智慧あるものは益々富み、労働者と智慧のない者は益々貧しくなつて其の間の懸隔が實に甚だしくなつて居る。富んで居る者は肉體の快樂を貪り我が儘を恣にして、物質主義を信じ、快樂説を好む。其の弊は歐米の天地に於て殊に益々甚だしくなつて居る。此の利己主義の爲に歐米の社會は非常に不安の状態に陥つて居るのみならず、此の東洋は其の利己主義の爲に如何なる地位に立つて居るか。印度は如何。支那朝鮮は如何であるか。此の後も猶歐米の文明が實體論に傾き、利己的、唯物的になつて、世界人類の半ばなる七億五千萬の人を奴隸視して、東洋に益々其の利己を逞しふするならば、果して歐米は將來の世界の文明を導く事が出来るか如何か、甚だ疑問である。ギリシヤ、ローマの文明も、宇宙の大勢に逆つた爲に滅びた。もし今後も資本主と労働者との間が今日の如くで、何時迄も改まらぬならば、假令今迄五百年間進化して來た國でも、天は其の進化をゆるさぬであらう。今日は實に世界の文明の危機である。而して其の西洋文明に接觸し、東洋七億餘の運命を擔つて居る我が五千萬の日本國民は如何なる態度であらうか。

我が國の現状は如何 我が國も亦實に危機に臨んで居る。私

が斯う申すのには二つの理由がある。其の第一は經濟難であり、第二は凡てが幼稚である點である。我が國は貧乏で未だ幼稚と云ふ事を免れないにも拘らず、其の責任は甚だ重大である。果して我々は今日の非常なる經濟界の壓迫に勝つて行く事が出来るのであらうか。海外貿易を見ると、昨年は二三千萬圓の輸入超過であり、今年も亦夫れ以上の輸入超過になりさうである。如何にしたならば我が國は商工業の競争に勝つて國を富ます事が出来るか。今日の經濟の状態を如何にかして切り抜けなければ實に我が國は危いのである。我々は安閑と眺めて居るべきではない。

我が國は今世界政治の中心、商工業の中心になつて居る。歐米の天地では既に供給が餘る様になつてあるから、今後其の上の發展は東洋を相手にしなければならぬ。そこで東洋の中心の日本は、自ら世界の商工業の中心になるのである。而して今後日本が此の舞臺に立つて、其の役を務めて行く事が出来なかつたならば如何であらうか。最早や東洋七億餘の間人は救はれる見込みが立たないのである。獨り東洋が救はれないのみならず、若しも我が國が其の任に耐へないならばもう一層歐米の利己を募らせ、專横を恣にさせるのである。宇宙の大勢に逆つて利己を逞しふする國家社會は、決して其の上進化を續けて行く

事が出来ぬと云ふ事は、ギリシヤ、ローマの例でも解る。今日の大勢が改まらないならば歐米は段々退化して行き、世界の文明に一頓挫を來すものである。日本が使命を感じて立つのは獨り東洋の爲のみではない、世界の爲である。世界の進化に貢獻する事が出来なければ、我が國も亦今日の運命を維持する事すら出来ないのである。日露戦争の時には、日本の危機であると云つて舉國一致したが、今日は如何であるか。實はそれ以上の危機なのである。あなた方はこれを見なければならぬ、之を見なければ、眼を醒まさねばならぬ。即ち我々は世界の氣勢から見て、我が國の現状を自覺せねばならないのである。我が國が商工業的の戦争、知識の戦争、自然を征服する戦争をして四圍の境遇を改善し、世界に新しい文明の震動を起して世界の進化に一大貢獻をする事が出来なければ、二千五百年の立派な歴史を持つてゐる我が國でも、どうなるか解らないのである、而して此の大なる使命を果さなければならぬ我が國民性はどうかあるか。我々は之について深く考へて見なければならぬ。我が國の文學、哲學に、ギリシヤ、ローマの文學、哲學の如き、獨逸の哲學の如き偉大な要求があるか。日本の文學の中には印度の哲學、支那の哲學が這入つて居るが、之もあまり深くは現れて居らないのである。今歐米に於ては偉大な思想、偉大な哲學

の缺乏を感じ、日本に於て其の偉大な哲學を見出さんとして注目して居るが、果して日本に之があるか、勿論今日の旺盛な國運を開拓した要素も慥に此の中にある。例へば、君の爲親の爲ならば喜んで犠牲になると云ふ様な特性は、到底他の國民の企て及ばない所であるが、夫れと同時に今申した様な缺點もある事を、我々は充分自覺して之を防がなければならぬ。或西洋人は日本人を評して「日本人は理解的よりも寧ろ認識的なり、想像的よりも寧ろ鋭敏なり、概活的よりも寧ろ分解的なり、建設的よりも寧ろ破壊的なり」と云つた事があるが、我々は之を聞いて思ひ當る所もある。然し之が果して全く眞ならば、我々は我が國民が、この重大な責任に向つて奮闘を續け、之を成就する事が出来るか如何か疑問である。夫れで私はあなた方が深く我が國民性に就いて研究し東洋の人文史に就いて東洋の盛衰の根源を知り、西洋の文明史を研究して、何が今日の文明の原動力であるかを發見なさる事を希望するのである。我が國は此の五十年間に非常な進歩を遂げたが、未だ世界の文明を消化し得たとは云はれない、未だ誠に幼稚である。我々は夫れを自覺し、今日の時代の精神を讀んで、夫れに應じ導いて行く覺悟がなければならぬ。今日の國民性と財力を以て、此の重い責任を果すと云ふ事は實に困難である。故に我々は深く省みて、茲に

一大方針を立て、且新しい財源を見出して行かなければ幾許足掻いても到底無益であらう。我々は活眼を開いて根本の問題を定め、國家百年の計畫を立て、行かなければならぬ。而して此の時代の危機に感じ、國家の危急を思つて、我々は之を根本的に救ふ方法を講じて居る。之、我々が女子の高等教育を主張する所以である。あなた方が櫻楓會を結成して、第二の維新を計畫する所以である。我が國民の頭腦を開いて知識を進め、又新しい財源を開拓して國力を増すと云ふのは、二方面の様であるが、深く考へると國力を増すには人の力を増さなければならぬ。人の力を増すには人の知識を進め、思想を高めなければならぬのであるから、つまり此の二つは相伴つて出來て行くものである。斯く知識を進め國民の思想を偉大にし、國力を數倍にして行く原動力は何であるか。一言で言へば眞の自由である。即ち我々の理想を實現し要求を満足せしめ、意志の自由を得るのにある。ソクラテス、クリスト、エビクテタス其の他の世界の偉人が、生涯を捧げて倦む事を知らなかつたのは、此の眞の自由を實現せんが爲である。我々は働かんと思ふならば、先づ手足が自由にならなければならぬ。自分の意志が自分の身體の中にも、自分の生存する社會の中にも、働く様にならなければならぬ。此の眞の自由を得る事に依つて、始めて我々は人

生の深い意義を悟る事が出来る。我が國民の力を増し、世界の文明に新しい生命を加へて我が國の進化を計るのには、如何しても先づ此の根本の自由を得る事に努力しなければならぬ。

婦人の使命 私があなた方に向つて希望する事は、婦人に眞の自由を與へよと云ふ事である。之は獨り家政部のみではない、我が國の女子に向つて私が切に望む所である。あなた方は實に幸福な者であるが、私は眼を擧げて我が國の女性を見、我が國の家庭の事を考へると實に一掬の涙を惜しむことが出来る。我が國一般の婦人は實に哀れなものである。私の友人、私の尊敬する先輩や多くの卒業生からの話に依ると、今日表面では婦人に自由を與へて居る様ではあるが、實際は實に云ふに忍びぬものがある。家庭に依つて幸福を得て居る人は實に少い。又文明の光が照らして居る家庭は實に稀に見る所である。あなた方の中にも、此の後悲慘な運命に囚はれる人が少くはないであらう、實に氣の毒なものである。然し之は果して誰の責めであるか、婦人を束縛するのは何であるか、我が國の男子の教育が不足で、品性が下劣であるからと云へば、勿論其の半分は男子に責任があるであらうが、其の禍の根源は矢張り婦人にある。婦人を束縛して居るものは實に婦人自身の缺點である。一家の不幸は多くは妻君の愚痴から、狹量から、無智から生れ

る。渠女は無智で低い感情に束縛され、利己の念に支配されて居る爲に、ある時は我が儘になり、偏頗になり、無能になつて、家の平和を破り、家族の心を傷けて夫れでも未だ自分の束縛は何から起るかを悟らず、只人を恨んで愚痴を云つて暮すのである。男子は我が儘をする様であるが、實は好んでする譯ではない、我が儘をして不快を紛らして居る事は、實に猶更の苦痛である。愉快に酒を飲んで居るのではない。此の婦人の缺點は獨り男子の苦痛であり家庭の不幸である許りでなく、今日の國家の不安は實に此處にある。國民の半數の婦人が、人たるべき資格に達して居らないと云ふ所にあるのである。

然らば之を救ふには如何にしたら可いか、外に仕方はない。婦人にもつと教育を與へて、廣い關係を悟らせ、部分的、感情的の頭腦を、もう一層深く廣くして實力をつけ、眞の自由を婦人に與へると云ふ事である。そこで此の眞の自由を得るのには如何にしたらよいのであるかと云ふと、之には二つの要素がある。

心の自由を得よ 眞の自由を得るには先づ第一に心の自由を得なければならぬ。思ふ事と行ふ事と、即ち主義と實行と衝突しない様にならなければならぬ。孔子は「三十にして立ち、四十にて惑はず、五十にして天命を知る、六十にして耳順ふ、

七十にして心の欲する所に従ひて矩を踰えず、」と云はれたが、孔子の如き聖人でも七十になつて始めて思ふ事と行ふ事と、少しも衝突しない様になつたのである。我々はそこに達する迄に非常な努力を續けなければならない。只己の怒りを制する事ですらも容易には出来ないものである。之の出来る人は實に偉人と云つても良い。斯かる人は一萬年の昔にも、一萬年の將來にも生きる事の出来る人である。今私は三千年間の世界の成長を話し、我が國の運命に就いて一言したが、之を自分の運命の如くに考へる事の出来る人は如何なる不遇の境遇に立つても不平なく失望なく、常に希望を以て進歩する事が出来る。何故ならば、彼は全體の中に自分の家庭を見出し、自分を見出して居るからである。心の自由は、全體と結び付いて、全體と我と合體して居る人にもみ與へられるのである。此の自由を得た人にして、始めて夫を感化し、子供を教育して行く事が出来るのである。今申したのは自分の内心から起る束縛に克つ事であるが、此の外にも風俗とか、習慣とか、社會の各方面からの束縛もあるが、心の自由を得た人ならば、之にも克つて自由を得る事が出来るのである。

經濟の自由を得よ 第二に婦人を束縛するものは何かと云へば、婦人が經濟の自由を失つて居る事である。我が國の人は、

婦人が經濟とか、職業とか云ふことを考へるのは、不遜の事である。婦人が職業を執るのは餘儀なくされるので、實に不幸であるといふ考に支配せられて居る。然し自由と云ふものは、第一に精神から、思想から來るのであるが、之を實現して眞の自由を得るのには、矢張り物質にも依らなければならない。此の三百年間に、歐米の國民が宗教の束縛、職業の束縛から脱して、大いに世界の文明に貢獻する事が出來たのは、思想の自由、學問の自由を得て、之に依つて經濟的、物質的の束縛を解く事が出來たからである。物質的の束縛を除くのものにも矢張り思想が要り、知識が要る。

歐米の國民が今申した様に、思想の自由を得て、束縛を脱する事が出來たのには、三つの主な原因がある。其の一は羅針盤の發明、第二は火藥の發明、第三は印刷術の發明である。之が如何なる影響を與へたかと云ふと、第一羅針盤の發明により、天體の關係を考へて世界が圓いと云ふ事を知り、其の結果コンブスは米大陸を發見した。第二は火藥の發明に依つて印度、亞米利加等未開で猛獸の巢窟になつて居た土地を開拓し、世界の文明を進めることが出來た。第三は印刷術の發明に依つて、人間は居年らにして世界の形勢を知り、又一萬年の過去の歴史も、幾百年前の偉大な人も、自由に語る事が出来る様になつ

た。此の發明が如何に人間に自由を與へ、文明に貢獻する所が多かつたのかは、あなた方が毎日の事を考へても、お解りになるであらうと思ふ。斯くの如き科學上の發明は、非常に經濟界の發展を促し、經濟界が發展した爲に、又精神界が大いに進歩したと云ふ事は事實である。汽車汽船等の交通機關や、印刷術等が發明されても、之を實現する經濟力がなかつたならば、其の國の思想は矢張り進歩する事は出來ない。色々便利な機械が發明されても經濟力がなければ之を應用して時間を省き、努力を節する事も出來ないのである。我が國の妻君や下女が知識なく、經濟思想のない爲に、如何に無益の力と時と金を費して居るか。無駄な所へ力を費す爲に家庭に這入つた婦人は、大いに讀書して思想を進めようと思つても中々出來ない。國家經濟の半面は婦人の手にある。若しも婦人の經濟思想、經濟力が發展したならば、我が國の經濟力は大いに加はるのみならず、此の母に依つて、世界商工業の競争場裏に立つて少しも引けを取らない第二の國民を教養する事が出来るのである。我が國の婦人が、今日のように經濟の自由を社會からも與へられず、自分からも無智の爲に之を得る事が出來ないならば、到底婦人が眞の自由を得て完全な家庭を作り、婦人の使命を果す事は出來ないのである。完全な家庭が出來なければ、第二の國民に完全な教

育を施す事も出来ないのは云ふ迄もない事である。

家庭生活の統一を計れ 我が國の家庭は、未だ銘々孤立の有様である。他の學問、事業は、協力と、比較研究とに依つて着々進歩して居るが、家庭には之は見られない。今日では家庭と云ふ境遇は、個人的、孤立して居るものであつて、之が爲に家庭生活には進歩がなく、人間はこれに依つてどれだけ進歩を妨げられて居るか解らないのである。今日では個人主義と共に、一方には社會的の境遇を作つて、團體的の生活をしなければ、進歩して行く事は出来ない。私はあなた方が今迄孤立して居つた家庭生活の連絡統一を計り、經驗を交換し、力を協せて研究して、先進の諸文明國でも中々出来ない家庭生活改善の實を擧げて、第二維新の責任を成就する事を深く望むのである。

人類に自由を與へよ 教育部に向つては教育の自由を、文學部には思想の自由、家政部に對しては婦人に自由を與へなければならぬと云ふ事を申したが、之は此の三方面から力を協せて開かなければ、人間に眞の自由を與へ、世界の文明を進める事は出来ないのである。そこで最後に於て私が切にあなた方に望む所は、我が國家に自由を與へ、人類に自由を與へる事である。丁度個人でも我が儘で情欲に支配されて居つては、自由を與へられぬ如く、社會でも、國家でも、利己我が儘に支配され

て居る間は、眞の自由はない。偉大な思想が全體を支配するに至らなければ、其の國家社會には自由は與へられないのである。然るに我が國今日の思想界、宗教界、教育界、藝術界には、果して國民の全傾向を支配し、國民を結合せしむるに足る偉大な力があるか、今日は實に四分五裂の有様である。我が國の社會には如何なる傾向が現れて居るか、あなた方は眼を睜いて活社會を熟視する事が必要である。人に迷惑をかけても、自分の名譽になれば、自分さへ利益があればよいと云ふ様では、到底商工業の發展を計る事は出来ない。政治も、宗教も、藝術も、駄目である。國家の爲、人の爲にすると云ふ犠牲の精神が現れなければ、國家的精神の結合が出来なければ、到底我が國の使命を果す事は出来ないのである。而して此の使命に耐へ得る根本を作る事は、あなた方高等教育を受けて醒めた婦人の務めである。敢へて我が國民の爲ではない。自ら與へられたるあなたの使命の爲に、自ら任じて起ち、如何なる慘酷苦心をしても、是非あなた方は之を成就しなければならぬ。之は實に困難な、力に餘る事であるが、然し私は、あなた方が瞬時も忘れず此の使命に奉仕し、生涯努めて已まないならば、慥に成就し得べき事を信じて疑はないのである。

〔花紅葉〕第六 明治四十一年六月

大學擴張

第一章 大學擴張の目的及び其の意義

吾人の茲に創始せんとする大學擴張とは、歐米に行はるゝ所の「ユニヴァーシティー・エキステンション」と全然類を同じふするものにあらず、彼に行はるゝものを参照して、我が國の現狀に鑑み、其の必要に應じ、之に適合せんことを欲するものにして、凡そ三要素を包含す。その第一は教育的要素にして、こは歐米に行はるゝものと、略々同一なれども、第二經濟的要素、第三精神的要素は我が國社會の必要に應じたる特殊のものなりとす。

「ユニヴァーシティー・エキステンション」なる語は一八五〇年英國に於て起りたるを以て嚆矢とし、爾來五十八年の間、年と共に發達し來りて、今や教育上最も有力なる一機關として活動しつゝあり。即ち組織的研究を繼續すること能はざる階級、或は事情の中に生存する者の爲に大學教育を擴張するの意、語を換ふれば、自己の職業を營みつゝ生涯を通じて、高等教育を受けしむるの意にして、其の起源は時代の要求に應じて、其の

必要を充たさんが爲に起れる新しき教育の方法なりとす。而して其の時代の必要なるものは種々の方面に涉り、且社會の變遷によりて推移しつゝあり。

其の一は政治的國家的必要なり。教育が政治的目的の爲に起りたる事は、遠くスバルタ、アゼンスが良市民を作らんが爲に必要な教育を起したるに始まり、其の後各國、各時代を通じて國家の必要により教育に變遷ありたるが如く、英國に於ても、中等社會の興隆、政治的權利の擴張、選舉權の擴張等、政治的發展により教育の普及は國家的必要となり、大學擴張の範圍も此の必要に應じて起りたるものなり。

其の二は、工業的必要にして、現時の教育は工業的國民を養成せざるべからず。無智、無能、無識なる國民を以て競争場裡に立つは國家として立脚の地を危ふくするのみならず、一家の維持すらも不可能のことに屬す。斯くの如く高尚なる知識を希望するは、時代の要求の急切なるものなりとす。

其の三は社會的要求より來るものなりとす。今や時代の精神、社會の理想、頻りに變遷を來し人と人、階級と階級、國と國との關係は全く面目を改め、社會的に發達し、社會的に組織せらるる理想の社會を要求しつゝあり。其の理想を實現し理想的社會を建設せんとするには、之に適合すべき教育あり、知識

あり、品格ある市民を養成するにあらざれば、其の目的を達すること能はざるなり。

其の四は知識的要求なり。今や國民一般は文明の光に照らさるゝに至り、個人の知識増進して社會の狀態を觀察して自己の將來を慮るの時代となれり。茲に於て男子となく、女子となく、職工も農夫も、己を進めんが爲に教育を受け、知識の光に浴せざるべからざるを自覺するに至れり、是れ幾多の障害と抑壓を被りつゝも、青年男女が教育を受けんが爲に焦慮しつゝある所以にして自然の大勢の茲に至れるものなりとす。

大學擴張の目的に就いて、或學者は「ユニヴァーシティー・エキステンションは其の目的としては知識の擴張なり。凡ての時間を學問に用ゆる能はざる者、及び學校教育を受くるには年齢の過ぎたる人の間に知識を擴張し、有益なる讀書の習慣を養ふこと、正確なる思考力、並びに正しき行爲をなすべき習慣を養はしむるにあり。智的生活、即ち學問を求め、研究を繼續せんとする精神を刺戟し、覺醒して以てより若き市民を養成せんが爲なり。而して社會的進歩を促し、且つ個人をして尙一層社會的狀態に興味を持ち、同情を有たしめる様導く爲なり。」と。即ち人としての品格を完成し、人生の幸福を増進し、延いては人類の文明を刷新するにあり。個人を發達せしめて國家社會の

文明を進歩せしむるにあり。

大學擴張の目的は又自修、即ち吾人の所謂自奮自修の精神を鼓舞するにあり。人をして小人閑居不善を爲すの語の如く、無益に費消する閑散なる時間を有益に費さしむるにあり。是殊に我が國の女子に必要にして男子にもあるが如く、婦人には最も多く家庭の寄食者あり、即ち一家の整理、兒女の教育すら他人に委ね、學校に任せて、自らは爲す事もなく時を費す者あり。彼等は皆に一家の不幸のみならず、國家の禍害なり。大學擴張は斯くの如き人々を救うて、自奮、自修、有益に時を費すの習慣を養はしむるにあり。

次に目的とするは探求的精神を生涯を通じて持續せしめ其の精神を満足せしむるに足るべき適當なる方法を授け、其の組織を完全にして境遇の開拓に便ならしむることなり。一般大學教育を施すに當り、一の困難となる所は學力の不十分なるにあり。是が爲に高等女學校卒業後、大學に進む迄に豫科を設くべきか、若しくは大學を了へて後大學院を置くべきかも一の問題なれ共、今日の現状は二つながら事情の許さざるものあり。此の缺陷は即ち大學擴張によりて補足せられざる可からず。殊に女子十七歳（高等女學校卒業年齢）より二十歳に至る迄の間は、生涯の基礎を築くべき最も重要な時期に屬し、此の時期

に於て職業を與へ、専門の範圍に入らしむるは、女子をして偏小たらしめ、不具者たらしむるに至る。故に此の時期に於ては自由教育を施し、専門に傾き職業的に偏するの弊を去ると同時に、個人の特徴を充分に發揮せしむるは、大學擴張の目的とする所なりとす。

世或は女子に高等なる學問をなさしむれば、却つて女子の能力を害し、常識なき女子を出さんかと虞るゝ者あり。或者は學理を輕んじ、女子の頭腦の養成に反對するの潮流あり。然れ共、吾人の主義とする所は女子の頭腦、心情、手足をして同時に發達せしむるにあり。常識とか手足を働かすとか云ふことは一般に歡ばるゝ所なれども、常識も手足も頭腦と共にするにあらざれば、完全なる發達を遂ぐる事能はず、高尚なる學問には複雑なる研究を要す。此の研究を婦人の領分に及ぼし、婦人の頭腦を養成するは實に今日の婦人を救ふべき唯一の道なりとす。今や諸般の學理研究せられつゝあるも、其の學理は未だ育兒とか、臺所とか、食物の研究、若しくは婦人心理の研究に應用せられざるなり。是實に婦人の頭腦の發達を忽諸に附したる自然の結果なりとす。

文明史の示す所、世界進歩の原因は、人類頭腦の發達にあり。思想の進化にあるは疑ふ可からず。科學の發明により、新

しき學理發見せられ、直ちに人の頭腦より頭腦に傳はり、廣めらるゝは自然の勢にして、八十五年前英國に於て汽車に似たる物發明せられてより、今や米國のみに於ても廿萬哩の鐵道布設せらるゝに至れり。ダーウィンの進化論は思想界の革新となつて、宗教も亦改革せらるゝに至れり。

第二章 大學擴張の方法及び其の機關組織

大學擴張の要素

第一、教育的要素

吾人は大學擴張の一要素として、歐米に行はるゝ所の「ユニヴァーシティー・エクステンション」の組織及び精神にして、我が國情に適合すべき方法を採用せんと欲することは前章に述べたるが如し。之を教育的要素となし、別ちて下の六項となす。

一、校外講義 校外講義はケンブリッジ大學によつて開始せられ、次いでオックスフォード、ロンドンの二大學も此の事業に参加し、當時有名なる教授マクス・ミュラー専ら此の事業の指導の任に當り、一八八五年に於て廿七の講座を設けたるが、六年後には百九講座を有するに至り前記の三大學之が中心となつて、各講座専門の教授、助教等之を擔任し、夏季冬季の二

期に分ちて全國百有餘ヶ所の都市に講座を開始し、大學生以外の人々を集めて講義、問答交換、質疑應答等の法により、一八九二年に於ては、校外生の數無慮五萬を算するに至れり。爾來或は通信講義、巡回講話等の盛んに行はるゝに至れるも皆其の源を此の事業に汲めるものなり。

今之を我が校の大學擴張に於て實行せんとするには、先づ現に設置せられ、又將來設置せられんとする各地の櫻楓會支部を中心となし、櫻楓會が現に有する家庭部、社會部、教育部、及び實業部、本校の家庭、文學、教育の三學部を始め、將來施設せんと欲する工業農藝等の實業的學科によりて研究せられたる結果を齎らして、或は講演會を開き、研究會を催し、各地の事情に應じて家庭、衛生、育兒、食物、その他農工業に於ける科學の應用を講究し、時々本校教授の出張を求め、或は海外に在る會員の報告によつて新しき思潮に接觸し、一は以て生涯を通じて自奮自修的的研究の精神を持續せんとする卒業生自身が、材料と境遇とを與へ、一は將來高等教育を受けんと欲する者の爲に、豫備的教育を施し、更に之を一般の校外生に及ぼし、偏く教育の恩化に浴せしめんとするものなり。

二、圖書館、巡回圖書館 是歐米にて所謂「トラベリング・ライブラリー」と稱するものにして我が國の現状、特に女子に

其の必要多きを見る。書物が知識の鍵鑰にして、精神の食物、光明の窓たるは絮説を要せざる所、實に生涯の親友、慰藉者又は顧問なり。抑も教育の目的は、人の品格を作るにあり。品格は吾人の習慣より生じ、習慣は吾人の行爲に成り、行爲は動機より來り、動機は反省によつて起る。反省即ち思考は讀書の賜物たる事多しとなす。斯くの如く讀書は人類進化の必須なる要素と云ふを得べく、知識、藝術、思想、感情は書物により人より人に傳へらる。此の賜物を廣く人に普及せんとするもの、實に巡回圖書館の組織なりとす。而して此の恩澤を享くる者、單に女子に限るべきにあらずと雖も、家庭に入りて複雑なる家務に従ひ、育兒、教育等の爲に、出でて講義の席に列るの時間を有せざる者婦人に多く、或は不幸病床に臥す者、其の他如何なる境遇にある者と雖も、書物を介して其の思想を養ひ、品性を養ひ、傷める心を慰むる事を得ざる者はあらず。然りと雖も學術は寸時も其の進歩を止めず、思潮は絶えず變遷す。其の進運に伴うて常に新しき書籍を備ふるは學者と雖も尙難しとする所、況や一般の家庭に於てをや。

茲に於て先づ現在の本校圖書館を公開して、中央にある一般婦人の要望を充たすと共に、地方の婦人の爲に適當なる方法によりて、一部の書籍を常に甲より乙、乙より丙に巡次閱覽する

の便を得さしめ、新しき思想と知識の供給をなすべき巡回圖書館を開始せんことを希望する者なり。

三、巡回機械 巡回機械とは、學術研究に必要な各種の機械、標本地圖等を學科に従つて分類し、研究を助け、解釋を補ふ博物館の如きものにして、巡回圖書館と連合して、之を各地に移動して圖書教育の補助機關たらしめんとするにあり。

四、夏期學校 夏期學校は、米國の動物學者アガシが一八七三年動物學者及び其の學生を集合したるを以て嚆矢とす。其の後紐育州の西端海拔千三百尺避暑の好適地なるシヨトカ湖畔の勝地を卜し、文學、及び科學の講座を設け、寄宿舎を置き年々數千の學生を會合せしむるシヨトカの夏期學校あり、其の他歐米の諸大學に於て多く行はる。現に我が國に在りても學校或は團體によりて開催せらるゝもの多し。而して吾人は之を以て我が大學擴張の一要素となし、現に本校内及び輕井澤の夏季寮に於ける研究的、修養的生活の精神、方法を普く世間に及ぼして婦人夏期學校の基礎たらしめんことを希望する者なり。

五、講義錄 校外講義、巡回圖書館等の設備が大學擴張の有力なる機關なるは絮説を待たざる所なりと雖も、之を社會に普遍ならしむるの點に於て、時間と距離の制限を受くるの憾みなきを得ず、此の缺陷を補はんもの講義錄に如くものなかるべし。

是吾人が大學擴張の要素中最も緊要なる機關として之に着手せんと欲する所以なり。而して講義錄の目的とする所は、既に大學教育を受けたる者には尙持續すべき研究的生涯の指導となり參考となるべく、高等女學校を卒業したる者には進んで大學教育を受くべき豫備科となり、其の志あるも大學に入る能はざる境遇に在るものには、善良なる教師となること、猶校外講義の如しと雖も其の學科の整備に於て特色を有し、規律あり、統一ある課程を履修し得る點に於て巡回圖書館と其の趣きを異にせり。しかのみならず時間も、距離も、境遇も、何等の制限を加ふる能はず、山間孤島如何なる僻陬の地に在る者と雖も、苟くも學に志を有する者をして、其の志を成さしむるを得て教育の範圍を擴大し、文明の德澤を普からしむる點に於て、講義錄は大學擴張の機關の最も主要なるものなりと云はざるを得ざるなり。

六、大學殖民地 大學殖民地とは大學生によりて組織せる小團體を以て勞働者貧窮者の間に在らしめ、是等の人々をして大學生活の良風に薰化せしめ、向上的精神を鼓舞し、生活狀態を改善し其の幸福を増進せしめんとするにあり。彼の英國の有名な經濟學者にして斯の事業の爲に犠牲となりて斃れたるトインビーの遺産を以て建設したるトインビーホールを始め、オックスフォードにオックスフォード・ハウスあり、ケンブリッジに

ケンブリッジ・ハウスあり、ブラツクフレヤースに女子大學塾
民地あり、市俄古にフル・ハウスあり、隆んに其の事業を經
營せられあるを見る。吾人が第一項に記したる校外講義と、櫻
楓會支部との關係は、斯の事業に在りても亦應用するを得べ
く、單に貧窮者と云はず勞働者と云はず、人の妻となり、人の
母となり、其の生活狀態と精神狀態の如何は、將來の國運に一
層大なる關係を有する婦人の間に此の事業を展開するは最も急
務なりと云ふべし。

是等六種の機關は相關連して、以て教育的方面に於ける大學
擴張の活動を表示するものにして之を教育的要素となす。未だ
遽かに着手するを許さざるものなきにあらずと雖も、吾人は現
下の國情と、社會の急切なる要求に應じ其の端緒として先づ、
女子大學講義録を發刊せんと欲し、今や其の準備に着手せるを
以て之が公表を見るの日漸く近からんとす。吾人は尙時を得、
機を察して他の事業を實現するを怠らざるべし。而して教育的
要素は更に他の二要素を包括し、始めて大學擴張の機關を完成
するものにして、即ち次に掲ぐべき經濟的、精神的二要素な
りとす。

第二、經濟的要素

大學擴張の第二要素は經濟的要素なり。思ふに現時複雑なる
政治的及び社會的問題にして婦人と經濟の問題に歸着するもの
頗る多しとなす。即ち婦人に關する法律、選舉權等の政治的問
題、或は婦人に關する職業、勞働等の社會問題は近代文明の諸
國に在りても、未だ解決を告げざる所にして、我が國に於ても
早晩斯かる問題に就き自ら解釋を下さざるべからざる時運に遭
遇するは避く能はざる所なりとす。然れども吾人は直ちに是等
の問題に對して解釋を試みんと欲する者にあらず。現に斯くの
如き問題に比し、一層緊要にして適切なる、之れ解釋して直ち
に實行の端緒を見出すを得べき問題の存するを見る。即ち實業
的社會的問題なりとす。但し吾人は此の問題を提げて男子と權
利を爭ひ、職業を爭ふの意にあらずして、之を競争と云ふより
も寧ろ男女の間に相互に扶助提携して、以て未だ着手せられざ
る範圍を開拓せんと欲し、茲に我が國婦人の間に一個有機的團
體を作り、之に依つて其の目的を遂行せしめんとするものな
り。

婦人と經濟 婦人と經濟は密接にして離るべからざる關係を
有するものにして、我が國實業の振興を妨げ、婦人の發達を妨
ぐる大いなる原因は、實に此の兩者の關係の社會に正當に解釋
せられざると、婦人自身之を自覺し能はざるとに在り。即ち

經濟は生産、分配、消費の三要素より成り、三者何れも婦人の之に關係を有せざるはなく、等しく社會に生存し、其の人口の半數を占め、衣食住を要する以上は、其の得失利害を感ずること、男子に比して逕庭あるべからざるは自然の數なりとす。故に吾人は國の實業の興隆と、世界に對する經濟的膨脹の策を講ぜんとして欲すれば、先づ婦人と經濟との關係を改善し、其の範圍を開拓し、婦人の經濟的知識と其の品性を養成するを以て當今の急務なりと云ふを憚らざるなり。吾人は茲に婦人と生産、消費、分配の關係に就いて之を

消費經濟 に見るに、富とは生産と消費との比例によりて消長するものにして、最少の消費を以て最大の生産を得んと欲するは經濟の原則にして、而して消費は實に婦人の掌る所なりとす。一家の經濟に於ても婦人の經濟的思想の缺乏の爲に生産と消費とは其の均衡を失ひ、虚榮に驅られて奢侈となり、消費となり、一家は忽ち負債の爲に苦しむに至り、其の影響する所國家貿易の變調を來し、輸入の超過となり國債の増加となる。現に財界不振の嘆聲頻りに唱へらるゝにも拘らず、幾千圓の帶、幾十圓の半襟、履物の盛んに賣れ行くを見れば、如何に多くの富の空しく土中に埋められ、國力の濫費せられつゝあるかを察するを得るにあらずや。

生産と分配 生産も亦婦人に關係を有するもの多く、輸出品の重要な生絲、羽二重、陶器、製茶、各種の雜貨等婦人の努力の之に加はらざるものなく、其の他家庭の工藝、農家の副業、殆ど婦人の力に待つもの多しと云ふべし。婦人は斯くの如く其の生産に與ると共に、富の分配も亦之を受くべき者にあらずや。然るに事實は全く之に反して、工場にありても一家にありても、婦人は只労働者たり、又雇人たるに止まり、男子の共同者となり、之を助けて共に産業を經營するの資格を有するに至らざるは、又實に婦人の經濟的關係、其の當を得ざるのみにあらずして、經濟的品性の缺乏によりて生ずる所の結果なりとす。

婦人の經濟的思想を養成するの必要は、固より夙に社會の認むる所にして、女學校の課程中經濟、簿記等を加へられ、或は實業的専門學校も少からずと雖も、未だ其の實効の現れざるは何に依るか。現に我が國各所の農學校は其の數三千を有すと雖も、其の卒業生にして社會に出で、農業の實際に就いて改善の効を奏したる者甚だ稀なるにあらずや。之實に農業の知識を與へ、藝術を授けると雖も、經濟的品性を養成せられざるに依る。品性の養成は教育の最終の目的にして、品性なくして教育の効果を擧げんと欲するは、動機なき道德を教ふるが如し。抑

も實業の動機は實益にして、經濟學の主義は功利なり。學問も技術も實驗も、現實なる利益によりて導かれ、其の品性の基礎を作るにあらざれば、教育は只一の遊戯に等しきのみ。經濟的品性の有無の分るゝ所之を例せば、獵夫と遊獵者の如く、等しく銃を取り其の獲物を求むるにも、是は實利ある職業にして、彼は贅澤なる遊戯となる。

近く我が日本女子大學校に於て、商業、銀行、製菓、園藝、牧畜の各部を置き、或は購買組合を設けたるが如き、即ち生徒をして學問によりて教へられたる經濟的學理を實際の事業に當り、實際の利害を経験し、事實によりて經濟的品性を養成せんと欲するに外ならざるなり。

大學擴張の經濟的機關としては、全國に散在する卒業生を中心として各支部所在地に於て、生産、消費、信用等の組合を組織し、中央にありては櫻楓會本部之を統括して、實力あり聲望ある實業家を顧問となし、以て事實に於て婦人の經濟的社會問題を解決せんとするにあり。即ち従來行はれつゝあり、或は新たにに行はんとする種々の産業―養蠶、養鶏、孵卵、園藝又は家庭の工藝等にして箇々零碎なる資力によりて營まれつゝある小規模なる生産的事業を團體の力によりて經營し、組合を組織し必要な物資を購買し、生産物は之を共同して市場に販賣

し、信用組合を組織しては、蓄積を奨励し、涓滴を集め、以て事業運轉の資本に供する等すべて共同の力により區々に別れたる生産力を統一して、一は以て其の改良發達を促し、一は又區々たる小事業も其の組織の如何によりては國家經濟の消長に關すべき偉大なる勞力となるを自覺せしめんと欲するなり。

是等の事業を經營するに當り、最も考慮を要すべきは、當事者其の人を得るの難きにあり。現に有力なる爲政家の中にも、識見ある民間人士の中にも組合事業に對して熱心なる同情を有し、之が發達を奨励せんとする人尠からずと雖も、處るゝ所は其の人を得ざるにあり。即ち實力あり智能あると共に、信じて之を委任すべき品性を有するの人を得難きにあり。是其の方法の宜しきを知りて、而も其の實行の之に伴はざる所以にして、組合事業は實に信用を以て成立すべきものなればなり。若し當事者にして、其の品性に於て、其の信用に於て缺如する所あらんか、如何に大なる組合を設け、如何に盛んなる事業を起すも、往々にして其の事業は一人の私業となり、其の組合は少數者の營利機關となり、雷に一地方の産業に利する所なきのみならず、却つて之を阻害し、將に興らんとする國家の産業の萌芽を萎微衰亡せしむべき不測の禍を招くに至るべきなり。茲に於て吾人は此の經營に任ずるは、婦人を以て最も之に適する者

なるを信ず。特に教育によりて經濟的智能と其の品性を陶冶せられ、又家庭經濟に最も深き關係を有する婦人其の人を得て、以て始めて此の事業の發達を促さんと欲するなり。

更に是等の事業に必要なは團結の力なりとす。從來家庭に行はるゝ所の産業は一家の一私業に過ぎざりしと雖も、之を團結の力によりて統轄する時は、零碎なる資本も、小規模なる機械も各々分業的に大事業の一要素となり、個人獨特の智能技術も、殆ど顧みられざりし區々たる生産力も、集りては國力の増進を促すに足るべき國家的産業となる。是實に團結の力にして、吾人が經濟的機關の主力として先づ組合を組織し、團結の力を利用し、以て其の目的を達せんと欲する所以なり。

第三、精神的要素

大學擴張の機關は、吾人の前項に於て縷述せるが如く、教育及び經濟の二要素を以て未だ全しと云ふべからず。即ち精神的要素の之に加はるありて、初めて其の目的を達するを得べし。何をか精神的要素と云ふ。是前の二要素と互に連絡し、之を一貫して生命あらしむるものにして知識も、思慮も、技術も、工藝も、精神的生命ありて茲に生氣あり、活動あり、進歩あり、發達あり。國の文明は此の三要素の相併行して、活動し進歩す

るにあらざれば、決して完全なりと云ふを得ざるなり。

是を以て我が大學擴張の一要素として、精神的生命養成の機關を備へんと欲す。由來我が國に於ける精神的生命養成の機關なるものは、舊時代の組織漸く頽れて之に代りて新時代の要求に應ずべきもの未だ多く興らず、之を歐米の先進國に於ける物質的文明の發達を促すべき機關の設備せらるゝと同時に、精神的生命の養成に資すべき各種の經營の盛んになるに比すれば、我が國に於て是等の機關を設備するの甚だ急務なるを感じざるを得ざるなり。而して之を實行する方法に就いては、彼の校外講義及び大學殖民地の項に説けるが如く、適宜の方法と適宜の時間を以て一種の會合を設け、精神的生命養成の機關となさんと欲するなり。然れども之單に所謂、宗の機關として其の宗旨を宣傳するの謂ひにあらざり、複雑にして而も統一せられたる種々の要素を包括するものなりとす。

一、知的目的の爲に集合するものにして、即ち思想の統一を以て目的となす。故に此の會合は佛敎者も來るべく、基督信徒も來るべく、儒敎者も、神道家も亦共に會すべく、而して彼等各自の信仰を破壊せんとするにあらざりして、更に廣き意義に於て新しき生命を得んと欲するにあり。即ち一は知識の光を以て其の精神を照らし、一は教育を害ふべき種々の迷信を打破する

にあり。蓋し人新しき發見をなせば、之を他に分たんことを好み、新しき力を得たる者は、之を人に與へて人と共に喜ぶ。人の本性にして、即ち宗教の心なり。之を以て此の會合は人の心の集合にして人の知識の接近なり。又同主義同信仰の會合なり。日新の知識を以て相助け相導き、精神的生命を研磨せんと欲するなり。

二、道德的目的　の爲に會合す。是社會を高め其の缺陷を補はんとするものにして、貧者を扶け、窮民を救ひ、凡て低き階級に屬する人々を助けて、之に道德的生命を與へ、其の品性を革新し、向上の精神を鼓舞し、以て現代に於ける社會の疾患を癒し、將來の國民を健全ならしむるにあり。此の目的を達せんと欲せば、精神的生命によりて希望と勇氣と熱心とを得ざるべからず。更に其の動機となるべき犠牲の心、即ち同胞の爲に困苦を忍び、國家の爲に奮闘するの精神なかるべからず。意志の力の克己抑制によりて養はるゝが如く、愛の力、犠牲の心は、我欲を捨て私情に克ちて、人の爲に盡し、全體の爲に自己の不便を厭はず、高尚なる目的の爲に艱難に甘んずべき精神的生命によりて修鍊せざるべからざるなり。

三、審美的目的　即ち美術と自然の美を崇拜するために會合す。科學も哲學も亦道德も之に詩的方面を有す。即ち美的要素

にして之を崇拜するが爲なり。哲學の方面より云へば即ち驚歎、賛頌と云ふ、之想像と思想との領分なりとす。プラトンは「哲學は純理の詩にして、詩は感情と愛の哲學なり」と云ひ、又「詩は想像の力によりて天にも昇り、地にも下る。恰も水禽が大洋の中に潜るが如く、如何なる人間の隱微なる奥底にも、如何なる高大なる宇宙にも、其の美を成就するを得」と云へるが如く、詩は實に宗教の美的要素なり。又宗教の説教及び經典なるものも等しく美的要素にして、吾人の説教經典には孔子あり。釋迦あり、クリストあり、ソクラテスあり、エビクテタスあり。其の他古今を通じ、東西を通じ、凡そ人道に現れたる偉大なる詩、書物、經書は悉く取つて以て吾人の精神的生命の食物となすべきなり。音樂も亦美的要素たるは言ふを待たず、人間の高尚なる情緒を發表する所のアートなり。殊に婦人に適當せるものにして、言詞も文章も表示すること能はざる最も深き精神的情緒を現し、是によりて優美にして高尚なる心と心の間に同情を呼吸し、精神的生命を獎勵し慰安すべき好適なる機關なりと稱すべきなり。

五、文藝　も亦精神的印象を與ふるに最も有力なる要素にして、音樂と同じく、婦人にありて殊に深き感化力を有するものなりとす。是を以て、文藝は偉大なる思想と崇高なる精神の自

から之に現るゝにあらざれば、其の効果を奏する能はず。即ち眞正の文藝は精神的文藝、美的文藝ならざるべからず、其の脚色せらるゝや、過去の歴史を知らざるべからず。將來の目的なかるべからず。現代の思潮を察せざるべからず。斯くの如く高尚なる目的を以て組織せられ、神聖なる精神を以て演ぜらるゝに至りて、初めて文藝の目的は達せられ、精神的生命を奮興するの力極めて偉大なるを信するなり。

吾人は尚美術につき、自然美につき、又精神的生命の歸向につき、云はんと欲する所甚だ多しと雖も、徒らに回を重ねん事を恐れ、更に他日を期して説く所あらんとす。之を要するに過去現在將來を通じて、世界に現れたる崇高なる人格を尊敬し、偉大なる頭腦によりて現れたる詩も、哲學も、科學も、道德も、美術も、等しく人道の上に一生面を來らし、光明を齎す所の本尊として之を崇拜し、而も之を偶像視するにあらずして、活きたる人格として稱仰し、是に偏せず、彼に傾かず、吾人の智を盡し、意を盡し、精神を盡し、以て活きたる信仰の基礎となし、確實なる精神的生命の根柢を建設せんと欲する者なり。

吾人が數回に涉りて説き來りし所の我が大學擴張は、教育的、經濟的、精神的三要素を發表すべき各種の方法は、之を實行せんとするも寔に容易の事業にあらず、又之に着手すべき時

機容易に到らざるが如しと雖も、深く我が國運の將來を慮れば、世界の大勢は駭々として一日と雖も其の歩武を止めず、洶瀾蕩々として我が島帝國に迫れるに似たり。況んや東洋文明の發展に對して特殊の使命を負ひ、世界的競争に参加して其の征途に上り、内よく後顧の憂ひなきを得べきか。教育の實情は如何、經濟の勢力は如何、將た精神的生命は如何、看來りて實に慷慨に堪へざるものあり。之吾人が同人と共に自からを顧みず、茲に大學擴張を唱導する所以にして、内は我が女子大學校數千の女子と共に自ら獎勵、奮闘し、外は有識なる志士の同情と贊助により、其の目的を達せんとするの念禁じ難きものあるを覺ゆるなり。

〔「家庭週報」第百五十一號と百五十四號〕明治四十一年七月

女子大學講義紹介の辭

我が櫻楓會は曩きに發表したる大學擴張の趣意に基き、其の教育的機關の先驅として、茲に女子大學通信教育會を組織し、來春を期して「女子大學講義」を發行せんとし、今や其の趣旨及び會則を世に公にするの時期に達せり。茲に於てか吾人は聊か講義録發行の精神に就いて述ぶる所あらんとす。

抑も通信教育なるものは、其の名の如く通信によりて各種の學科を教授するものにして、或は平素書籍的知識を排斥する所の吾人の主張に扞格する所なきや、幼稚なる女子の頭腦に注入的教育を施すの結果に陥らざるや、はた講義録によるならば、級、學校、寮舎等は日本女子大學校の教育に缺くべからずといふ實驗場は何によりて充たすを得べき。従つて級風、校風、寮風等團體的社會的精神を養ふに必要な有機的關係は何處に求めむべき。世或は茲に疑惑を生ずるなきを保せずと雖も、吾人は決して平素の主張を放棄するものにあらず。寧ろ其の主張を貫徹し、廣く其の主義を普及せんと欲するに外ならず。而して更に我が國婦人の現狀に鑑み、又我が社會の有様を察し、其の必要に應ぜんと欲するものなり。

我が女子大學創立以來茲に八年、卒業生を出すこと七百有餘、之等卒業生は皆眞摯熱心なる態度を以て世に立ち、母校の主義精神を擴大して以て婦人の境遇を開拓せん事を欲すと雖も、在學僅々三年にして、教育の宿弊に染みたる多年の習慣を矯正する事さへ尙困難なり。漸くにして新しき生命の嫩芽を見出でたるにもせよ、一旦校門を辭するや、世は決して昨日の如からず、讀書せんと欲するも適當の書物なく、研究せんと欲するも之を謀るに師友なし。如之彼等の惰力は動もすれば家庭の

奥の孤獨的生活に甘んぜんとし、世に立ちて愈々培養せらるべき生命の嫩芽は、却つて枯死するの止むなき運命に至るものなしとせず。之獨り我が校の爲、憂ふべき事にあらずして、實に國家、社會の大なる損失なりといふべし。もしそれ卒業後もなほ大學生活を繼續せしめ永へに母校の雰圍氣に包まるゝの感あらしめるを得ば、茲に初めて我が教育主義の貫徹を見るに至るべきなり。而して我が教育主義の擴大は又實に現時の社會の要求に應ずるものなるべきを信ず。余は昨年夏期の休暇を以て久しく訪はざりし郷里に歸れり。吾が郷里を出で、より茲に三十五年、懐かしき古郷は文明の光に浴して、教育、家庭、農業、工業の狀態は著しき進歩を遂げ、其の面目を改めしならんとは、吾が胸中に期待せし所なりき。然るに一度故山の地を踏むに及んで、其の期待せし所は凡て瓦餅に屬したり。即ち商工業は依然たる封建時代の遺習を脱せず、農家は太古の佛を存し、家庭は個々分立して統一したる機關を有せず、殊に婦人の狀態は孤獨的生活にして、三十年前の舊態は依然として存せられ、毫も進歩の跡なきを見て、吾が胸中云ひ得ざる感想に閉ぢられたるを覺ゆ。之實に形式的教育、書籍的知識、空想的理想の弊にして、教育が實際の生活に適應して其の用をなさざるに由るものといふべし。我が講義録は實に此の缺陷を補はんと欲する

ものにして、猥りに高遠なる學問を注入せんとするにあらず。且其の講義は特殊の編述にかゝり、現に我が校の教室に於て行はるゝ所と其の程度を異にし、其の趣きを異にすと雖も、等しく實際的生活に應用するを以て目的となし、學んで之を行ふに易き家庭日常の生活に、進歩したる科學の應用を實現し、臺所を中心として實驗の材料を實用の事物に取り、育児、經濟等婦人必須の學科を配當することは、別項趣旨書に掲ぐる所の如し
(趣旨書略)

而して更に一言せざる可からざるは曩きに大學擴張の各章に論じたるが如く、吾人の目的とする所、單に此の講義録の發行に止まらず、之に關聯して種々の機關を設けんと欲するものにして、即ち巡迴講義、巡迴圖書館、巡迴機械の如き、殊に密接の關係を有するものあり。吾人は漸を追うて其の實現に力むる所あらんとす。然れども教育的、經濟的、及び精神的の三要素を通じて最も缺くべからざる所のは、有機的機關の組織にして、協同團結の力によりて初めて進歩發達を遂ぐるものにして、孤獨的、分離的、散漫的狀態は其の目的に達する所以にあらず。即ち知識は衆知の交換切磋によりて啓發あり、進歩あり、精神力も衆徳の發現する所、經濟力の發展も統一ある機關によるにあらざれば、其の目的を達する能はず、古來優越した

る大知大聖も深く其の知徳の源泉に溯れば由つて出づる所、系統あり脈絡あり、決して偶然にして生ずるものにあらず。國の經濟の膨脹も、組織的機關によりて開發せられたる結果に外ならざるは否定す可からざる事實なりとす。講義録に附隨して刊行する所の雜誌「家庭」は此の知識の交換も其の目的の一部なりと雖も、吾人は我が女子大學通信教育會員が、よく此の點に注意して、自奮自修其の特性を發揮すると共に有機的關係の力により、大勢の赴く所を察して其の進歩に伴はん事を望まざるを得ず、而して組織的機關の方法に關しては他日更に案を具し詳論せんと欲するものなり。

「家庭週報」第百五十八號・「女子大學講義」刊行發表會

明治四十一年九月

櫻楓館記念日に於ける感想

今日は此の第三回櫻楓館記念會に於ける私の感想を一言發表して祝辭に代へたいと思ふ。只今皆さんから御話しになつた様に、此の三年間に櫻楓會の事業が斯く迄に發達した事は私の非常に喜ぶ所であるが、同時に又此の櫻楓會は誕生後日猶淺く、三歳か四歳の小兒の如きものであるから、今後果して種々の困

難と闘ひ、外部の壓迫に克つて進む事が出来るか如何かと云ふ心配がないでもない。そこで我々は此の子を如何にして育てようかと云ふ事が大なる問題である。然し先づ私は此の櫻楓會なる子が健全なる發達を遂げんとしつゝあり、又將來成長して大人物になるであらうと云ふ希望も充分にある事を考へて、今日喜びの情を禁ずる事が出来ないのである。此の小兒が健全なる發達を遂げんとしつゝあると云ふ事はどう云ふ事であるか、其の内容をもう少し委しく申して置く事が必要であらうと思ふ。

健全な發達をするのに第一に大切なのは精神である。古諺に三ツ子の魂百迄と云ふ事があるが此の櫻楓會なる小兒は如何なる歴史に依つて生れ、如何なる魂を作りつゝあるか、第二には此の子には其の魂を充分に發展せしめ得る體力があるかと云ふ事は親の一日も忘れる事の出来ない問題である。そこで先づ身體の方から考へて見ると、丁度此の櫻楓會は其の精神を育てるのに最も大切な時機に於て此の櫻楓館が建築され、引續いて櫻楓會の仕事の一部である夏期學校の一種とも見るべき夏期寮が輕井澤に開かれる様になつた。斯く適當な機關が備へられた爲に、團體の身體とも云ふべき經濟的方面、譬へば商業部、園藝部、牧畜部、製菓部、銀行部等の事業は大いに發達する事が出來て、一方には櫻楓會の事業として、健全なる其の精神を宿す

と共に、又一方には母校實業教育の機關となり、今迄女子に缺けて居つた經濟的品性を養はしむるに努め、母校の教育に貢獻した事が決して少くなかつたのである。而して此の事實が如何なる影響を社會に及ぼすかは大いに我々の注意した所であるが、其の後追々に實業教育は女子教育に缺くべからざる要素であるとして一般に認められる様になり、或女學校の如きは之に倣つて同じ様な機關を設け、大いに實際的知識を養はしむるに努められた所もあつた。只机の上のみで得た知識では駄目である。

凡ての學問を活動に現し、思想を實際に行つて境遇を開拓して行かなければならぬと云ふ此の考は、今年全國高等女學校長會議に於ても全力を注いで研究された様である。故に櫻楓會の身體、即ち經濟的方面が發達した事は、獨り我が校の教育のみならず、深く考へれば全國の教育に少からぬ影響を及ぼしたと云ふ事が見出されると思ふ。經濟的方面が著しく發展したと申しても經驗のある方から見れば未だ誠に兒戲に等しい様なものであり、進歩も遅々として甚だ待ち遠しい様な感を抱かざるを得ないのである。然し兎に角櫻楓館が出來、夏期寮が出來、それから段々に會の身體が成長する様になつたと云ふ事は、我が國の教育、殊に女子教育に缺けて居つた方面を少しでも補ひ得たのである。斯く此の櫻楓會なる愛子が精神に於て大いに進歩

したばかりでなく精神を宿す身體も相當に發達して心身共に健全に成長するのを見る事は、親の身として實に喜びの情を禁ずる事の出来ない所である。

次に此の子は如何なる教育を受けつゝあるか、果して其の教育は宜しきを得て居るか否かと云ふ事は、彼の誕生日に當つて我々の深く反省しなければならぬ問題である。而して此の問題を考へるのに當つて、我々は先づ我が國教育の現狀を察知する必要があるであらうと思ふ。今日女子教育の方針は如何であるか、又女子教育の程度は如何、如何なる方法を以て女子を教育せんとして居るかと云ふと、一言を以て其の大勢を申すならば、消極的である。勿論自制、或は克己と云ふ様な消極的方面も亦教育に缺くべからざる要素で、我々も大いに同感の所もあるのであるが、昔から此の消極的の教育のみで完全な教育が出来ると思つて居たのは大なる間違ひである。殊に今日の青年を教育するのに、夫れ丈で果して目的を達する事が出来るであらうか。斯うしてはならぬ、之は危険である、と只戒を與へ、禁制を課するのみで、斯くせよ、斯くして危険を冒して進めと云ふ事を教へない、之で果して偉大なる國民を養成する事が出来るであらうか、甚だ疑問である。勿論制限を加へ、自制力を養はしむる事は教育上大いに必要であるから、制限も加へ、戒

も與へなければならぬが、夫れは制限を加へる爲ではなく、大いに發達せしむる爲にするのでなければならぬ。然らば此の子の親は、如何なる教育法を用ゐて居るかと云ふと、犠牲、或は自制と云ふ如き消極的方面の精神をも養はしめて居るが、同時に又益々發展し、決して一所に停滯して居らない積極的態度を以て、我が國の爲に第二の維新を成就しなければならぬと教へるのである。而して之を成就するには第一維新を成就した人々が持つて居た程の確い信仰がなければならぬ。第一維新の導火線となり、指導者となつた者は主に薩長土藩の青年であつた。

始め彼等は自分の信ずる尊王愛國の眞理の爲に天下を敵とし、輿論に逆つて立つた。それのみならず自分の藩中にも俗論と正論との二派があつて常に争ひ、自分の血族の中でさへも反對をする者が多い。夫れ故何時切腹を仰せ付かるか、首が飛ぶか解らないのである。眞に國家を思ひ、全體を思つて朝廷の爲に戦ふのであるが、勝敗は計り難い。斯かる時に當つて手を空しうして大勢の趣く所を眺め、旗色を見て居つた藩も多く、少しも態度が定まらない。國家の爲、全體の爲に自分は何をなすべきかを決心しない人が澤山あつたのであるが、彼等は假令少數で破滅しても、自分の信仰、自分の主義を貫徹しなければならぬ、それが眞の忠義である、忠君愛國であると信じた。始めは

僅數名の人が、自分の仲間からも暗殺され相になつたと云ふ様な有様であつたが、彼等は左様な事には少しも屈せず、危ふきを冒して自分の信ずる所を斷行した。君國の爲、主義の爲ならば、名譽も、財産も、幸福も、生命も惜しまないと云ふ此の決心、此の精神は藩の力でも、天下の輿論でも破る事は出来なかつた。否却つて僅の人の決心に依つて天下の輿論、國內の人心が動かさるるに至つたのである。今迄斯く非常な苦心を嘗め、血を流したのは男子の決死隊であつたが、今日は女子に其の順番が廻つて來て居る。男子の手では出来ない方面の維新を成就する爲にあなた方が決心し、あなた方が起たなければならぬ時になつたのである。素より困難はあらう、内外からの攻撃も中傷もあらうが、我々は何處迄も主義に依つて立たなければならぬ。此の時に當つてあなた方は充分の決心を以て櫻楓會を組織し、茲に精神的團結をお作りになつたのであつて、斯くの如き團體が出来た事は偶然ではない。あなた方は大勢を眺め、旗色を見て居るものではない。髓に信ずる所に依つて、凡ての物を捧げて使命を全ふせん事を誓はれた。其の決心、其の精神が凝つて櫻楓會の力となつて居る。故に此の櫻楓會なる子は、まだ身體は小さく働きも微々たるものであるけれども、只此の一ツの精神、此の一ツの決心は何物にも動かされぬものである。

第一維新をなした人達が困難と闘ひ、努力して今日の我が國の運命を開拓した如くに、今日あなた方の克己、あなた方の努力は櫻楓會の目的の爲であり、我が國の女子を救ふ爲に犠牲になるのでなければならぬ。夫れ故我々は己に克ち、己を制する事は嚴であるけれども、一方に又偉き發展しよう、完全に近い人となつて全體の爲に働かうと云ふ目的を以て、大いに自愛して居るのである。斯く、此の子の教育には消極と積極の兩方面が備はつて居るから、假令周圍は少しく不遇であつても、之に就いては充分安心する事が出来るのである。

第三は此の子は内的生活と外的生活との兩方面を備へ、實に母校の内の力となつて母校校風を進める上に大なる貢獻をなして居り、夫れと同時に又外部の社會に向つても貢獻せんとして居る。即ち大學擴張の計畫の如きは大いに積極の態度を現したものであつて、之を實現する事は實に櫻楓會にとつては大切な事である。斯く、生れてから未だ誠に短日月であるけれども、全體が能く調和統一して、日日健全に成長して行く事は實に我々の喜びに堪へぬ所である。斯く我々は此の子の上を瞬時も忘れず愛し育て、居るのであるが、此の子の生命を奪はんとする敵が澤山にあつて、一寸油斷して居ると限りなく襲つて來るのである。故に我々は一方に非常なる喜びに満たされて居ると

共に、又一方には心配せざるを得ないのである。然し如何なる強敵があつてもあなた方に動かざる決心と確き信仰とがあるならば假令人数は少くとも、今日力が現れなくとも少しも心配な事はない。然しそれに反して旗色を見て居る雜兵は、假令千萬人あつても少しも頼むに足らないのである。あなた方の旗色は心中に藏してあるのであるから時に少しく鮮明を缺き、或は何時の間にか變色しても、人には勿論自分でも深く反省しなければ中々解らないのである。今日此の意味深き日に當つて會員諸子が深く銘々の決心信仰を考へ、本氣になつて一致國結し、大いに大學擴張の闘ひを起して行かれん事を私は切に望むのである。

〔櫻楓會通信〕第二十二號・櫻楓館開館記念會

明治四十一年九月

捧げられたる生涯

故雜田氏の御親友、並びに教へをうけたる生徒一同、故人が長く修養を積まれた此の講堂に於て、茲に追悼會を催し、生前の行爲及び其の精神を辿つて之を明らかにする事は、定めし故人の満足に思ふ所であらうと思ふ。彼の生涯は其の履歷によつ

ても知らるゝ如く、勤勉努力して一步一步築き上げられたものであつた。而して誠に短い生涯であつたが、また抑揚があり、種類があつて、極めて興深きものである。故人はいかにして其の尊き性格を養はれたか、その尊き人格は今何所に歸したであらうか。父母なく、兄弟なく、子孫なき彼の志は、誰によつて繼がれるのであらうか。この疑問は又何人も知らんと欲する人生問題であつて、かゝる機會に於て深く考ふる事は人々の自然であり、又義務であらうと思ふ。先づ雜田氏の人格は如何にして築かれたか。

その生涯は略々區別して見れば、五つの階段になつて居る。

第一は生れてから十歳迄、即ち生前自身で屢々人に語られた花の如く玉の如き圓滿なる兒童の生涯である。第二が十歳から二十歳迄、即ち祖父母の長い病氣を看護せられた十年間、長者に奉仕せられた看護婦の生涯、第三は満十九歳より三十歳に至る迄の學生の生涯、第四は三十歳より四十歳迄の教師の生涯、第五は最後のもので、永遠無窮の生涯これである。其の各階段は、各々一つの特徴をもつて居る。而して更に其の生涯を大別すれば二つとなるのである。一つは自ら學問、修養し、身を守つて熱心に勉強された自己、余は之を雜田氏の小人格といふのである。其の二は祖父母の看護に十年一日の如く従事せられ、

又父母ある間之に仕へた孝の徳や、弟を撫育された姉の親切心、一家親族に對する丁寧親切な態度、之を一言にして家族的人格とでも云ふか。この人格が次第に發育して新潟女學校、高等師範學校、及び大阪の堂島女學校や、女子大學校に於て學校を愛し人を愛する情となつて現れ、延いて忠君愛國となり、終りに於ては彼の理想は世界、人類に迄及べる宇宙的精神的人格となつた。之を雛田氏の大人格とするのである。斯くの如く雛田氏には一般の人々にあるやうに、小人格と大人格とを備へて居られた。もしこの二つの人格が調和統一を失へば、矛盾となり、墮落となり、煩悶となるのである。然るに雛田氏は幼にしてはよく小人格を育て、長ずるに及んで次第に大人格をも養はれ、終りに於てよく調和統一して、小さいながら一つの模範的人格を築かれた。余は二十年來最もよく雛田氏を知つて居るので、如何にして其の人格を築かれたかに就いて、此所に述べんとする事は、最も彼の實際に近いものであらうと思ふ。

第一彼は如何にして其の小人格を養ひたてしかといふに、余の目撃する所によれば、忍耐、それと關係ある勤勉努力である。即ち彼の進歩は牛行緩歩で、一步一步、如何なる困難障害にも撓む事がなかつた。晩學ではあり、境遇は困難であつたが、焦らず、狼狽へず、終生を期して其の志を達した。病床に臥して、身動きも充分でなかつたにも拘らず、彼は志半ばにして去つた東京の地をいたく慕うて、「もう一度歸りたい、一日に一時間宛汽車に乗る事を許されるならば、もう一度歸りたい、さすれば十三日半でなつかしい東京の地を見る事が出来る」と云つた。病勢革つてまた起つべからざるを知つたのであらうか、死ぬる五六日前から頻りに紙と鉛筆とを求めて五六日かゝつて漸く三行餘りの手紙を書いた。―よく讀みとる事が出来ない―。斯くの如く終り迄忍耐と勤勉と努力とを以て貫かれた。而してこの忍耐力と勤勉努力とによつて一歩でも進んで行かうとする精神は、よく身體と心とを調和せしめたので、彼の性格にはまた自制力が發達して居つた。故に嬉しくとも、苦しきとも中庸を失はず、倒るゝ迄も奮闘は止めなかつた。次第に病が重く、先きの望みが少くなつたにも拘らず、彼は次第に快活となつて、愉快な空氣を保つ人となつた事は、病床を訪うた人々や其の書信をうけた人々の誰もが感ずる所であつた。即ち一方には非常に奮闘して居つたが、一方にはそれが自然になつて、決して苦しくない。彼が一夜寝られぬまゝに筆を執つて、戯れに「いろは」歌を作つたといふので、見舞に行かれた友人が無理に貰うて來たのが今は記念となつて残つて居る。勿論作りかけであるので、添削などはしてないが、彼が病苦に超越し

て、其の精神に餘裕を持つて居つた事はありありとよまれる。

二三を讀んで見れば

(い) 今更に云ふも甲斐なき事なれど體そまつにせしぞくやしき

(ろ) 論よりも證據となりてくるからにいかにいひわけせんすべもなし

(は) 春は花秋は紅葉のながめさへ床にこもりて見ぬぞかなしき

(は) 母上のこの世を去りし年なればわれも去らんと覺悟しにけり

(に) 忍耐も大切なれどこれはまた限りあるをばゆめな忘れそ

(ほ) 細き腕揮ひてさへも何事も出来ぬにかて、病みふしぬれば

(へ) へだて、もへだてぬものは友垣のむすびかためし契なりけり

(と) 其々に助けあふべき世なりとは思へど人の情うれしき彼の小人格を築き上げたのは、一言で云へば恆徳といふのが最も適切であらう。

第二彼の大人格は如何にして育てられたか。此所に大人格と云ふのは、決して雛田氏が手腕家であり、偉人であり、天才家

であつたと云ふ意味ではなく、小人格に對して用ふる言葉で、

畢竟雛田氏は小さい利己心の人でなかつたといふのである。この人格は一時一事、即ち其の時の義務を其の時に完ふするといふ事によつて築かれたのである。眞理を研究するにも、小さき眞理を次第々々に積み、舊き眞理に新しき眞理を加へて行つたので、極めて遅々としては居つたが、また一時と雖も確信を缺

いた事はなかつた。余の知れる二十年間、恆に一つの志と信仰とを抱いて居つた。然し頭固の頭ではなく、様々の學説も經驗も見聞しつゝ、必ず頭を統一し、一時一事信じて疑はず、新舊眞理の同化を成就せずには置かなかつた。かの「いろは」歌の

續きに、

(れ) 禮智信仁義守りて進みなば人の人たる道に入らましといふのがある。人の人たる道とは所謂ヒューマニティーとか

眞如とかいふ意味で、小さい眞理を忠實に守り同化して進めば遂に宇宙の道に入る事が出来るといふので、蓋しこれは彼の信仰である。彼が學問をしたのは、人の道を學ばんが爲であつた。之を知るのは之を行ふ意思を養はんが爲であつた。徒らに考へず、考へたものは必ず彼の意志にしなければ止まなかつた。

第三には其の小人格と大人格とは、いかにして調和せられた

かといふ事である。之が人間の一番困難に感ずるもので、釋迦やクリストの如き聖人も、生命をかけて努められた。雛田氏は小さいながら人生の最も困難なる其の修養に成功したお方であると云ふ事を深く信ずる。一言で云へば大人格を作る基礎であり、また其の行爲の原動力たる小人格を犠牲に供し、最後に發揮せられた如き大人格を得られたのである。否小人格と大人格とが調和統一して、人の人たる道に入る事が出来た。圓滿中庸を得たる域に達する事が出来た。その小人格は學校、寮舎、櫻楓會、或は君の爲、國の爲、人道の爲に吞まれてしまつた。それが彼の短い生涯に於て目的とする所を完ふした所以である。自分は君や國からの恩義を感じ、また道理によつて支配される計りでなく、彼の終りに現れた精神は、自分が小人格を犠牲として全體に捧げなければ、到底満足する事が出来ぬ、それが彼の自然となつた。

我々は神の如き彼の人格の尊き部分を我々の精神に加へて、益々此の校風を健全にし、團結力を強健にして故人の意志を發揮して行く事が願ひであり、また之が故人の終りまで忘るゝ事が出来なかつた意思であらうと信ずる。

〔家庭週報〕第百六十號・雛田千尋子追悼會

明治四十一年九月

生命の歸趨

故雛田氏の人格は如何になれるか。換言すれば、故人の生命は何れに歸したかと云ふに、こは日頃人々が悟らん事を冀へる永遠の生命、又は靈魂不滅といふ事である。實に之は我々人間の内的要求である。精神的生命の最大要求の一つである。この疑問は昔からある大きな謎であるが、また古來聖賢の充分に解く事の出来なかつた謎である。かゝる大問題を二三時間でお解りになるやうにする事は到底不可能である。少くともこれに答へんと欲するならば、一卷の書物にでも書かねば余の考へて居る事ですら盡す事が出来ないのである。然しまた一方では何人も多少考へ味ふ問題であるから、茲に一言する事は髓に人々の確信を築くに必要な何かの材料となり、また内にある所のその光を一層明らかにする助けになる事が出来るであらうと信ずる。

▲先づ不滅の生命、無限の生命とは何を云ふのであらうか。

人が此の世を去つた時、何人もこの問題が起るのである。果して人の生命は死を以て終りを告ぐるものであらうか。五十年は人生であり、七十は古來稀であるといふが、死後は千年、萬

年續くといふ事があるものであらうか、之は問題である。佛教などには死んでから十萬億土に往くと云ふ考がある。神道では高天ヶ原に、キリスト教では天國に行くといふ。何れも宇宙の或場所に無限に自分を擴げるといふ表徴である。然し限りなく擴く長くといふ事が果して不滅の生命であらうか。否、我々の生存せる地球は、何十萬年の時を経て居るかも分らぬ。また宇宙の星は幾億年經つて居るかも知れぬ。然し長い間續くから我々はこのものを生命あるものとは云はない。又精神あり、價値あるものとは云はないのである。我々が若し何かの仕方を發明して、之から月の世界に旅立ちし、月の世界から木星、木星から何と次第に飛んで、宇宙を逍遙する事が出来たにしても、それで我々の生命は擴大されたとは云へないのである。卑近の例に見てもさうではないか。艦のボーイとなつて太平洋、大西洋を幾度も横ぎつて、歐米の地に遊んだからとて決して大きな人間になつたと云ふ事は出来ぬ。假令カントの如く、生涯七十年間五十哩以外に出た事がないといふ人でも、決して其の人の生命が小さいと云ふ事は出来ない。我々の云ふ永遠不滅の生命は迷信時代に考へた地獄でも、極樂でも、天國でもない。もう少し確實な實在である。然らばその實在とは何か。之は後に説く事によりて次第に解るであらう。

▲第二に不滅の生命と云ふ事は我々の肉體の永く續くと云ふ事であらうか。

假令我が身は死しても我が血を繼げる子孫が永く生き存らへて居る、それが永遠の生命であらうか。またこれが宗教で云ふ未來の復活といふ如きものであらうか。決してさうではない。我々はとかく自分の血を續けると云ふ事が大切であると思ふものであるが、然し單に血を續けると云ふ丈けならば、下等動物でもして居る。しかのみならず、今日の發達した科學によれば、普通親の血肉が子孫に傳はつて居ると思ふのは誤りで、我々の身體には一塊たりとも一滴たりとも親の血肉は無い。否、我々の一身でも、七年前の血肉は新陳代謝して少しも止つて居らないのである。子供は母の乳を飲むが牛の乳でも生きて居られる。その子が必ず親のもので生きて居るとは云はれない。我々の肉體を分析すれば土と何等の差がないので、もし一旦死すれば土に歸して、またもとの妾になる時期はない。然らば何を子孫は享け繼ぐのであらうか、只身體を組織する形式、それを繼ぐのみである。

▲然らば永遠の生命とは、我々の意識、心靈を意味するのであらうか。

これは大分むづかしい問題である。我々が自分と云ふ事を意

識するのが自分である。意識は何かと云ふに我々の経験である。この経験を二つに分けて間接の経験と、直接の経験とにする。一方は経験の目的物即ち客観物體であり、一方は経験をする主観である。間接なる経験によつて知りうるそれを自分で知ると云ふのである。意識はまた無意識になる時がある。然し意識にうつるものは實驗したもの、實在を實驗したものといふ事が出来る。ライブニツツは「我々の意識は宇宙の鏡なり」と云つて居る。又或學者は「意識は萬有を見る事が出来る」と云つて居る。故に意識は實在の一部であり、永遠の生命の一部である。然らば個人的意識、個人的経験が果して永遠の生命であらうか。否必ずしもそれが永久の生命であり、不滅のものゝ全體ではない。宇宙即ち本體を見渡せば時に醒め、時に眠る事がある。生があり、死があり、動があり、靜がある。この波瀾は宇宙即ちその實在が無限の生命に進んでゆく階段である。一段づつ、より完全に進む階段である。そこで我々が眠つたからとて實在は眠らぬ。我々の意識が無意識になつたとて、實在はそのまゝに存在活動して居る。故に永遠の生命は我々個人的意識ではないと云ふ事が確定せらるゝのであると思ふ。

▲然らば果して無限の生命とは如何なる要素を云ふのであらうか。時と空間を超越した。無始無終の永遠無窮なる生命の價値

である。その無限不朽の生命の價値は、之を大人格に見る事が出来る。その大人格の價値と云ふのは即ち我々の意志であり、我々の心の態度である。我々の正しき判断である。我々の最も深き所にある原動力である。その人格は物體の如く知覺する事が出来ぬ。併し乍らその人格の意義、目的として悟りうるものである。其のものは我々が原因結果を以て説き明す事は出来ぬ。その廣さと重さを量る事は出来ぬ。然しその價値を定める事は出来る。永遠不朽の生命とは、畢竟價値の永續保存に外ならぬ。我々が人格を發現するとか、又は文學を研究して美を發揮するとか、科學によつて眞理を發見するとか云ふのは、之皆價値を探し、之を育て、居るのである。この何人にもある價値を求める心の態度によつて、やがて宇宙の價値に出遇ふ事が出来る。この時を指して小人格と大人格とが調和統一したとも、人格と國家、社會、之を更に大きくして人道或は神と合致したとも云ふ事が出来るのである。かうなれば國家社會の意志は自分の意志であり、宇宙の意志も亦我が意志の向ふ所と同一である。プラトンの「我々の意志は、宇宙の大潮流を流れて居る渦である」と云つた様に、たとへその渦は止んでも、滔々と流れて居る宇宙の潮流は依然として動いて居る。或人は「我々の意志は太陽の光をプリズムが分解して赤、綠、紫のさ

まざまに分けた如きものである」と。その色がもと來た道を辿つて歸れば一つの白色の光線となるのである。我々の生命も今一つの色を表して居るが、我々が實體に歸れば、他の多くのものと調和合體して一つになるのである。我々は七色の光線が合して白色になつたからとて、その光の實體が無くなつたとは云はない、分れても合しても依然として光は光である。たとへ我々の小人格は肉體と共に消ゆる事があらうとも大人格||人道||眞如||神に其の價値は歸して、決して消滅するものではない。

▲なほその考が明瞭となる爲に、無限の生命は無限の意志であると云ふ事を申して置きたい。其の人の意志を兩方面から見れば、其の人格は解るであらうと思ふ。即ち意志の一方面を理性と云ひ、他の一方面を情緒と云ふ。之は二つであるが分つべからざる一つの實體である。我々の理性は思想であり、行爲であり、活動である。この思想、行爲、活動が我々の精神の實在である。我といふ者は骨でも肉でもない。我々の思想、行爲、活動にあるのである。而して永遠の生命は我々の頭に無理に作らねばならぬものではなく、衷心からの願望であり、生命である。人々はその爲に生き、その爲に働いて居るものである事は誰も首肯する所であらう。

宇内を支配して居る意志と、衷心冀ふものと融合して居るその意味は、時と所とを超越して居る。例へばクリストの大人格、釋尊の大人格は二千餘年の昔現れたものであるが、今日我々はかゝるお方から遙かに隔つて居ると云ふ感じはしない。否今尙生きたる人格に接するの感があるのである。我々が世界の歴史を學んで、成る可く早く自分の考にしたいと云ふのは何の要求か。早く過去幾萬年かの生命に這入りたい。即ちその意志に這入りたいといふのである。何が爲に生涯を立派にし、修養し、力を養ふのであらうか。決して學者になりたい、月給を取りたい、家庭を營みたいといふ爲ではない、理想を實現したからである。學者になるのも、金をとるのも、家庭を營むのも、理想の實現といふ大なる目的を果さんが爲である。而してその目的は生涯かゝつても果されぬかもしれぬ。井上侯が七十歳以上になつて病床に横はつて居られても、國家の爲に百年二百年先の計畫をたて、居られる。雜田氏が臨終の近い事を悟つた時も、尙其の心には絶えず學校、櫻楓會の前途に就いて企圖して居られた。これ等は己が生命ある間になし遂げられぬ事は明らかであるにも拘らず、その意志は百年二百年の先きに働いて居る。雜田氏の如きは後を繼ぐべき子孫もなく、歸るべき家もないが、少しも寂寞を訴へず、失望する事がなかつたの

は、其の意志が時間と空間とを超越して、全體と共に働いて居つたからである。

▲次ぎは情緒の方面である。

使徒パウロは「天地は廢り、豫言も方言も止むであらう。然し廢れないものが唯一つある、それは愛であり、仁である」と云つて居る。今日では聖書の中にあるものが悉く眞理とは認めない。然しその中にあるクリストの説く眞理即ち仁愛は少しも減らぬ。經文の言葉は古びたとはいへ、釋尊の大慈悲、大人格は廢らぬのである。愛は永遠無朽である。クリストも、神は愛であると云はれた。愛は神である。この愛が活動して居るから人生は無窮である。クリストも、神は愛であると云はれた。愛は神である。この愛が活動して居るから人生は無窮である。クリスト教が歐洲列國の人心を收め、終に世界の全面に其の感化を及ぼしたのは、何の力であらうか。佛教が東洋を支配し、我が日本にも入り來り、千何百年間人心を維持したのは何の力であらうか、クリスト、釋尊が社會の爲、人の爲、身を犠牲にせられた愛の力である。その力が今も死なずに人道を支配して居るのである。我々が寢ても、醒めても、病んでも、常に心を離れぬものは、父母親友の愛であらう。たとへ境遇はかはり時は隔つても、愛の印象は我々の記憶を去らぬものである。而して

愛は愛を生み、愛は愛を合せて、宇宙の精神を生ずる。これが宇宙の完全を實現する原動力となるのである。我々は完き愛を求めて、自分と人と、自分と社會と、自分と神とが一つに融合して、その間に自他の差別がないやうにならねばならぬ。この域に達すれば死は死でない。マルクス・アウレリスが「成熟したる橄欖はその木から落ちねばならぬ」と。人の人たる道に入つて生涯の實を結んだ人は、安き眠りに就くべきが當然である。雛田氏は今や其の實を結んで生涯緊張せる意志を緩めて安き眠りに就いたのである。彼の眠れる、即ち無意識になりし大人格は何れに歸りしか、彼の行かん事を願うた天國は何れにありしか、彼の天國は新しき天と地となり、彼の地獄は舊き天と地となり、彼の現世の生命は小人格にして、彼の永世は彼の修養によりて築かれし大人格なり。彼の永世は彼の中に終り迄活動せし愛なり。今や彼の遺骸は程近き雜司ヶ谷の土に歸した。

然し彼の人格は我が校風となつて生き永らへて居る。其の精神は櫻楓會となつて我々の中に活かして居る。彼の犠牲は我等全體の團結力となれり。彼の意志は全體意志と融合せり。即ち彼は彼が此の世に來りし使命を完ふして、もとの生命に歸つたのである。

故難田氏の御親友方、今日は彼の一生涯に現れた大人格、及び、我々の生涯に必ず實現せらるべきこの人格を深く味うて、殊に故人が努力奮闘して、凡ての小我を犠牲として築かれた人格に接し、その精神の感化をうけて、彼が我々に托して逝かれたその遺業を完ふする事を誓はれたならば、故人を慰むる事之に若くものがあるであらうか。否それが我々人たるものゝ責任である。

〔家庭週報〕第百六十一號

家を城廓として

一步も社會に交らぬ婦人が多い

家庭は社會の原素であるから、家庭が進歩して來なければ、社會も進歩しない道理である。外國では社會と家庭との結び付が速であつて、婦人と雖も家庭の一員たる以上は、即ち社會の一員としての働きの力を以つて居るのであるが、日本では婦人が一度び家庭の人となつたならば、殆んど進歩しない人間に化して仕舞ふが如き傾がある。恰も小さき城廓の内に閉籠つた様な有様で、只家の中の事、家族の事より外には頭が働かなくなつて、社會の事情に疎くなり、社會の進歩に伴うて自分の一身

を進歩さして往く事は勿論、家庭に感化を及ぼし、社會の進進を助けて往く事が出來なくなる。之れは畢竟日本婦人の頭が、長い間の習慣、遺傳、境遇等の影響を受けて居る結果、立派な教育を受けたものでも、自から進んで家庭の進歩發達を促して往く事が出來ないのである。然らば婦人は家庭の主宰者であるから、社會の事情なり、世界の潮流なりを知らなくても善いか、只關係の最も深い親とか夫とか、子供とかの爲めを考へ、これ等の人々へのみ信頼して居れば、女子の職分はこれで盡くされたかと云ふに、日本の昔の婦人はそれでも善かつたかも知れぬが、今日の婦人はそうは行かない。斯様に働の狭い事では夫を十分に助けて成功さす事も出來ず、子供を十分に愛して育て上げる事も出來ない。近親的の愛情のみならば、人間でなくとも鳥獸にもあるのである。眞に文明的の家庭を營まうとするには、今少しく家庭と社會との結び付を近くして、婦人も社會の事情に通じ、最も進歩したる智識を家庭内に應用して、日常の生活を進歩さして行く事を計らねばならぬと思ふ、其方法としては家庭に於て或る一定の時間を讀書に費し、新らしき智識を常に文字の上より求める事に勤め、又社交をも怠らずして自分の家庭と、他の家庭とを競べ合うて研究して見たり、批評して見たりして、一家の進歩を計らねばならぬ、元來今日表面で

は婦人に自由を與へて居るやうであるが、實際は實に云ふに忍

びぬものがある、文明の光りが照して居る家庭は實は稀れである。悲惨な運命に囚はれる人が少くない、之は果して誰れの責

であるか、婦人を束縛するのは何であるか、我國の男子の教育が不足で、品性が下劣であるからでもあるが、其の禍の根源は

矢張婦人にある、婦人を束縛して居るものは、實に婦人自身の缺點である、一家の不幸は多くは妻君の愚痴から、狭量から、

無智から生れる、渠女は無智で、低い感情に束縛され、利己の念に支配されて居る爲に、ある時は我が儘になり、偏頗にな

り、無能になつて、家の平和を破り、家族の心を傷けて、夫れでも未だ自分の束縛は何から起るかを悟ず、只人を恨んで、愚

痴を云つて暮すのである。男子は我儘をする様であるが、實は好んでする譯ではない、我儘をして不快を紛らして居る事は、

實に猶更の苦痛である。愉快に酒を飲んで居るのではない。此婦人の缺點は、獨り男子の苦痛であり、家庭の不幸である許りで

なく、今日の國家の不安は、實に此處にある、國民の半數の婦人が、人たるべき資格に達して居らないと云ふ所にあるのであ

る。然らば之れを救ふには如何にしたら可いか、外に仕方はない、婦人にもつと教育を與へて廣い關係を悟らせ、部分的、

感情的の頭腦を、もう一層深く廣くして、實力をつけ、眞の自

由を婦人に與へると云ふ事である。

〔新婦人〕百四十九號 明治四十一年十月

天長の佳節に際して

戊申の詔勅の御趣意を仰ぐ

今朝天長の佳節に當り、本校教職員生徒一同と共に講堂に會し、謹んで祝賀の意を表し、寶祚の無窮を祈り奉り、深く聖旨の存する所を考へ、皇謨を翼讚し奉り、忠良なる臣民たる實をあらはす事は實に緊要なる事であると考へる。

我が允文允武なる 今上陛下は内に於ては元首として明治維新の大業を成就し給ひ、外に向つては大元帥として日清日露の大戦に於て振古未曾有の大勝利を得させ給ひ、今や我が國の時運は茲に一新紀元を作り、宇内、列強と轡を並べて進まんとする時に當り 陛下には我が國民の元父として國民自彊の道を勸まし給ひ、商工業の運命に軫念を傾けさせ給ひて、畏くも十月十三日に於て戊申詔勅を煥發し給ふに至つた。謹んで惟るに、恰も我が國民が覺醒し、我々も亦屢々注意せる第二の戦争、商工業の戦争を開始する時に當り、大元帥陛下が宣戦の詔勅を下し給ふが如く戊申詔勅を賜はり、我が忠良なる國民の覺悟を促

し給うたのであると考へる。我々は今朝謹んでその深き思召を考へ、その聖旨の眞意を解さねばならぬ。茲に一言私の所感を述べて今朝の祝辭に代へたいと思ふ。

第二の戦争と云ふと、動もすれば極端なる帝國主義を稱ふるが如く、又狭き愛國心を鼓舞するが如く聞ゆるかも知れぬが、我々の精神は決してさうではない。第二の戦争は平和の競争的戦争であり、新萬國主義である。なほ一方を強く云へば相互扶助主義である。世界主義と愛國主義、萬國主義と帝國主義とは決して矛盾するものではない。否、髓に之等の要素が調和統一して、健全なる廣義の愛國心とならねばならぬ。我々が日頃から心がけて居る此の考は、實に今日世界の大勢であり、國家の大方針であると考へても誤りはない。殊に今度の詔勅を捧讀すれば、その意味の明らかなる事日星の如くである。「東西相倚り彼此相濟シ以テ其ノ福利ヲ共ニス朕ハ爰ニ益々國交ヲ修メ友義を悖シ列國ト與ニ永ク其ノ慶ニ頼ランコトヲ期ス」と。之は動もすれば我が國の愛國心が狹隘に流れ、自ら誇り、外を侮るといふ傾きのある弊をお矯めにならうといふ思召であると感ずるのである。之は獨り我が國のみならず、世界各國の歴史にもその事實があるので、殊に我が國民はこの戦勝後の曉に於て大いに考へなければならぬ。

扱て私がこの詔勅を捧讀して、恰も第二戦争の宣戦を布告し給ひ、大いに國民の覺悟を促し給うたが如く感じたのは、「戦後日向淺ク庶政益々緊張ヲ要ス宜シク上下心ヲ一ニシ忠實業ニ服シ勤儉産ヲ治メ」とある御誼である。我が今上陛下には維新の大業には御成功になり、海外との不幸なる葛藤にも大勝利を博し給ひ、今や我が國の基礎、漸く固まらんとする時に際し、商工業的國民を作り、世界の生存競争場裏に於て、我が國運の基を啓かなければならぬといふ時に當り、即ち「天壤無窮ノ皇運ヲ扶翼スヘシ」と云ふ意味を適切にお示しになつたのである。獨りこの詔勅出でたるのみならず、我が政府、即ち只今の内閣は、大いに經費を節減し、今後の教育費をも勸業に大切なる大博覽會をも繰り延べ、大節儉の覺悟を示された場合、又經濟界は銷沈の極に達して居る場合であるから、國民が我が國の方針を誤つて消極主義になり、只質素儉約といふ一方に偏したる傾向になりはせぬかといふ心配を抱き、また之を只質素儉約といふ意味に解して居るものも往々聞く所であるが、之は大なる誤解であらうと考へる。我々も勿論質素儉約という點に就きては、之迄大いに注意し、其の結果は我が校の寮舎の生活にも、全體の傾向にもあらはれて居ると自信する事が出来る。なほ私は現今の必要から大學擴張の計畫を立て、獨り講義録を刊

行する計りでなく、我が校内に今行うて居る組合組織、消費組合の如きものを、廣く全國に及ぼし、我が櫻楓會が中心となつて、家庭組合の組織をも副業として起さんとし、益々積極的に女子と雖も國家の必要に赴かねばならぬと考へて居つたが、萬一我々の考へる所と當局者のお考と違うては心配であるとかへ、平田内相を訪うて私の計劃を計つた所が、大臣は過日地方官に訓示せられた演説中にも見ゆるが如く、大いに産業、消費組合を奨勵し、殖産の道を啓く爲に、産業組合等をも大いに振作せしめたいといふお考を持つて居られる。私は深く喜んだ。内相のお考も單に消極的ではなく、積極に我が國の商工業を發展しなければならぬとの御意見である。我々は今日國民の一部として、一家の主婦として消極的にも積極的にもその實を擧げてゆく事が、我々の責任であると考へる。

次にこの度の御詔勅は單に物質的即ち商工業の發展、質素儉約の勵行を促し給うたのみではないと考へる。苟も世界の競争場裏に於て、確乎として大國民の態度を以て起ち、商工業的戰爭の勝利を冀ふに當り、どうして物質一方に傾いて其の大任が果されるであらうか。物質の膨脹を來す源は、實に國民の偉大なる精神に須たなければならぬ。我々は今日のこの大切な時機に於て、偉大なる精神の養成は一日も忽せにすべからざる

事であると考へる。此の頃米國の一經濟學者が我が國民性を評して居るのに、日本の國民性は飽く迄武勇である、惜しむらくは經濟財政に就きては大なる決點を持つて居る。その第一は不眞面目である。不正直であり、斯滿的である。商賣の上に信用の置けぬ國民である。約束を違へ、時と場合によつては他を斯いても敢へて耻ぢぬ國民であると申し居る。之悉く我が國民の眞相ではないかも知れぬが、一部の眞理はある。我が國民には武士道がある。國家の危急には喜んで一身を捧げるが、商賣上には精神的要素を缺いて居る。今日の戰爭は獨り機械では出来ぬ。日露戰爭に於ても、機械や兵數に於ては、我が國より露西亞の方が勝さつて居つたのである。唯何物も奪ふべからざる我が固有の武士道的精神が之に勝たしめたのである。商工業の戰爭と雖も金力計りではない、智力計りではないかぬ、やはり偉大な精神の力に頼らなければならぬのである。商工業上の武士道的精神によるのである。詔勅に仰せられた「惟レ信惟レ義醇厚俗ヲナシ」といふ御趣旨を奉體して、第二の戰爭に向ふ唯一の武器としなければならぬ。

更に我等教育家學生が、最も深く注意して捧讀し、最も深く考へなければならぬ事は、「華ヲ去り實ニ就キ」といふ大御言葉である。これは今日の我が國の華美な柔弱な習慣をお戒めに

なつた所の聖旨であらうと思ふ。華を去りといふのは虚を去る事、平たく云へば虚榮を去れといふ御趣意であらうと思ふ。華を去り實に就くといふ事は、本校の始めからとつた方針であり、戦後我が國社會の殊に最も重きを置いた所であると考へる。然るに今日斯くの如く軫念を憫まし奉れるを恐懼すると同時に、一層深く各自を省みる事が必要であらうと思ふ。我が國一般の風習となりし華美、殊に今日の婦人の虚榮心が、堅實なる學風に育てられた學生にうつて居るとは思はぬ。もはや今日は學生が顔に化粧し、衣服を着飾るといふやうな幼稚な華美贅澤な時代は過ぎ去つて居ると思ふ。然も顔の化粧よりも、衣服の贅澤よりも、今一段深い所に、虚を裝ふ事はないであらうか。即ち眞面目に修養し、學問して居るが如く見ゆるが、實は決してさうではなく、煩悶病、不平病乃至は高慢病とかいふ恐ろしい病の虜となつて、徒らに空な知識を求め、虚なものに依つて安心立命をしようとして居るのではないであらうか。これは獨り女子のみではない、學問修養を以て任ずる世間の學者教育家と云はるゝものも、往々この幣に陥つて居る。而して自分獨り、もはや出來上つて居ると考へたり、或はもはや高く悟つて居ると考へて、超然と世間を凡俗視して見たり、或はどうしても人間の力では解らぬものを、誤つた方法で知らうとして煩

悶したりするものが尠くはない。之等は向上心が過ぎ、理想が過ぎて、病的となつたものである。眞理を努力奮勵して一歩宛求むるにあらずして、只遊戯的に求めるものである。理想を實現しようが爲に求めるのではなくて、飾りの爲に求めるのである。實の擧らぬ根本は華を求めて居るからである。殊に今日女子教育の盛んになるにつれて、最も注意しなければならぬ事はこの點である。心の虚飾、即ち浮華とか、不柔順とか高慢、生意氣とかいふ弊風に染まぬ事である。之は昔から女子に學問を與へる事について危ぶむ第一の理由であり、また今日我が國の輿論が女子教育に反對する第一の理由である。我々もかくの如く女徳に悪影響を及ぼすやうな女子教育には大いに反對である。我々は教育によつて女子の虚榮心をいやし、積極的の女性に發展を計らんとするものである。過日小松原文部大臣が地方官に訓示せられた演説中にも、特別なる事情あるにあらざれば女子が高等の學府に赴くには當らぬ、といふ意味の言葉がある所から、文相は女子の高等教育に反對であつて、之を抑壓するものであるかの如く誤解する者はないでもないから、一言之に就いて眞相を明らかにして置き度いと思ふ。

私は過日文部大臣をお訪ねして、特別なる事情云々といふ文相の言葉に就いて、之は資産あり、能力あり、また志ある者に

は高等の教育を興ふる必要があるが、其の資格なき者迄、只名の爲に徒らに高等の學府に遊ばんとする者をお戒めになつたのでありませぬか。とお尋ねした所が、大臣もそれはその意味である。勿論女子教育は必要であるから、堅實な學風の下に建てられて居るものならば、益々その發展を望むものである。と申された。所謂文相の、特別な事情の下にある所の資産あり、能力あり、志ある人々は國家社會に如何なる關係を持つものであらうか。

獨逸の社會學者アーモンが調査研究したもの、中に、國民の社會的價値の割合を示して居る。先づ國民の社會的價値を分けて四つとする。その第一は知的價値であり、第二が道德的價値、第三が經濟的要素、第四が健康である。この四つのものを調和して多數を抽んで居るものが、偉人とか天才とかいふもので、之は國民の中、極めて少數である。又之に次ぐ才幹といふやうなものは稍々多數である。而して又下等な方に至つて、無藝、無學なるもの、下つて賤民、更に下つて不具者、奇食者、犯罪人、怠惰者といふ如きものがあつても、之等も高尚なる國民の如く亦餘り多くはない。只國民の大多數を占めて居るものは凡庸なる者である。而して下等な國民が益々減少し、凡庸なる者が愈々才幹、天才に近く發展して行く事、換言すれば

國家が益々繁榮して行く事は何によるかといふに教育によるの外ないのである。歐米の列強は今や盛んに教育によつて國家の發達を期して居る。我が國と雖も天壤無窮の皇運を扶翼し奉るには、教育によつて國民を作るより外ないのである。女子も國民の一部である。女子の頭が進まなければ、凡ての國民を高めてゆく事が出来ないのは、一目瞭然である。加之國民が生れ、また人と成るのは家庭に於てである。女子の知識が進み人格が高まらないで、どうしてその家庭が美はしく生命あるものとなる事が出来るであらうか。恰も第二維新即ち商工業的競争場裏に向ふ臣民に其の覺悟を促し給ふが如き御詔勅を拜するに當り、國家はどうして國運の發達に大關係ある女子の教育を忽せにする事が出来るであらうか。否、もしも、陛下の大御心の存する所を汲むならば、益々之を獎勵して、女子をも國民として、人類として、出来る丈け大きく發達せしめなければならぬ。此に於てか文相の訓示に見えた特別の事情あるものといふ、財産あり、志ある者は、少數であるにしても、それ丈けが教育されて人間が大きくなれば、國家はそれ丈け高尚な國民の膨脹を見る事が出来るのである。而して普通の者にも、なほ出来る丈け廣く教育の恩恵を及ぼす事に努むる事は、國家の急務であると云はねばならぬ。今回我が校に於て企てたる大學擴張

の精神も、この必要に赴くに外ならぬ。我々は今後益々聖旨を奉體して、奮勵せねばならぬ。

〔家庭週報〕第百六十四、百六十五號 明治四十一年十一月

如何にして確信の基礎を築くべきか

あなた方が真面目な態度と非常な熱心とを以て修養を続け、人間の進歩の原動力である確信を強固な基礎の上に築かんと努めて居らるゝ事は、私の深く喜ぶ所である。然しあなた方の中には知識では一通り解つた様であるが、未だどうも眞情が伴はない。衷心から偉大な力が湧き出て、確信を實行せざれば已まないと云ふ態度が續かぬ者もある様であるが、夫れは何故であらうか。各自銘々に異つた種々の原因のある事は勿論であるが、私の觀察する所に依れば、其の根本の原因は、未だ其の人の眞理を求める態度が明らかでない事と、頭腦の開拓の仕方が充分に解つて居らない事である。換言すれば「如何にすれば我々は宇宙の本體を解する事が出来るか」「眞の修養の態度は如何なるものでなければならぬか」等の問題が明瞭に解決されない爲に、確信の基礎が強固に築かれないのである。夫れからもう一つの原因は宇宙の本體を知りたい、偉大な人格になりた

い、と熱望してもなか／＼其の要求が満たされない事である。勿論此の熱望は實に大切なもので、之があなた方の強固なる意志となり、研究の原動力となるのである。然し乍ら宇宙の本體を隈なく解し完全無缺なる人格を直ちに現す事を熱望するのは、即ちあなた方の煩悶の原因となり、却つて勇氣を挫き能力を減殺するのみであるから、此の態度を改めなければならぬ。如何となれば我々は有限のものであり、宇宙は無限のものである。我々の知識は如何に廣く深くなつても、到底全體の一部分たるを免れない。故に之で宇宙の眞相が悉く解つた、最早研究の餘地はないと云ふ時は決して來ないのである。然し今日の最も進んだ眞理探究の態度が出来るならば其の確實な基礎の上に確信を築いて、喜び勇んで進む事が出来るのである。之に反し、若し此の根本である確信の基礎が少しでも誤つて居り、或は不確實であるならば、其の結果は偏した主義、誤つた人生觀となつて社會を害し、又思想混亂を來して判斷を誤り、妄想に陥る事を免れない。實に懼るべき基礎の誤謬、不確實である。そこで我々は例令困難であつても、確信の基礎を確實に築く爲に、眞の修養の態度、眞理探究の態度は如何でなければならぬか、換言すれば「如何にせば宇宙の本體を解し得るか」と云ふ認識上の問題に就いて解決しなければならぬのである。此

の問題に對しては、昔から種々研究された結果、様々の解決が試みられた。今夫れを發達の階段に大別して申すならば、次の様になるかと思ふ。

(第一)理想主義

(第二)實在主義

(第三)代表主義

(第四)代理主義

(第五)象徴主義

(第六)主行主義

之等の言葉の内容に就いて、少しく説明を加へないとお解りになり難いかと思ふが、時間が少いから、極く要點だけを云はうと思ふ。其の前に一寸御注意して置きたい事は、我々は唯認識論の學說、學理を解釋する爲に此の研究をするのではない。

我々の修養の態度、眞理探究の態度を明らかにして確信の基礎を確にし、人格を築くのが目的である。それから次に認識論は科學、文學、美術、宗教、道德等の問題と別々に成り立つものではなくして、其の間には大いなる關係がある。否寧ろ之は一つの生命である、一つの生命が發達する階段に過ぎないのである。故に認識論を無視しては之等の問題は解決されない。何が宇宙の本體であるかと云ふ問題は、哲學、宗教には勿論、科學、文學、美術にとつても、最も大切な根本問題である。此の二つの考を頭腦に置いて、研究を進めたいと思ふ。

第一理想主義 茲に理想主義と云ふのは、認識に關する理想主義を指すのである。此の主義の極端な認識論は純理に重きを置

き經驗を輕視するのである。而して例令如何なる形を以てするも、宇宙の本體を示し得るものではない。如何となれば、宇宙間の現象は皆假象であつて、萬有は其の本體を現すものではない。即ち表象と表象されるもの(宇宙の本體)との間には何等類似の點もない。故に我々は知覺を以て宇宙の本體を解する事は出来ぬ、唯直覺、或は純粹思考に依つてのみ宇宙の本體を知る事が出来ると云ふのである。

第二實在主義 理想主義が前述の如く純理を重んずるのに反し、實在主義は經驗を過重し、感覺から來る經驗も、感情から來たものも、皆宇宙の本體の正確なる模寫であるから、人間は觀察、經驗に依つて宇宙の本體を認識する事が出来る。即ち表象は客觀の事物の眞相を、其の儘完全に示す事が出来るといふ説である。そこで極端な理想主義と、極端な實在主義とは、全然相容れる事が出来ないのであるが、然し圓滿なる理想主義は、決して溫健なる實在主義と相反するものではない、必ず融和すべきものである。我々は精神のみでは生きて居られぬと同時に、肉體のみ、パンのみで生きる事は出来ない。即ち人間にも感覺に依つて知り得る肉體と、全く感覺のみを以ては知る事が出来ぬ精神の方面とがある。夫れと同じ様に、宇宙にも亦感覺、感情を以て解し得る現象と、もう一つは内的實在とも云ふ

べき精神、又は本體と云ふ様なもの即ち極端な實在主義の態度を以てしては、到底解する事の出来ぬものがある。而して又理想主義が極端に走ると、カントの所謂超越的理想主義の如きものとなり、實在主義の極端なものは主知説となつて仕舞ふ。故に我々の態度は理想主義と實在主義とを、調和統一したものでなければならぬ。其の基礎の上に、我々の主義、確信を築くに非ざれば、安心立命を得る事は難いのである。

第三代表主義 今あなた方が此の机を御覽になると、あなた方の頭腦に机と云ふものが知覺される、此の知覺が其の本體であらうか、否知覺は本體の代表に過ぎないのである。然らば宇宙の本體は何であるかと云ふと、其の一つの方面は運動であり、もう一つの方面は感情である。宇宙の本體の一つの方面が運動であると云ふのは何故であるか、例へて云ふと我々は物の色音を知覺するが、此の知覺は前に云つた通り本體ではなくして其の代表である。然らば色の本體は何であるかと云ふと、エーテルの運動であり、音は空氣の運動である。夫れから宇宙の本體のもう一つの方面が感情であると云ふのは、我々がものを知覺するのは我々の主觀に意識があるからである。此の意識とは何であるかと云ふと感情の代表である。感情は傾きであり衝動であつて、此の感情と感情とが有機化して意識となる。而して此

の感情と運動とは、確に一致する所がある。其の一致に依つて、我々は宇宙の本體を知る事が出来ると云ふのである。以前主知説等を奉じた人達は完全なる認識は知識に依つて出来るものであると考へて居たが、代表主義の説は、意識も源は感情にある、故に我々の行爲、意識、宇宙の傾向等は感情の代表であり、我々の知覺の代表であり、我々の知覺は運動の代表であると云ふのである。而して我々は此の代表に依つて、知識の土臺を得て居るのである。茲に於て我々の認識の態度は、如何でなければならぬか、確信の基礎を如何に築くべきか、と云ふ事に就いて暗示を受けなければならぬ。昔から神の聲を聴くとか、宇宙の靈に交るとか、宇宙の本體を見るとか云ふ様な言葉があるが、或時代には、神の聲を直接に聴き宇宙の本體を直感する事は出来る、此の不思議な經驗をしなければ満足が出来ぬ、確信が築かれぬと信じられて居つた。然し神とか宇宙の本體とか云ふものは、斯くの如き意味で直感し得るものではないのである。

第四代理主義 第四の階段は代理主義である。前述の代表主義は知覺の階級であるが、之はもう一層進歩して、認識の階級に達したものである。代理主義の認識には左の三要件がある。

- (一)主觀
- (二)内在客觀
- (三)内容

即ち我々の主観は、直接に事物の本體を認識する事は出来な
いけれ共、此の主観と事物の本體との間に仲介者があるなら
ば、之に依つて我々は本體を知る事が出来る。例へば今外を車
が通つて居ると云ふ事を我々は認識するが、何によつて車と云
ふ事を認識したかと云ふと、彼の音に依つて認識したのであ
る。然らば彼の音が車であらうか、否音は車の内容の一つに過
ぎないのである。音といふ内容の一つが舊經驗を誘起すると、
我々には此の誘起された舊經驗を内在客觀即ち仲介者とし、之
に依つて車なるものを認識したのである。故に内在客觀は何で
あるかと云ふと、我々の舊經驗、即ち記憶に依つて貯へてあつ
た所の觀念である。

而して我々の認識は此の内在客觀と云ふ仲介者に依つて、始
めて出来るのである。之は獨り車とか、月とか、花とか云ふ様
なもの計りでなく、我々の直接經驗の感ずるとか、思ふとか、
意志とか云ふものも矢張り同様に仲介者があつて認識せらるゝ
のである。故に代理主義に従へば、我々人間の頭腦中に貯へて
ある、生きた經驗を綜合したものを仲介者として、我々は宇宙
の本體を認識する事が出来る。換言すれば、宇宙の本體は矢張
り我々の經驗を組立て、出来たもの、即ち我々の經驗世界であ
ると云ふ事が出来るのである。茲に於てあなた方は深く考へて

御覽になるならば、知識の價值とか、我々は如何にして宇宙の
本體を知るべきか、と云ふ事が御解りになるであらうと思ふ。

我々の知識、經驗は本體ではなく、其の代理的のものである
が、我々は此の仲介に依つて、始めて宇宙の本體を認識する事
が出来るのである。而して無限の宇宙に對し、我々の知識は有
限であるが、段々に其の範圍を擴げて、限りなく進んで行く事
が出来るのである。我々は斯くの如き、知識經驗によつて基礎
を築き、其處に確信を作り満足を求めなければならぬ。茲に於
て知識は空理でなく、無味乾燥な形式でもなくして、生命あ
り、力ある、眞の價値を現すのである。以上の如く代理主義
は、主として認識に關しての説であるが、次ぎの象徴主義はも
う一層情緒的、理想的要素の加はつたものである。

第五象徴主義 始めに一寸説明して置かなければならぬ事は、
最初の我々の知識は矢張り象徴的であつたと云ふ事である。故
に今日でも、小兒の行爲、思想は象徴的である。勿論之は幼稚
なもので、進歩したる象徴主義と同一視すべきものではない
が、其の態度、傾向は、矢張り象徴的のものであつたのであ
る。其の態度が段々に進んで神話的となり、藝術的となり、科
學的となり、更に哲學的となり、夫れがもう一層進んで再び象
徴的になり、更に理想的、宗教的に進むので、其の進歩の有様

は螺旋狀をなして居る。而して進歩の有様を人類の進化と云ひ、文明と呼ぶのである。此の進化と云ふものは何であるかと云ふと、フレイベルは物體相互に作用を起し、親和するものが進化であると言いたが、即ち人間の頭腦の新しい内的結合が進化であり、人間と人間との綜合が文明である。而して此の宇宙の本體と、人間との一致結合が即ち宗教である。と云つて宜しいのである。あなた方の求めて居る人格、確信も又結合である。美術、文學の如きも、宗教も、一つの結合に依つて出来るのであつて、之等は廣義に云へば、何れもあるものゝ象徴である。象徴は想像を誘起し、情諸を隘々旺んならしめんが爲のものであつて、宗教の生命、道德の力は皆象徴に依つて養はるゝものである。故に象徴は感情に缺くべからざる要素で、象徴は又感情を無視しては成立する事の出来ぬものである。

換言すれば象徴と感情とは、恰も肉體と精神との如き關係のものである。肉體なくして精神は存在せず、精神なくして肉體は存在する事が出来ぬ。實在を離れて現象はなく、現象を離れて實在はない。又人間を離れて象徴はないのである。而して此の象徴に依つて、人間の尊き情緒は表れる。即ち宗教は象徴である。獨り宗教のみならず、美術も、道德も、人道も凡て此の精神的の生命は象徴に依つて現さるゝのである。今日迷信の夢

が醒めて人類が生命ある宗教を見出す事が出来る様になつたのは、つまり宗教は象徴であると云ふ事に氣が付いたからで、宗教が哲學、科學と結合し、猶宗教の眞髓を失はずに進む様になつたのは、矢張り宗教は象徴であると云ふ事が解つたからである。キリスト教、佛教、或は其の他の宗教を信じて居らるゝ方が、我々の云ふ精神的生命に満足が得られぬ、物足らぬ感じがすると云ふ事は、宗教は象徴であると云ふ此の發見に依つて直ちに補はれ、安心立命する事が出来るであらうと思ふ。キリストも、釋尊も、矢張り象徴である。凡ての人格的神は象徴である、斯く我々は象徴に依つて宇宙の本體を解し、情緒を發達させる事が出来るのである。そこで第四の代理主義の階段迄は、我々は哲學に依つて宇宙の本體を認識する事が出来るのであるが、夫れ以上に進んで理想境に入るならば、象徴に依らなければならぬのである。然して前述の諸要素は、何れも認識に缺くべからざる要素であつて、つまり進歩の階段である。

第六主行主義 最後に、今御話した幾つかの認識の要素を調和統一して、我々の認識の態度を明らかにしたものが、主行主義である。ジェームスは全然此の意味で申されたのか、どうか解らないが、そこ迄深く考へなければならぬと私は思ふ。即ち主行主義は、我々の基礎となる、凡ての態度を調和統一したもの

でなければならぬ。主行主義に就いては前に大略御紹介した事がある、(本書八二〇頁参照)。其の上に又今日御話した諸要素を綜合して、深く御考へになつたならば主行主義の内容が一層明瞭になるであらう。従つて又我々が熱望して居る所の確信の基礎を築いて、生涯發展して行くには如何なる態度を以て修養しなければならぬかと云ふ事が能く解り、非常なる満足を以て、實行に努める事が出来る様になるのである。

〔櫻楓會通信〕第二十二號・櫻楓會例會(明治四十一年十一月

今後五十年の大勢如何

我が國家が開國以來五十年、即ち半世紀を經過し、後半世紀の初年に當る明治四十二年を迎ふる事は我が國民にとつて誠に意味深く感ぜられる。我が國家は昨年(於て開國五十年の記念として米國艦隊を迎へ、また同時に開國の志士吉田松蔭の五十年祭を行ひ、或はまた憲法制定後二十年の記念日を祝ひ、國民我が國家は第一維新の偉業を成就して少年時代を去り、今後五十年に於て第二維新を営み、壯年時代に入らなければならぬといふ自覺を促された。殊に昨年十月渙發せられたる戊申詔勅

によつて、國民は一層その自覺を明らかにせられたのである。

然らば我々は如何なる計畫を立て、今後の日本に臨まなければならぬであらうか。その計畫を立つるに當つて、先づ今後五十年の大勢如何を知らなければならぬ。我々は何故

今迄を第一維新—少年時代、今後を第二維新—壯年時代

と云ふのであらうか。

第一、今迄の日本の運動は、多くは他の刺戟をうけ餘儀なくせられたといふ傾きが見える。即ち鎖國の禁を解いたのも、外國の壓迫に因つてであるし、日清、日露の戰鬪を開いたのも、外よりの刺戟により、寧ろ自衛上決心し、活動したのであつた。

其の他憲法を布き、法律を編み、條約を結び、或は凡ゆる文物制度を整へたのは、皆外國の刺戟と指導とによるので、一言以て之を云へば他動的に動いて來た時代である。今や國家自らが自分の地位を認め、國民性を自覺し、世界の大勢に精通して、常に自動的に開始せんとする時代に至つた。個人で云へば始めて自己を知り、一個の人間として立つべき時となつた。故に國家もこれより壯年時代といふのである。

第二、從來の活動は、自衛の爲であり、自修の爲であつたが、今後は世界の爲に使命を感じ、自己の天職の爲に盡さんとする

意志が出来た。これ所謂第二維新を營むといふ所以である。然らば

今後我が日本は如何なる責任を果さなければならぬか

第一、今後我が國が、東西の調和者となり、世界各國の人種と人種との一致協力を計る媒介者とならなければならぬ。今之を詳説すれば、

(一) 通商外交の中心となり、媒介者となり、これ等の利害問題の中に立つて、世界平和の爲に盡すといふ事が大切である。

(二) 世界から人種的偏見を除く事に就いての先覺者とならなければならぬ。即ち世界の感情を融和して、眞に四海兄弟主義を鼓吹し、又之を實現するの衝に當る事を努めなければならぬ。

(三) 世界的宗教の調和者とならなければならぬ。即ち人道の爲に盡さなければならぬ。

第二、第一維新は舊習を破つて、進歩の障害を除いたのに過ぎなかつた。即ち凡ての制度を改め、憲法を布き、法律を制定し、條約を改正し、國家を成立せしむるに必要なあらゆる組織が定つた。第二維新はその内容を充實する事に努めなければならぬ。また破壊せられたものに代つて新しきものが建設さ

る、やうにならなければならぬ。その他政治、教育、宗教、貿易、商工業凡ての改善發達を計つて、大いに國力の充實を計らなければならぬ。

第三、第一維新は模倣時代、翻譯時代、文物輸入時代であつたが、第二維新は發明、發見の時代、創作の時代、研究の時代である。

第四、第一維新は書物的知識時代、知識蒐集の時代であつたが、第二維新は社會實現の時代、國民的運動の時代、家庭、國家、社會を有機化して行く時代である。

第五、第一維新は思想混亂の時代であつたが、今後第二維新によつて、世界の思想を統一して、新世界的大理想の眞理を日本で行はなければならぬ。日本は、今後世界の運動の統一され、また實現さるゝ中心としての責任がある。またその責任は果されるであらうと思ふ。前半世紀に於て米國が世界各國の發見したる眞理を應用し、其の實驗場となつて、遂に米國今日の富裕をなし、その文化も歐羅巴に追ひ付いたといふ許りでなく、今やこれを凌駕せんとする勢を示して居る。今後は日本がその理想の實驗場となり、歐米に於いて發見された眞理や理想が日本に於て試みられ實現せられなければならぬ。また必ずさうなるであらうといふ理由がある。即ち

(一) 地理から云つても、我が國は東西の中央に位し、東西の思想が集り、またその有志者が會合するに適當な地位を占めて居る。

(二) 我が日本は昔から世界の長所を調和統一してこれを同化する品性を持つて居る。即ち神道も佛教も儒教も其督教も我が國では速やかに調和せられて、現に之等が共存して居るが、敢へて争闘も起らない。これ等を見ても我が國民は宗教的偏見強からず、餘程寛大なる度量があり、調和統一する能力を持つて居る事が解る。

(三) 日本の宗教とも見るべき、國民の信仰が元來人道を基として居るから他宗より憎まれない。

(四) 日本には大和魂といふ武士氣質がある。事に處して亂雑を一刀の下に斷つが如き果斷力がある。今後の社會に立つて行くには、個人としても、國家としても、斯くの如き一つの強い力は實に必要である。

第六、第一維新は男子の働きによつて出來た。従つて男子の社會の革新が行はれた。今後は女子が中心となつて、家庭の中より内部的の改革を行はなければならない。従つて婦人の價值、婦人の人格を現す時である。即ち婦人の世紀とも見るべきであらうか。以上の如き責任ありとすれば

我々は如何なる覺悟が必要であらうか

第一、商工業の競争をする覺悟がなくてはならぬ。元來國家も個人と同じく生存するに就いては國民の衣食が足りて後、科學、哲學、文學、宗教が起つて來るのである。今後の生存競争は國家的であり、團體的であると云ふ事は世界の大勢を見て明らかである。而して今後の衝突も、今後の一致協力如何も、その根本は食物問題即ち經濟問題である。その形を變へたものが宗教の衝突及び人種間の争闘になるのである。我が日本が過去五十年間に二度迄大戦争に勝利を得て、列強の仲間入をしたからとてまだ決して安心は出來ぬ。最も親交を有する米國すらも、人種的、宗教的偏見に於ては往々慘忍酷薄の處置に出るではないか。かの米國西部海岸に行はるゝ邦人排斥問題の如きは、なか／＼その聲が治まりさうにもないのである。又我が同盟國として最も信頼するに足る英國も、其の凡ての植民地に於ては日本人排斥が行はれて居る。其の他獨逸國の如きは申す迄もない。此の人種的、宗教的競争場裡に何を以て戰うて行かねばならぬか。やはり先づ之に向ふ主なる武器は財力である。然るに我が國の富力は如何。米國の十三分の一にも及ばないといふ哀れな有様である。而して其の上に國家に不相應なる二十幾億

の借金を負うて居る。加之その財源も決して豊富ではない。境遇を開拓するに必要な頭腦の力も誇るに足らぬ。さればとて商業信用も列強に比して遙かに劣つて居り、年々の貿易は敗北しつつあるといふ有様ではないか。之を如何にしたならば救ふ事が出来るであらうか。

(一) 貿易を盛んにして、輸出が輸入に勝つ差が増加する様に努むるより外仕方がない。然らば我が國家は如何なる貿易の方針を探らねばならぬか。英國の如く自由貿易でゆけるであらうか。米、獨、佛の如く保護貿易が必要であらうか。これは國の事情と時の必要によつて其の政策が定まるのである。英國の如きは、世界の政策を以て任じ、外國や殖民地から未製品を入れ、之に製造を加へて各國に輸出して居る。斯くの如く世界的の商業をして成功した。米、獨、佛は國の事情から保護貿易を必要とし、又其の政策をとつて成功した。例へば獨、佛の如きは自國の商工業を保護する爲に外國の輸入品を禁止し、これによつて國民の發明力を激發せしめ奮闘力を起さしめて居る。かのナポレオンが殖民地のケンの砂糖輸入を禁止したので、國民は必要に迫まれて遂にビートの砂糖を發明し、今日では米、獨、英にも輸出する様になり、遂にケンを壓倒する有様に至つた。又一方に於ては獨、佛の婦人迄が、國家經濟を慮り、輸入

を防ぐ爲に、日常多く自國製のものを用ゐて、外國製品を用ゐないといふ事等は、不言不語の同盟の如く一般に行はれ、自國の商工業を尊重するといふ國風をなして居る。我が國を省みれば、國民の常食として用ゐる米や玉子迄も外國の輸入を仰いで居るといふ有様である。その他衣服の原料から、裝飾品、建築材料、書物、諸器械等凡てのものを輸入して居る。殊に婦人の贅澤品等の輸入も尠からざる有様である。斯くの如く多額の輸入を防ぎ、輸出を勝たせるには、どうしても一般に保護貿易の精神がなくてはならぬ。

(二) 然し單に輸入を防ぎ、國民が質素儉約するのみでは足らぬ。益々殖産を盛んにする途を考へねばならない。之に就いて稍々望みを囑する事が出来るのは國民の半數を占むる二千五百萬の婦人の覺醒である。これ等の婦人が不經濟なる生活を改め、經濟を重んじ、且殖産的になつて行く事が出来たならば、國家の富力に良結果を來す事は多大であらう。今後の婦人はどうしても依頼心を去り、無益なる消費は假令一厘たりとも慎しみ、同じく金錢の消費を掌るにしてもこれを有用に働かせる事に心掛け、また一方に於ては、家庭に化學を應用して、其の生活を豊富にすると共に、國民に發明發見の頭腦を作る事に努めなければならぬ。而して能ふべくは副業を營んで積極的に其

の經濟を助けなければならない。

(三) 今一つは國家が盛んに殖民を奨励しなければならぬ。今の日本は其の範圍其の財源が狹隘である。今後は世界を働き場として活動する様にならねばならぬ。

第二、以上の如き運動は團結して營まなければならない。即ち人道、宗教、義侠心、犠牲の精神の發動が大切である。今日世界の發達を來した原因を調べて見れば多くは團結力にある。

英國もスコットランド、アイルランド、ウエルスを合わせ一國を成してから、其の國力は頓に發展した。米國の諸邦の聯合により、獨逸も聯邦をなして勢力の統一を計り、國力の増進を促して居る。商賣上でも組合組織が出來、次いでユニオンが出來、シンジケートとなり、遂に一大ツラストを結ぶやうになつた。今後我が國家も完全なる組織と精神とを以て、百般の事業が團體的に行はれてゆかなければならない。この國風を育つるには殆んど宗教ともいふべき引力が國民の間に起らなければならない。これ犠牲、義侠の精神であつて、新婦人がこの力を育てる原動力とならねばならない。また必ずその原動力となる事が出來るであらうといふ事を我々は認める事が出來る。即ち本校に於て經驗した範圍内に於ても、其の學生の力も未だ未熟であり、また諸設備も未だ不完全ではあるが、早く既に歐米の大

學にも見る事の出來ない美しい校風が出來た。即ち人の爲に喜んで犠牲になり、天職を信じて進むといふ様な美しい精神が充ちて居る。これ我が國婦人の精神で迷信や頑固な學理に支配せらるゝ事が少く、割合に純乎として居る爲であらう。若しそれ今後の養成如何によつて、國民團結の連鎖とも成るに足る美しい精神が婦人に依つて發揮せらるゝであらうといふ事は、私かに望みを囑する所である。

第三、今後世界は如何なる宗教によつて統一せらるゝであらうか。といふに、

(一) 從來の歴史によると國家の統一は第一侵略的であつた。第二は貿易政策であつた。第三は貿易であつた。貿易も所謂弱肉強食であつたが、今後は商業競争に於て世界が互に有無を交換し強弱助け、眞に四海兄弟主義を保つて行かねばならぬ。

(二) 次ぎに人道的の宗教によらなければならない。今日既に世界の有識者、先覺者は皆この人道的宗教を認めて居る。例へば歐米で最も擯斥し、人類が虐待して居つた猶太人、飽く迄孤立を貫いたその猶太人の中にも世界的人道宗教の鼓吹者が現れ、目下私に我が日本にも來遊してその主義を實現しようとして居るものがある。その他世界の富豪、有数の學者、教育家、政治家等にもこの理想に傾いて來た者が多い。而してこれ等の

識者が日本に着目して、此に於て必ず世界的宗教が最も速かに實現さるゝであらうと期待して居る。即ち我が國は古來宗教的偏見少く、人道的宗教に傾いた信仰を持つて居るからである。我が國民は今後益々人種的、宗教的偏見を除き、各國の期待に反かぬやうにしなければならぬ。

第四、今や日本の擔うて居る、天職を果さんが爲には、大いに婦人の力に俟たなければならぬ。而して婦人によつて社會風教の根本的改良が促されなくてはならぬ。即ち婦人に從來の從順の徳に加ふるに、強き意志と至誠とがなければならぬ。一言以てこれを云へば人格ある、眞に婦人らしき婦人がなければならぬ。我が日本には古來文學的に、又は政治的に、武力的に傑出した婦人は尠くはないが、眞に母らしき、妻らしき、教育家らしき婦人は少ない。西洋にては婦人が天使とか平和とか慈愛とかいふ象徴に用ゐられて居るが、日本では夜叉とか、汚穢とか、罪惡とかいふ象徴に用ゐられて居るのは、誠に嘆はしき極みである。今後は婦人の一大革命が行はれ、その理想が變り、價値が進まなければ、國家社會の調和統一を來す根本となる家庭の調和は行はれない。婦人が中心となつて營まなければならぬ第二維新の偉業の成就是覺束ない。

斯くの如く觀じ來れば、今後五十年の世界の大勢は實に我が

日本が與つて大なる力をなすと共に、從來國家、社會の責任を餘り負はずに過して居つた婦人が重大なる使命を兩肩に擔はなければならぬ。此に於てか男子はもとより婦人も五十年計畫を立て、此の大なる使命を完うせんが爲に非常なる決心を固めなくてはならぬ。

〔家庭週報〕第七十一號・年頭の辭 明治四十二年一月

効果多き思考法

時と力は如何にせば得らるゝか

今日あなた方が最も要求しておいでになるものは何であるかと尋ねるならば、多くの方は『力と時である』と答へるであらうと思ふ。「我々は大なる責任を自覺し、絶えず非常な決心を以て努力して居るのであるが、我々の力は未だ充分でない、時も分らない、實に残念である、困難である。」と言ふ事を度々私は耳にするが、又私自身も常に此の感に堪へないのである。時と力とは或意味から言ふと、二にして一のものである。我々は時の歩みを遅くする事は出来ないが、力を二倍にするならば、一時間に二時間の働きを仕遂ぐるのである。故に力を得る

ならば同時に時も得らるゝのである。然らば我々が最も要求して居る此の力とは何であらうか。學力であるか、體力であるか、感化力であるか、否、どれでもない。之等凡ての力が湧き出づる源の力、即ち事物の深い真相を觀破し、複雑なる思想を統一し、知識を構成する力で、之を短い言葉で言ひ現はすならば、頭腦の消化力、或は思考力とも言ふべきものである。

我々は肉眼を以て宇宙の真相秩序を見る事は出来ない。我々の肉眼は遠き天體の現象を明らかにする事が出来ず、又近くは細胞間に行はるゝ微妙な働きを知る力も與へられてないのである。然し我々は頭腦の働きに依つて、もう少し深い事物の原因を確かめ、遠い所、細かい所迄達する眼力を生み出す能力を與へられて居る。故に今日では望遠鏡を發明して到底人間の肉眼を以ては窺ひ知る事の出来なかつた天體の現象を自由に觀測し、又顯微鏡を發明して肉眼には映らぬ微妙な細胞間の働きをも研究して居る。即ち人間は生來の儘で限界を擴げる事は不可能であるが、人間の頭腦の働きに依つて發明された望遠鏡、顯微鏡の如きものを用ゐるならば、之に依つて宇宙の實在を見る事が出来る。丁度之と同様に人間が發明發見した思考法、即ち今日の最も進んだ知識構成の方法を眞に自分のものとする事が出来るならば、之に依つて我々は大きな力を得、眞理を發見し

て限りなく進んで行く事が出来るのである。科學研究者が望遠鏡、顯微鏡等の發明に依らねばならぬ様に、我々も力の源を掘り當て、内的要求を満足させて進まうとするならば、生れ付きの儘では出来ない。又常識ばかりでは出来ない。即ち人間にだけ與へられた思考力、知識構成の働きに依らなければならぬのである。

思考力を増進する三要件

此の前私は頭腦の不消化病を治し、思考力を恢復し、眞に價値ある有効な思考法を發見するのに必要な三つの點を擧げたが、時がなかつた爲、委しく申す事が出来なかつたから、或はお解りになり難かつたかと思ふ。

第一の構成した知識を確實にすると云ふ事は、如何にして出来るかと言ふと、之は思考力の一つの働きである批判に依らなければならぬ。即ち正當な推理をして、正確な判斷を下さなければならぬ。若しも我々の考へ方が此の性質を缺いて居つたならば、我々の思考、我々の知識は何の役にも立たぬのみならず、却つて之により非常な損害を受けるのである。失敗とか、損耗とか、災とか、世の中の凡ての悪い事は、多くは其の人の思想、知識が確實を缺いて居るからである。

第二の便利と言ふ事は我々が生れ付き與へられた力を十倍にも、百倍にも増進する事の出来る唯一の方法である。そこで便利とはどう云ふ事であるか。例へば若しも銀行家、實業家が毎日取り扱ふ金の勘定に數學を應用せずして、一々實物を以て數へ、又は最も進んだ簿記法を知らないで、只頭腦で覺えて居るとしたならば、實に煩雜であつて、僅計りの金を取り扱ふのに之日も足らぬであらう。丁度之と同じ様に、修養に志す人、研究に志す人が、今日世界で最も進んだ思考法を知らず、又頭腦の訓練を怠つて居るならば、生れ付き如何に多くの力を與へられてもなかなか効果を現す事は六ヶ敷い。斯かる人は數學を知らず、簿記法を學ばないで、銀行を經營し、或は世界的實業を起さうとするのと一般である。

第三の點として申したいのは複雑なる思想を單純にし、今日の複雑な生活を單純にする力で、之は今日思想混亂の時代に生れた青年の頭腦に、確信を與ふる唯一の方法である。複雑を單純にするとは如何なる事であるか。今お解りになりよゝ爲に語學の例を假りて云はうと思ふ。ある有名な語學者は『我々に八百の根語を與へよ、然らば今世界で最大の辭書中の文字をも悉く説明する事が出来る。又我々に二百二十一の概念を與へよ、然らば八百の根語を説明する事が出来る。否、二百二十一の根

語も更に還元して簡單にする事が出来る』と言つて居る。彼の研究に依ると凡ての語源は皆活動にある様である。其の一例を英語で云へば、man と云ふ文字は計る、又は考へる (to measure, to think) と云ふ意味の根語から出て居り、*呼吸* (breathe) と云ふ意味から *may* は (to be strong) と云ふ意味から出たのである。斯く分類して其の根語に還元するならば、幾十萬と言ふ複雑な言葉を縮めて二百餘とし、更に之を縮めて極く簡單にする事が出来るのである。丁度之と同じ様に、我々が思想構成の方法を發見する事が出来たならば、複雑な思想を統一して單純にし、強固な信仰の基礎を作つて大いに力を増す事が出来る。思想の發見は即ち行爲の發見である。故に思想が統一され單純になるならば、之に依つて支配さるゝ我々の行爲も亦統一されて單純になるのである。宗教は神學が作つた信仰箇條に依つて單純になり、力あるものとなつた。今日と雖も複雑な思想を分類、統一して、銘々の信仰箇條を作らなければ、我々は確信を得る事は出来ないものである。しかし我々の云ふ信仰箇條は固定した生命のないものでなく、成長發達するもの、生命あるものでなければならぬ事は勿論である。以上申した三つの點は解り易いために分けたのであるが、素より之は孤立して別々に働くものではなく、互に密接な關係を持ち、相關連し

で働くもので、見方によつては一つの働きと言ふ事も出来るのである。

諸子のなすべき根本の事業

今申した様な頭腦の働き、即ち複雑な思想の要點を捉へ、事物の真相をとり、自分の頭腦を進め、人を動かす、日々新しいものを發見して進んで行くと言ふ働きは、どうも婦人には缺けて居る様である。之は何故であらうか。思考力が誤つて居るからである。自分の思考法に就いて深く反省し、世界で最も進んだ思考法を發見し其の經驗を得る事が、今日あなた方が最も緊急にしなければならぬ根本の事業である。天與の能力を十倍にし、百倍にして、我々の使命に捧げようと希ふならば、先づ如何しても此の基礎から固めなければならぬ。之が本當の修養法である。之が本當の研究の第一歩である。

此の思考力、思考の方法とは何であるか、思考の方法を見出し、其の法則に依つて生活するとは何であるか、今申した思考力を増進する三要件は、如何すれば出来るのか、之が私が先日來引き續いて説いて居る所である。即ち科學と哲學との關係を明らかにし、科學と形而上學との關係を説き、又理想主義、實理主義、代理主義、象徴主義等に就いて説いたのは(本書九二七頁

「如何にして確信の基礎を築くべきか」の項参照)之に依つて今日の生活に缺くべからざる、今日世界で最も進んだ正しい思考の途を見出して貰ひたい爲であつた。此の有効な思想構成、眞理發見の方法を一度でも眞に味ふ事が出来たならば、其の後は何を聞いても讀んでも直ちに之を消化して自分の力とし、生命とする事が出来る様になるのである。然し之を發明するのは實に骨が折れる。人は自から勞せずして只人から寶を貰ふ事ならば好きであるが、夫れを掘り出す爲に、地下幾千尺の暗黒世界へ這入つて土を掘り、岩を穿つて働く事は好まないものである。然し人から貰つたものではだめである。矢張り骨を折つて自分で金鑽を掘り當てなければ、本當の價値は出ない。あなた方が今日爲なければならぬ根本の事も矢張り之と同じ事で、如何に多く人から與へられても、骨を折つて眞に自分で經驗し、自分の中にある力の源を掘り當てなければ、到底あなた方の希望する成長は遂げられない。此の經驗を一度でも眞に味ふ事が出来たならば、非常に價値ある事であるが、此の目的を達する迄には、實に骨が折れるのであるから、充分の熱心と如何しても此の根本を作らなければ止まぬ非常な決心を以てお考へになり、實行に努めなければ、到底此の望みは達せられないのである。然し斯う云ふ深い心の働きは、中々一朝一夕で悉く味ふ事の出来るも

のではないから、一度に進もうとは思はないが、兎に角思考法を發見し、頭腦を開拓する事が最も根本の事業である事がお分りになり、且此の思考法の緒丈だけでも見出して貰ひたいと思ふ。

思想は如何にして構成さるゝか

我々が研究して居るものは思考の方法である。然し之は只方法計りではない。思想が成長發達して行く原理を講究して居るのである。先日私は語學研究の方面から之に就いて説き、語學と思想の發達とは決して別々に出来るものではない、必ず併行して行かなければ目的を達する事は出来ぬものであると述べた。此の思想と云ふものは如何して出来たか、又言葉は如何して出来たかと云ふと、思想は我々の經驗が基となつて、此の經驗の發達したものである。其の發達の順序は、第一に我々は五官に依つて外界の現象、例へば音とか、色とか、光とか其の他種々のものを經驗する。此の働きは感覺である。第二に此の渾沌とした澤山の感覺が、或新しいものと結合して、例へば此の音はピアノの音であるとか、オルガンであるとか云ふ様に、少し複雑な働きをする、之は知覺である。第三は此の知覺を更に分類し、統一した概念で、此の概念を現す爲に作つた符號が言

葉である。即ち第一感覺、第二知覺、第三概念と云ふ順序を経て、初めて言葉が出来、思想が構成されるのである。故にホツプスが云つた様に、言葉は物の名ではなくして概念の名である。即ち人間の思想の象徴である、符號である。言葉を學ぶとか、用ゐるとか云ふ事は、思考すると云ふ事と同じである。言葉を使はないで、我々は考へる事は出来ない。斯く概念を作り、夫れに符號を付けて、思考の機械とした事は、實に非常なる人間の發明である。此の宇宙間の、實に數へる事も出来ない複雑な事物現象を整理して、其の中に法則を尋ね、眞理を見出す事が出来るやうになつたのは、全く此の概念を作る働きを經驗し、又言葉と云ふ便利な思考の機械を見出したからである。然し此の概念も随分多數であつて、之を現す言葉の數は幾十萬と云ふ程である。そこで之では未だ複雑であり、不便であるから、之より一層便利な方法を考へ出した。

概念の概念——範疇

其の便利な方法とは何であるかと云ふと、幾十萬の概念を比較し、抽象し、總括して、更に概念の概念を作る事を發明した事で、之を名つけて範疇 (category) と云ふ。換言すれば範疇とは複雑な概念、思想を分類し、統一して、系統的、秩序的

にしたものであつて、他の平易な言葉を以て現せば、品種、形式、部屬と申しても宜しいかと思ふ。多數の概念を整理して、更に概念の概念を作つた、即ち範疇を作る事を見出したと云ふ事は、實に人間社會に非常な進歩を來した。科學的思想、論理的思想が發達したのは、全く此の範疇を作る事を見出したからで、此の範疇が發達した時に科學は進み、思想界は大いに發達したのである。此の範疇を作ると云ふ事は獨り哲學、論理學に必要であるのみならず、宗教にも、科學にも、必要である。之を眞に經驗するならば、思考にも、讀書にも、談話にも、非常な便利を得て思想經驗を統一し、大いに思考力を増進する事が出来るのである。それで今此の範疇の作り方が解り、又其の意義、價值等を明らかに致して置く事が必要であらうと思ふ。

歴史に依ると、最初此の範疇を作つたのはピタゴラスであつた。然し範疇を作つて最も思想界に貢獻したのはアリストートルである。此の人の考へ方が基となつて、希臘で歸納法が發明され、科學的研究が始められたのである。中世紀に於ては、人間の頭腦が演繹的に働き、其の結果獨斷的迷信的になつた。其の極端なものに反對して出來たのが經驗派である。此の經驗派と、理想派との思想の衝突を調和して新生命を與へたのがカントである。カントに依つて此の範疇は改善され其の後段々幾多

の學者に依つて進化して完全なものとなつて來た。アリストートルとカントの範疇が、後の思想界に及ぼして居る影響は甚大なものであるから、先づアリストートルとカントの範疇の大體に就いて御話し次に今日の科學の範疇を紹介して、あなた方の參考に供したいと思ふ。

アリストートルの範疇は大別すると左の三種ある。

第一、實在の範疇

第二、其の實在を斷定するために用ゐられた言語の模範的範疇、即ち文法の範疇

第三、其の實在を斷定する判斷の範疇、即ち論理

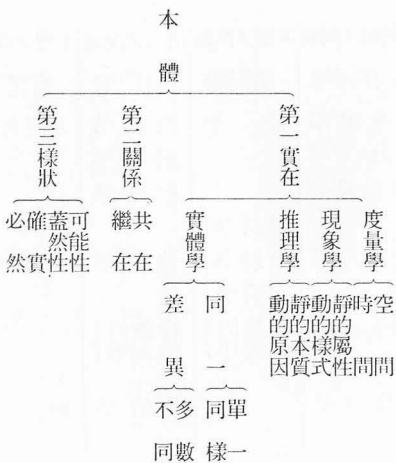
此の三つの範疇は更に細かく種々に分類されてあるが、今其の中の一つの實在の範疇に就いて御話すると、アリストートルは之を左の如く十種に分けて居る。

第一實體、第二分量、第三性質、第四關係、第五場所、第

六時、第七態度、第八所有、第九能動、第十受動

斯様に分類する事が出来るけれど、此の中最高級の實在に相當するものは實質である。そこで範疇は何であるかと言ふと、之は最上、最高の抽象であり、最も根本的の、最も大切な形式であり、品種である。換言すれば根本的の總念である。其の後科學が復興すると共に、アリストートルの範疇も學者間に用ゐ

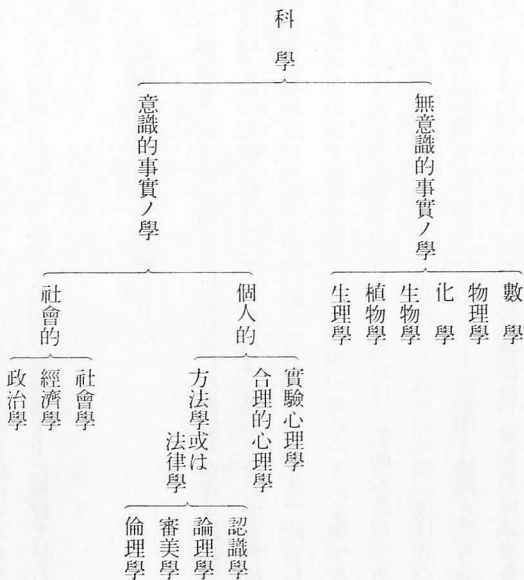
られる様になつて来たが、此の十種を更に縮めて第一實質、第二實質の性質、第三實質の關係と、此の三つに分類される様になつた。



カントに至つて範疇は認識上の必要な形式、即ち判斷の形式として用ゐられた。此の判斷と言ふ事は我々の思考の一部であり、又範疇は論理學の一部である様に考へて居る人があるかも知れないが、之を深く考へると哲學全體となり、又斷定となるのである。此の斷定は我々の知識を作る力である。知識の講成は斷定の働きである。斷定は概念を作る作用の様に、二つの概念の一致、若しくは差異によつて定むるのであつて、換言すれ

ば概念との間の働きを定むるものである。然らばカントの範疇は如何云ふ様に組織されてゐるかと言ふと、大別して第一量、第二性質、第三關係、第四樣式の四ツとし、更に其の一つ一つを三つ宛に分けて、都合十二とした。

つまり此の範疇をアリストートルは一方には實在に用ゐ、一方には論理、或は哲學に用ゐたが、カント及び以後の學者は多くは哲學的、論理學的に用ゐ、又倫理にも用ゐたのである。



今日の科學の範疇は、學者に依り、又其の目的に依つて種々組織が違ふれ共、先づ今日の思想を統一するのに最も廣い一般的のものとして、今の處先づ之を大體の標準として宜しからうと思ふもの二、三を例に擧げて見よう。カントは四大別したけれ共、今日或學者は之を三つに大別する様である。(前頁下表参照)

事實ノ問題	原因ノ問題	價值ノ問題	價值ノ問題	本體ノ問題
現象學	推源學	法則學	目的學	實體學
	物理學	數學	機械學	形而上學
	化學		藥學	
	生理學		治療學	
人類學	心理學	認識學	教育學	靈魂學
		論理學		
	人性學	審美學	實踐的學	
		理論學	倫理的學	
歴史	社會學		政治學	神學

我々が知識を求め、學問するのは人生の問題を解釋せんがためである。今此の目的に従つて分類した範疇を上に擧げて見ると

範疇は實在なりや空想なりや

今御話した事をよく御考へになるならば範疇の内容、意義等に就いては、大抵お解りになるであらうと思ふ。そこで次ぎに問題となるのは、範疇の價值、即ち斯かる形式 (Form) は果して實在であるか、或は人間の拵へた空想であるかと云ふ事である。カントは「形式は思想である、思想は主觀的のものである」と言つて居る。殊にカントの作つた實在の範疇、或は昔からの學者が範疇として擧げたものは、主に空間と時間とであるが、カントの考に従ふと、空間或は時間は、實在の形式である。此の形式は人の頭腦の中で作つた理想、即ち人間の主觀的のものである。換言すれば空間と時間とは、人間が事物を考へる時に用ゐる形式であつて、實在するものではない。只人間が事物に就いて考へる時、主觀的に作つた觀念であると言つて居る。此の考は獨りカントのみではなく、其の他の學者の中にも斯かる形式、例へば數學、幾何學、論理學、倫理學、信仰箇條等は實在ではない、只人間が頭の中で作つた妄想であると考へ

て居た人もある。然し此の考は根柢に於て誤つて居る。成程範疇及び其の他の形式、即ち論理學にしても、數學にしても、之は人間の頭腦で描いた秩序に違ひないが、此の畫は只人間が空想を逞しうして描いたものではなく、實在を對象として寫した寫眞である。實在があるから我々の五官は夫れを感じ、頭腦にも寫すのである。然し今言ふ實在は必ずしも具體的のもの計りを意味するのではない。普遍的の性質、或は宇宙的關係、又は未だ實現されない事物の連合であつても、人間の空想で拵へたものでなければ之は實在である。そこで此の形式、即ち我々の範疇は、唯人工的に頭腦で拵へたものではなくして、其の特性は何か或客觀的實在を代表して居るのであるとすると、先づ第一に我々の問題に最も成り易いのは時と場所とであらう。此の時間と空間とは如何なるものであるかと云ふと、矢張り事物から抽象した觀念であるといふ事が出来る。例へば物と物との關係を考へれば必ず場所と言ふ事を考へざるを得ない。此の物と言ふ觀念を抽象して得たるものを場所と云ふのである。又或事柄に就いて考へれば、時と言ふもの、長さと言ふ考が必ず件ふ。此の長さから抽象したものが時間である。故に時間も、空間も、人間が作つた主觀的のものではなく、矢張り實在である。然らば何に依つて其の實在なる事を證明するかと云ふと、

之れを證明する事は出来ない。然し其の存在は否定する事の出來ぬ事實である。我々は空間を離れて萬有を考へる事は出来ない。神が宇宙の萬有を無にする時があると假定しても、空間が無くなる事は考へられない。人間は無くなる時があるかも知れないが、時がなくなる事は考へられない。即ち時間、及び空間の實在は、證明を要せざる必然的の眞理である。

眞理には此の必然的眞理と、もう一つ偶然的眞理とがある。人間は死するものであると言ふ事は、凡ての人の肉體には永久の生命がない所から歸納して斯う言ふ斷定を下したのである。然し今後非常なる大發見に依つて、人間は死なぬ様にならないとも限らない。故に此の眞理は永久不變の眞理ではない、必然的眞理ではない、偶然的眞理である。宇宙の萬象の中には永久不變のものと、變つて仕舞うものがある。此の變つて仕舞うものを對象として、主に偶然的眞理の發見をなすものは自然科学の範圍である。之に對して純形式科學、即ち數學、倫理學、論理學等の目的は、凡てのものに共通する類似の點、一定不變の形を見出す事で、其の發見せんとするものは主に必然的眞理である。宇宙の凡ての事物には、必ず秩序とか、法則とか言ふ様な形式が存在して居る。其の形式は、各々孤立して居るものではなくして、互に離るべからざる關係がある。換言すれば何

れも全體の有機的關係を形成して居る。そこで此の範疇は宇宙萬有の形式的要素で、此の要素が宇宙の物質的實在を決定して行く働きをとつて居るのである。そこで萬有は常に變化して行くけれども、此の形式、或は範疇は永久不變である。萬有は創造されたものであるが、其の中にある形式は決して創造し得るものではない。絶対無限である。此の形式或は範疇が即ち真理の標準であり、善惡の區別である。故に我々が心眼を開いて、此の宇宙にある永久不易の形式、範疇を發見する事が出来たならば、即ち我々は常に希望して居る永久の生命に生き、不朽の力を内に發見する事が出来るのである。

人生と範疇

私は今形式、範疇は絶対のものであり、永久不變のものであると申した。之は前に真理は變化し、成長するものであると申したのと一寸考へると矛盾する様である。故に此の問題を簡單に解いて置く必要があらうと思ふ。先き程申した様に真理には二つの意味がある。永久不變の真理、即ち必然的真理と、段々變化成長する真理、即ち偶然的真理とである。必然的真理は又、自明の真理と言つても宜しい。カントは之を先天的真理と云ひ、偶然的真理を後天的真理と云つた。理想派の哲學は此の

必然的真理を信じて、之を演繹し推理する研究方法をとるが、之に反して經驗派は歸納法に依つて見出した偶然的真理を重んじ、必然的真理を排斥して居る。此の必然的真理も偶然的真理も、何れも人間の意識に起つた所の經驗には相違ない。然し偶然的真理は五官を通して外から受ける經驗を歸納したものであるが、必然的真理は理性と名付ける中にあるもの、經驗である。形式を重んじ、先天的理性を信ずる理想派と、現實を重んじ、經驗を尊ぶ經驗派とは、實に久しい間思想界の争點であつた。然し今日では其の何れに偏するも誤りである事を見出した。宇宙の眞相は現實と夫れを作る形式との二要素である。即ち理想と現實とは相離るべからざるものであるから、其の何れを排斥して、偏重するも誤りである。

故に真理は永久不易であるかどうかと云ふと、慥かに我々の見出した真理の中には、永久的の要素ある。然し全然誤りのないもののみではない。宇宙には萬古不易の形式或は法則と云ふ様なものがあるにしても、宇宙は無限であり、人間は有限であるから、生れ乍らにして、或は一代の中に宇宙の本體を凡て發見し、宇宙全體を悉く人間の頭腦で解して仕舞ふ事は不可能である。換言すれば今日迄人間が實在を研究して構成した知識は完全ではない。宇宙の真理の凡てではない。然らば此の知識は

全然誤つて頼むに足らぬものかと云ふと、決してさうではない。慥かに其の中には永久不變の要素もある。例へば今日ではカントの説には誤りがある事を發見して居る。然し全然取るに足らぬものではない。慥かに其の中には永久的の眞理として認められて居る部分もあるものである。斯く不完全な所を漸次見出し、足らぬ所を補つて行くと云ふ所から考へれば、我々の探究して居る知識眞理は、矢張り人間社會と共に進化して居るものであると云ふ事が出来る。而して今申したのは主に各方面の知識を總合して構成する渾一眞理、例へば宇宙の本體、神或は人類に關する眞理の如きものに就いてあるが、部分的知識の中にも矢張り變化するものもあり、萬古不易のものもある。即ち二に二を加へれば四と云ふ事、或は幾何學の形式の如きは、昔も亦遠い將來になつても變る事はないのである。此の問題に就いては他日委しく御話したいと思ふ。

範疇或は形式と、我々の生活して居る現實社會の關係は如何。又形式と萬有とは如何なる關係があるかと言ふと、つまり此の形式が永久に存在して居つても、其の形式が現實に現はれて來なければ、何の用もなさぬのである。宇宙の進歩は此の形式、範疇の内容が充實され、始めて現れるのである。然し宇宙の本體、佛教で言へば眞如、キリスト教で言ふ神と言ふ様なもの

のが、即ち形式なのではない。形式及び範疇は宇宙の本體の性の一部をそこに現したものに過ぎないのである。兎に角宇宙には一の大なる形式があり範疇がある。又萬有には悉く其の中に形式がある。我々の身體にも、精神にも、行爲にも、形式がある。此の形式を實現して行く所に無限の力と言はうか、又生命とか、眞理とか、愛とか言ふ様なものがある。即ち眞も、善も、美もこゝにある。形式は決して生命のないものではない。宇宙の現實も、人間の生命も、行爲も、皆此の形式を實現せんとして居るのである。此の形式に従つて實現して行くのである。我々が科學、哲學を學ぶのは其の眞理を悟り、形式を見出し、範疇を作つて我々の生命をも、行爲をも、其の他凡ての萬有をして、其の形式に合致せしめ、理想を實現する爲である。故に此の形式、範疇は、永久不變のものであるけれ共、其の内容は常に完全に向つて進歩して居る。而して此の完全と言ふものも亦、一つの形式であり、範疇である。斯く形式を實現せんとして止まずに進んで行く。其所に我々の努力があり、人生の意義があり、生涯の價値があるのである。猶此の問題はもう一つ深く這入つて、「神とは何ぞや」と言ふ問題を明らかにしなければ、未だ充分ではない。然し之れに就いては、後に御話する時があるであらうと思ふ。兎に角今迄申した事に就いて深く

お考へになり、其の眞意を取つて、あなた方が今最も力を入れて開かなければならぬ所を明らかに悟り、而して此の最も大切な、而も最も閑却され易い根本の開拓に全力を集注して眞の思考法を發見し、信仰の基礎を強固にして、永遠の成長發達を期せられん事を深く望むのである。

〔櫻楓會通信〕第二十三號）明治四十二年一月

婦人の境遇を斯くして開拓すべし

本校の卒業生、即ちあなた方櫻楓會員の今日の生活はどう言ふ様に過されて居るか、之が常に私の最も深く知り度いと思つて居る問題である。母校の方は年を重ねるに従つて毎年幾分か宛進み、校風も健全になり、力も加はつて來て段々経験を積んで行く事が出来る様である。固より未だ不完全な所は澤山あつて、決して満足と言ふ事は出来ないが、兎に角母校の校風、精神は絶えず進んで行く様に信ぜられる。又將來に於ても此の大學教育を終るまで即ち婦人が廿歳位までは擧まず成長を續けて行く事が出来るであらうと思ふ。

併し其の割合に卒業後の進歩はどうであらうか。勿論卒業後もう一層修養を積み、経験を重ねて、益々進歩して止まない人

が少くない事は事實であるが、果して母校に在つた時の様な勢を以て否もう一層の力を現して、婦人の境遇の開拓に努め、又櫻楓會の目的精神に對する熱心が猶々旺んになつて居るかどうか、之が私の最もあなた方から聴きたい所である。毎年我々は各回の卒業生を出すに當つて、最も此の卒業後の進歩に就いて心配し、又卒業生自身も必ず挫折する事なく、生涯を進歩の過程とし、廣い意味で云ふ大學生活を何所までも續けようと誓つて出るのであるが、どうも銘々々の境遇に入ると中々實行が困難なのではあるまいか。之は獨り本校の卒業生のみならず、今日の一般の婦人に甚だ缺けて居る所であつて、大いに研究せねばならぬ問題である。私を見る所に依れば、從來の吾が國の婦人は二十歳位迄は進歩する事が出来たが、二十歳以上になり、一家の主婦になると、學校に居た時の希望も、眞面目な態度もなくなつて、其の代りに何か心配らしく、活氣のない者になり、或は不眞面目になつて仕舞つたりして、どうも品性が降り坂になり易い。その結果第一には、一家の基である夫婦の關係が圓滿を缺き、それから段々年を取ると嫁に嫌はれ、自分の子からも尊敬されなくなる様に、實に氣の毒な生涯が多かつた様である。然し之は實に變體であつて、眞の婦人の生涯とは言はれない。私があなた方に望むのはどうか此の變體にならず

に、年と共に知識も品性も進み、益々力が出来、光明に満ちた生涯をお過しになる事である。そこでどうかして我々は此の目的の爲に力を盡さなければならぬと、日夜考へて居たが、力が足らぬために、又種々の事情からして、今日迄充分に望みを達する事が出来なかつたのであるが、今年からは大いに力を入れて、今少し刺戟を與へ、文明の境遇を與へたいと思ふのである。即ち昨年から週報や、會報、通信等で主張して居る大學擴張の計畫は全く此の希望を達するための一つの方法である。又近く四月から發行する女子大學講義も、其の目的の半ばは卒業生に養ひを與へると云ふ事である。そこで今日は私が常にあなた方に就いて考へ又希望して居る事を御話して、あなた方の考を聴きたいと思ふ。

其の第一は、櫻楓會員は斯う言ふ事業、即ち婦人の進歩を促す爲に必要な事業に對して、最も興味を持ち、進んで熱心を現す様にならなければならぬと言ふ事である。あなた方の實力から申しても、年齢から申しても、最早今日は其の時機に達して居るものと考へられる。然るに今日女子の責任である家庭の生活にしても、亦我が國女子の教育に就いても、誰が最も熱心に考へて居り、盡力して居るかと言ふと、多くは男子に限られて居る感がある。つまり今日では我が國の女子は何事も男子の世

話になつて居る。自分自身では餘り何事もせず、始終他から世話を受けて居り、導かれて居る。丁度之を人に例へれば、未だ父母の養ひを受けて居る子供の時代であると言はねばならぬ。之を歐米の女子教育に比べると全然正反對の有様である。歐米の女子教育の門戸は誰に依つて開かれたか、女子の境遇は何の力に依つて高められたか、之に就ては何人も異論はない。勿論女子自身が開いたのである。女子が自分の力を以て高めたのである。我が國も女子教育の道が開かれてから既に三十年である。此の間女子は大いに知識を與へられ、責任を自覺せしめられたのであるから、最早今日は婦人自身で自分の事をすると云ふ決心が出来なければならぬ。殊に高等の教育を受けたあなた方は、今日如何しても銘々の責任を感じてお起ちにならなければならぬ時である。

例へば今度發行する講義録の如きも、あなた方が最もよく其の趣意を解し、其の目的を達する爲には最も熱心でなければならぬ。夫れから昨年の夏期休暇中に始めて經驗された夏期學校の如きも、今後大いに必要である。又時々一般の家庭の主婦や娘達の爲に、通俗講話會を開いて、婦人に必要な知識を與へる事も大いに有益であらう。それからもう一つは、今迄櫻楓會に缺けて居たのは經濟の方面である。今日は世界で力と言へば經

濟力を意味する位である。今日我が國の婦人を進めるには、此の經濟力を得させると云ふ事が大切である。又婦人の境遇を開拓するには、如何しても生産的の世界を開拓しなければならぬ。今日の一部の米國婦人がする様に、男子と競争して職業をすると云ふ様なものではなく、家庭の爲にも、社會の要求にも、丁度適當な方法を以てするのである。之に就いては大學擴張の經濟的方面に於て大要を申して置いたから、今日は詳しく云はないが、兎に角あなた方は之等の問題に就いてもつと熱心にお考へになる事が必要であらうと思ふ。丁度先日來あなた方も、自分達は支部の事を始め、其の他の櫻楓會の事業に對してもつと／＼深い興味を持たなければならぬと云つて居られた事を聞いたから、私はもう一層深く皆さんがお感じになり、實行に御努めになつて、櫻楓會員の最も熱心な自動的態度を現して貰ひ度いと希望するのである。

次に第二の希望は、あなた方がまづ我が國の婦人の模範になつて貰ひ度いと言ふ事である。即ちあなた方の實行で、女子が學校教育を終つた後も、研究を續け活動をして、益々年と共に進んで行く道を拓いて貰ひたいのである。あなた方が卒業なさる迄は、女子高等教育の批評は常に本校を中心として起つた。併し今日では學校の方針主義等も大抵分つて來た様であ

る。夫れに従つて今日では女子高等教育の價値は、卒業生に依つて定められる様になつて來たと思ふ。又我々の最も重きを置いて居るものは在校中の成績よりも卒業後の發達と云ふ事である。即ち家庭に這入つて如何なる家風を作るか、又教育者としては如何なる感化があるかと云ふ事を最も注意して居るのである。今日迄我が國では女子と云ふものは如何云ふ様に考へられて居たかと云ふと、實に悪いもの、例に引かれ、不眞面目に軽く見られて居つた様である。例へば文學、美術に現れたものを見ても、婦人に就いての想像は大抵低く良くないのである。而して此の風習が、如何に我が國婦人の進歩を妨げたか分らないのである。西洋に於ては婦人と云ふものは尊いもの、清いもの、象徴に用ゐられて居る。母と云ふ名は大人でも、亦老人になつても實に慕はしい神聖なものと考へられて居る。之は何故に斯く異なるのであらうか、つまり理想とし模範とすべき立派な婦人が現れたからである。例へばマリアと云へば實に神聖な婦人として誰からも尊敬されて居る。米國でもメリーライオンと云へば知、情、意の圓滿に發達した模範的教育家として認められて居る。之を我が國の歴史に求めると、紫式部とか、神皇皇后とか、平政子、春日局と云ふ様な傑出した婦人が随分出て居るが、之等は多く政治的女傑として、或は文學の才媛として

優れて居るもので、圓滿なる人格の母、或は模範的の教育家と云ふ様な方面は餘り無かつたのである。そこで私は今後大いに立派な人格の婦人が出て、女子と云ふものに就いての我が國民の概念を改め、婦人と云へば實に天使の如く清く、徳のあるものと思ふ様にしなければならぬ。若し之が出来ないならば、我が國の國風を進める事も、社會の弊風を改める事も出来ないのである。どうか櫻楓會員皆さんは、大いに此の點を自覺して立つて戴き度いのである。然らば如何云ふ様にして行つたならば、あなた方の理想であり、又社會の要求して居る所の婦人になれるであらうか。之は家庭の主婦となる人も、教育に携はる人も、その他如何なる境遇に這入る人でも是非知つて置かなければならぬ問題である。

そこで第三は、此の理想的の人格を現すには如何にすべきかと云ふ事である。之には先づ第一に人との關係が圓滿にならないければならぬ。即ち家族との關係が實に美はしく保たれ、又社會的の關係が圓滿に作られなければならぬ。家庭の關係の土臺は夫妻の關係で、之が完全に出來れば子供の教育も、その他凡ての關係が圓滿になるのである。然し今日教育を受けた人、立派な地位ある人の家庭でも、此の夫妻の關係が美はしく出來て居る所は稀である。兎に角表面は立派な圓滿の家庭の様である

が、其の内實を見ると、實に地獄の如くである。あなた方は年も若く、家庭を持つても未だ二三年しかならぬから、餘りさう云ふ事は知らないであらうが、二十年、三十年暮した人の様子を見ると、年と共に圓滿になるのではなく、却て段々關係が破れる様である。而して之は極く稀にある事ではなく、誰でも餘程注意しないと斯うなり易いのである。然らば其の原因は何であるかといふと、其の主なる原因は、暫くすると直ちに倦きからである、此の倦きると云ふ事は實に不道徳であると責める人があるが、然し之は一概にさう云ふ事は出来ない。何故ならば毎日同じ事を繰り返して、少しも變化し、進歩する事がなければ、自分でも自分に倦きて、實に厭になる。又友達でも少しも進歩しない人は、實に面白くなくなるので、之はどうも已むを得ない人情の自然である。然らば如何にしたならば四十年経つても、五十年たつても倦きないのみならず、却つて益々互に長所を認め尊敬して行く様になれるかと云ふと、それには毎日新しい人間に生れ變る事が必要である。立派な人格、立派な母とは矢張り此の毎日生れ變る人である。始終修養をして行き、新しい知識を求め、生きた経験を積み、幾歳になつても實に青年の様な旺んな精神を以て、益々奮闘して境遇を開いて行く人である。斯う云ふ人は實に七十になつても八十になつても、自

分で倦きると云ふ事を知らない。何時も希望に満ちて進んで行く。他から見ると實に愉快であり、接すると大いなる力を與へられる。逢ふ毎に必ず何か新しいものを受けて居る。斯う云ふ人は誰でも好きである。斯う云ふ人は年を重ねるに従つて益々光が現れて来るのである。そこで如何してもあなた方は斯う云ふ様に毎日進んで行く、少しも停滞して居らない人にならなければならぬ。然し毎日進むのには空では進まれない。汽車でも、電車でも、非常な勢を以て進行するのは、夫々原動力があるからである。我々の進歩の原動力は何であらうか、即ち新しい知識である。そこで今度講義録を出すに就いても、あなた方自身が之を消化して生きた模範を示し、一般婦人の知識を求むる道を開かなければならぬ。人に之を紹介して人の進歩を計る事も有益であるが、先づ自分が善い實例を示すと云ふ事は最も大切である。終りに一言して置きたい事は、もう一つ社會的關係、即ち團體的、有機的關係に注意し、之を完全にすると云ふ事である。從來我が國の婦人は、家族間の關係を圓滿にする爲には身を犠牲にする事も厭はなかつたのであるが、此の社會的關係に就いては實に無關係であつた。又周囲の境遇も夫れを許さなかつたのである。そこで何時迄たつても婦人の仕事は少しも協同的にならない。少しも婦人の力が伸びない。少しも進歩

がないから家族からも倦きられる。友達も互に倦きて仕舞ふ。年を取ると益々心が卑屈になり、陰險になつて、實に世の中の厄介物になるのである。米國が今日の國運を來し、又今後何處迄發展するか分らぬ様に非常な勢を以て進むのは何であるかといふと、實に之は此の社會的關係が完全に出來、協同の精神が旺んになつたからである。今日は如何に偉大な天才でも、社會的關係を無視しては生存が出來ない。何一つする事も出來ない。何か一つの事を仕様と思ふならば、必ず團體の力に依り、有機的關係を作つてしなければ到底駄目である。先程婦人も經濟力を缺いては進歩が出來ないと云ふ事を申したが、經濟力を得るのにも矢張り此の有機的組織を以てしなければ無益である。從來の日本婦人は決して怠惰者ではなかつた。否、大いに生産の方面に働いたのであるが、それは個人が孤立して働くのみで、少しも組織的、協同的にならなかつた爲、婦人の仕事には進歩がなく、大なる力も現れなかつたのである。其の外教育でも、宗教でも、何でも此の有機的組織を以てしなければ、到底大なる結果を現す事は出來ないのである。

あなた方には櫻楓會と云ふ有機的關係がある。あなた方は大いに其の必要を感じて、自動的に此の關係を組織し、又婦人の力で之を進めて行かうと非常なる骨折りをして居られるのであ

る。然し如何しても此の關係を完全にし、あなた方の生活に社會的、有機的の要素を加へなければ、決して從來の我が國婦人の缺點から免れる事は出来ない。即ち日々生れ變つて永久に進歩する事は出来ないのである。そこで私はどうかあなた方が之等の點をよくお考へになり、櫻楓會員の責任を一層深く自覺せられ、心を一にし力を協せて、各自の責任を盡し、櫻楓會の限りなき發達をお計りになる事を望んで止まぬのである。

〔櫻楓會通信〕第二十三號 明治四十二年三月

大學擴張と女子大學講義

大學擴張は何の爲に起つたかと云ふに、時代の潮流、時勢の要求に應じて起りたる所の教育的運動である。然らば憲法、政治、自治制度の發達の爲に國民の政治思想を助長するか、文弱の弊を矯正せんが爲に武道を鼓吹するか、社會の不平均を救はんが爲に下級者に向上的精神を奨勵するか、或は科學的知識の普及、工業的知識の發達、文學的思想の養成、精神的勢力の興隆等、時代に發生する潮流、大勢の推移に對して、國民の向ふ所を指導し、又は其の缺陷を補充して、之に順應せしめんが爲に、其の根本的方策として、教育の普及、知識の開拓の

爲に企てらるゝ運動を稱して大學擴張と云ふのである。大學なる有形組織を擴張し、膨脹せしむると云ふのではなく、大學教育の精神を擴大し、知識を普及せしむることを意味して居る。而して茲に吾々の大學擴張と云ふのは、多くの點に於て西洋のそれとは趣きを異にして居る。

我が國今日の時勢に於ては、何を最も必要とするのであるかと考ふれば、即ち學問知識の進歩―國民頭腦の發達、國力の増進―經濟的實力の發達、國民人格の確立―精神的勢力の發達の三要點である。知力、經濟力、精神力、此の三者が平行して進まなければ、我が國運の發展、國民の進歩、國力の膨脹は望まれないと信するのである。殊に我が國女子の現狀に於て其の必要を痛切に感ずるのである。如何に國民が時勢に應じて飛躍を試み、發展を遂げようとしても、女子にして之に伴ふことが出来なければ、國家は半身不隨に陥り、飛躍も發展も出来ないのである。雷に現代に於て然るのみならず、第二國民の母としての女子が覺醒して起たなければ、將來の國民に對して一層大なる禍害を遺すのである。之を以て、女子たる者の責任の非常に重大なるを思ふと共に、之を覺醒し、其の地位を高め、其の知力、精神を發達せしむる事は、一日も猶豫すべからざる最緊要の問題であることを感ぜざるを得ないのである。これ吾々が大

學擴張の運動を女子の間に開展し、其の事業の一として女子大學講義を發刊することとなつた一の動機である。

此の大學擴張の目的方法には三つの要素を含んで居る。即ち上に云へる要點の如く、教育、經濟、精神の三要素である。是に就き一々詳説することは紙数の許さぬ所であるが、三者互に關聯して離るべからざるものである。而して順序として第一着に施設を要するのは教育的方面である。此の教育的施設の中には種々なる組織が企てられて居る。講義録、巡回講義、巡回圖書館、夏季學校等である。就中講義録は最も緊要のものとして先驅して世に出づる事となつたのである。今一つ最も注意を要することは時代の要求、時勢の聲と云ふことが、往々にして時好とか流行とか、一時の風潮と混同され易いことである。色々の職業的専門的教育の流行に連れ、附加雷同して之に趨るのである。固よりは等の職業技術は必要ではあるが、夫れより一層大切なのは、根本的に女子の思想を開拓し、思想を圓熟せしめ、品性を確立せしむることである。凡そ今日の高等女學校―中等教育を了へたる女子が、四五年間の歳月に注ぎ込まれた諸種の學問知識は、何れも其の一端を窺つて見たと云ふに過ぎないので、眞に之を咀嚼し消化して、其の知識思想を圓熟せしむるのは其の以後の時期十七八歳より二十二歳迄に屬するの

で、高等普通教育の必要なる所以は此處に存し、教育の順序から云ふも、生理的心理的實驗より考ふるも、此の時期を以て最も大切なる、又最も必要なる時期と認めるのである。著しき現象は、教育が實際生活の上に効力を及ぼさない事、家庭に於て社會に於て、女子の知識が實際に應用することが出來ぬことである。是亦實際を離れ、活社會に交渉なき書籍的知識の弊害である。尙一の弊は教育が學校卒業と同時に終了せりとする謬見より來る事である。今日教育の光は如何なる山村僻地にも及べる如くに思はるゝに拘らず、社會の實際生活―個人も家庭も農業も商工業も多く舊態を改めず、進歩なく活動なき有様を現して居るのは茲に起因するのである。思ふに學校教育より得る所ものは知識の萌芽、品性の源泉、實力の種子である。之を生氣あり發達あり生命あるものとして與ふるは教育の本領である。又其の萌芽を凋死せしめず、源泉を涸渴せしめず、種子を萎縮せしめず、益々成長發育せしむるは學生の使命である。而して四圍の境遇に接して適應を誤らず、日進の氣運に伴ふ新知識、新事實を理解し判斷し同化するの實力、品性、知識は、多く社會生活の實情を研究し經驗して初めて圓熟し完成するものである。故に卒業後と雖も、否生涯を通じて研究し自修し努力する必要がある。茲に於て吾々は知識、實力、品性の活ける

萌芽を授くる學校教育に連續して、之を發育し成熟せしむべき養分を與へ、其の研究自修に適當なる暗示と材料を供すべき社會的教育運動の必要を切に感ずるのである。大學擴張の運動は此の必要を充たし、此の缺陷を補はんと欲して開始されたのである。即ち家庭及び社會の實際生活に於て、女子として母として妻として盡すべき職責を全うせんが爲に、其の知識、實力、品性を發成する爲に必要な養分、暗示の材料として茲に女子大學講義を發刊したのである。此の教育的要素の組織、及び他の經濟的、精神的の二方面に關しては、他日題を改めて云はんと欲す。

〔家庭〕第一卷第一號 明治四十二年四月

我が國家第二次の發展を

何によりて遂げんとするか

子弟の教育に熱心なる北米合衆國

我が日本帝國は、第一維新の偉業を漸く成就致しまして、今や第二次發展を遂げんとして苦闘奮戰其の活路を求めて居ると申してもよからうと考へます。獨り内部の改善充實に惱んで居

るのみならず、外部に對して其の計畫、其の用意に就きましては一層の困難に遭遇して居ると云ふより外なからうと考へます。我が國の友邦として、過去五十年間非常に親切なる態度を以て東洋指導に盡した隣國の北米合衆國は、今やその態度を改めて、我が國に對し競争者の地位に立つて參りました。之は國の發達上自然の勢であつて、敢へて怪しむに足らぬ事であります。この我が國に最も關係深き北米合衆國は、今後二十年に於きまして、東洋の天地に大活劇を試みんとして今や其の用意に着手して、彼等には稍々成算が立つて來たと云ふ態度を示して來ました。彼等の計畫によれば、今より二十年後には米國の人口は一億幾千を算し、其の富力は六千億と云ふ巨額に達するのであります。而して尨大なる資本を用ゐて、今や世界無比の大國民を養成せんと試みつゝあるのであります。此の頃到達した報告によれば、今日合衆國は國民教育の爲に九億と云ふ金を用いて居ります。之を彼の總歲出二十八億に比すれば、實に三分の一を子弟教育に用ゐて居るのであります。

第一に斯くの如き事は、實に國力を増加する最大原因であります。一例を云へば彼等は毎年約百億の富を加へつゝあるのであります。

第二は斯くの如き教育は、國の犯罪者を減ずるのであります。

す。先ず彼等はアメリカン・インデアンに施したる教育の効果を認め、此の経験を總ての貧民、下層社會に應用して、同様の効果を擧げて參つたのであります。

第三には斯くの如き教育は貧困を防止するのであります。無能力の國民を遞減し、無知無頼漢をして相當なる職業を得せしめ、無用なる人民を有用なる國民に變ずる此の三者は、實に教育が國家の經濟に及ぼす効果であります。

第四には倫理的効力であります。彼の國の教育は國民をして男女貧富貴賤の別なく、總て人たるものゝ教育を受くべき特權を發見して、其の結果は大いに個性を發揮したのであります。

第五は斯くの如き教育は、實に合衆國の國民調和力であると云ふ事を見出しました。即ち知識思想の進歩は貴賤貧富、若しくは人種間の軋轢を減少し、偏見誤解を去り、目下一億に垂んとして居る國民を調和統一する唯一の力なる事を證明したのであります。過去一世紀に於て、彼は最も力を教育に注いで、今や教育の普及發達は經濟的に倫理的に及び、國家政治的に最も顯著なる効力を現すと云ふ事を證明し、猶進んで現今の教育の改良發達を計り、努力奮闘一日も油斷をせぬ、止まる處を知らないと云ふ勢を示して居ります。

我が國の現状如何

此の我が對手の國に對して、我が國家の準備、或は注意は、果して如何なるものでありませうか。我が國の富力は二十年後に於て、果して幾何の増加を見る事が出来ませうか。只今負うて居る二十億の借金は何年かゝつて償還し能ふ計畫が立ちますか、果して我が國民は世界的工業的競争に堪へ得る確信が出来て參つたでせうか。平和的戦争の軍備費即ち我が國の教育費は、今日追加しても約四千萬圓であります。之を我が國費に比ぶれば實に十五分の一であります。猶此の現状を見て憂慮する者も餘り少いかの感が御座います。果して我が國民は斯くの如き微弱なる教育、薄弱なる國力を以て大活劇場裡に立ち、勝利を得る見込みを立つる事が出来ませうか。茲に至つて如何なる經綸家も如何なる政治家も如何なる實業家も行詰らざるを得ないかと考へるのであります。之は果して我が國民が質素儉約によつて切り抜け得るか、或は軍備縮少の如き方針を以て此の難關を通り得るか、否斯くの如き消極的手段のみに由つて、第三の發展を期する事は困難でありませう。然らば茲に何か新財源、新事業を見出して、活動の力を加ふるにあらざれば、到底我が國の運命を開くと云ふ望みは絶えるであらうと考へま

す。此の新財源、新勢力を見出す事は、決して容易な業ではありませんが、併し決して不可能の事ではない。又其の道も一にしては足りませんが、私は茲に現今我が國の財力を二倍にし、我が國家の事業を二倍にし、浪費を半減し、我が國の勢力を二倍にするの道がある事を確信するので有ります。

我が國力を二倍する途

この新財源、新勢力とは、果して如何なるものでありませうか。之は自然物又は自然の力を指すに非ずして、此の自然力を發見し、人間力を二倍に増加する事でありませう。是迄半人前に取扱はれて居た我が國婦人を一人前の國民とし、未だ眠りより醒めざる婦人を覺醒せしめ、國家の義務の半ばを負はしめ、二千五百萬の新財源、新勢力を我が國家に加へることであります。現今家庭に於ける我が國婦人の位置は稍々は認められて來ましたが、猶十分とは申されません。況して國家社會に於て婦人の位置は正當なる解釋を得て居るのでありませうか。

古來我が國では、婦人と子供とは國民の仲間に入らずに居なかつたのでありますが、同じく人間であつて、國家の一部を形成する婦人と子供とを、國民の數に入れぬと云ふ不條理がありませうか。然しながら、この婦人の力は未知の力、未開の荒野

に屬して居るのであります。我々は此の婦人を覺醒致しまして、其の家庭を擴張して社會大とし、個人を擴大して國家大とし、眞に我が國婦人も自ら國家國民の仲間入りを爲し、眞に男子界と婦人界と相扶助し、一致協同して、眞の國民的活動を爲す事が出來たならば、茲に始めて未知の力、未開の荒野を開拓する事を得て、二千五百萬の新勢力を増加する事が出来るのであります。

要するに現時の我が國婦人は、未だ個人として個人性も十分に發現して居らない。従つて、銘々の使命を完うする事も出來て居りません。まして家庭に於て、國家社會に於て、其の社會性を認むる事が遺憾ながらまだ出來て居らないのであります。實に我が國婦人は、此の文明の世に生れて孤獨分離の生活を營み、之を組織統一する處の機關を持たないのであります。個々別々の範圍を未だ脱し得ないのであります。併し今後の賢母良妻として、婦人の眞價も、家庭改良の實を擧げる事も、國民的自覺も、社會改善も、即ち婦人自身の幸福も、家庭の安寧も、國家、社會の完成も、婦人が社會性を發揮して、眞に相互に關係あり、連絡ある者となり、國民たる眞價を現すに非ざれば、到底我が國婦人の使命を完うする事は不可能の事であらうと考へます。

本校の教育主義

如上の必要により本校は當初より婦人を先づ人として教育し、第二に賢母良妻即ち賢婦とし、第三に國民として教育する方針を取りました。第一婦人を人とすると云ふ事は、我が國婦人に決けて居る人たるの性能を啓發し、品性、知識、實力を養成する事、第二の賢婦といふのは、婦人として殊に今日の我が國日本の新奮思想衝突の調和の出来る處の婦人の特性を發揮し、しかも天職を確信して如何なる家庭にも、如何なる學校にも順應する事の出来るもの、換言すれば如何なる社會も要求する處の婦人の徳性を培養する事に努めるのであります。

第三に最も力を盡しました事は、國民として世界の大勢、國家の必要に適應し得る處の智徳兼備の婦人を作らんとしたので御座います。之は獨り教室内の教育のみならず、會、係、寮舍等、總ての關係を通じまして、此の全體が相連合し、相組織して、自動的に此の機關を動かして、此の校風の充實を計り、實際の社會國家に對して義務責任を完うする力を養はしめん事を期したのであります。而して本校今日の卒業生は最も之に力を注ぎまして、今年一年に大いにその實の見るべきものを擧げたのであります。その結果は纏めて「係の報告」と云ふ冊子にし

て印刷に附したのであります。この報告を見ても其の結果は極めて幼稚であつて、云はゞ草木の萌芽の如きものであり、やうやう孵つた雛の如きものであります。然し此處迄達するには眞に生みの勞苦を要したのであります。

元來本校が女子大學と云ふ名稱を附けましたのは、獨り高等教育の學府たるのみならず、第一に只今述べました我が國婦人の天職を完うするに足る處の品性實力を養ひ、第二に卒業後一生かゝつて、即ち墓穴に入る迄自分を進め、家庭を改良し、社會を改善して止まない、其の精神及び其の使命を完うせんが爲に、一致協同して、大學生活を生涯續けて行くと云ふ考から名づけたのであります。此の意味から申しますと、本校卒業生の組織して居ります櫻楓會は、實に我が國高等教育の爲に重要な機關であります。

本校卒業生の組織になる櫻楓會

この櫻楓會もまだ誠に幼稚なものであるが、家庭、社會、教育の三研究部に分れ、互に連絡ある有機體として、段々と成長發達して進んで居ります。只今全國及び外國のも合せて五十三の支部を有し、會員は本校卒業生及び在學三年生、又會友、其の他有志婦人の補助團員等を加へて千幾百に垂んとして居りま

す。其の事業の一部として昨年發表しました通信講義、即ち大學擴張も其の緒につきましたが、之も最初より三千に越ゆる會員を得ました。この櫻楓會員及び講義録の會員及び本校在學生の千餘名を加へますれば、優に五千の我が國婦人は生命ある團體となつて、或勢力を發現せんと來つたのであります。故に私は今日、我が國に於て、まだ國家的勢力と認めなかつた婦人の世界を開拓し、又國民としての婦人の本領を自覺し、責任を負ひ、其の使命、天職の爲に如何なる責任をも辭せず、如何なる困難にも堪へると云ふ決心ある婦人のある事を認めて、茲に新勢力を我が國家の爲に加へ、此の二千五百萬の婦人の勢力によつて、我が國家の第二次の發達を遂げんことを切に希望致すので御座います。

〔「家庭週報」第百八十四號・第六回卒業式告辭〕

明治四十二年四月

